

第87図 第33号住居跡カマド

第32表 第33号住居跡出土遺物観察表 (第88図)

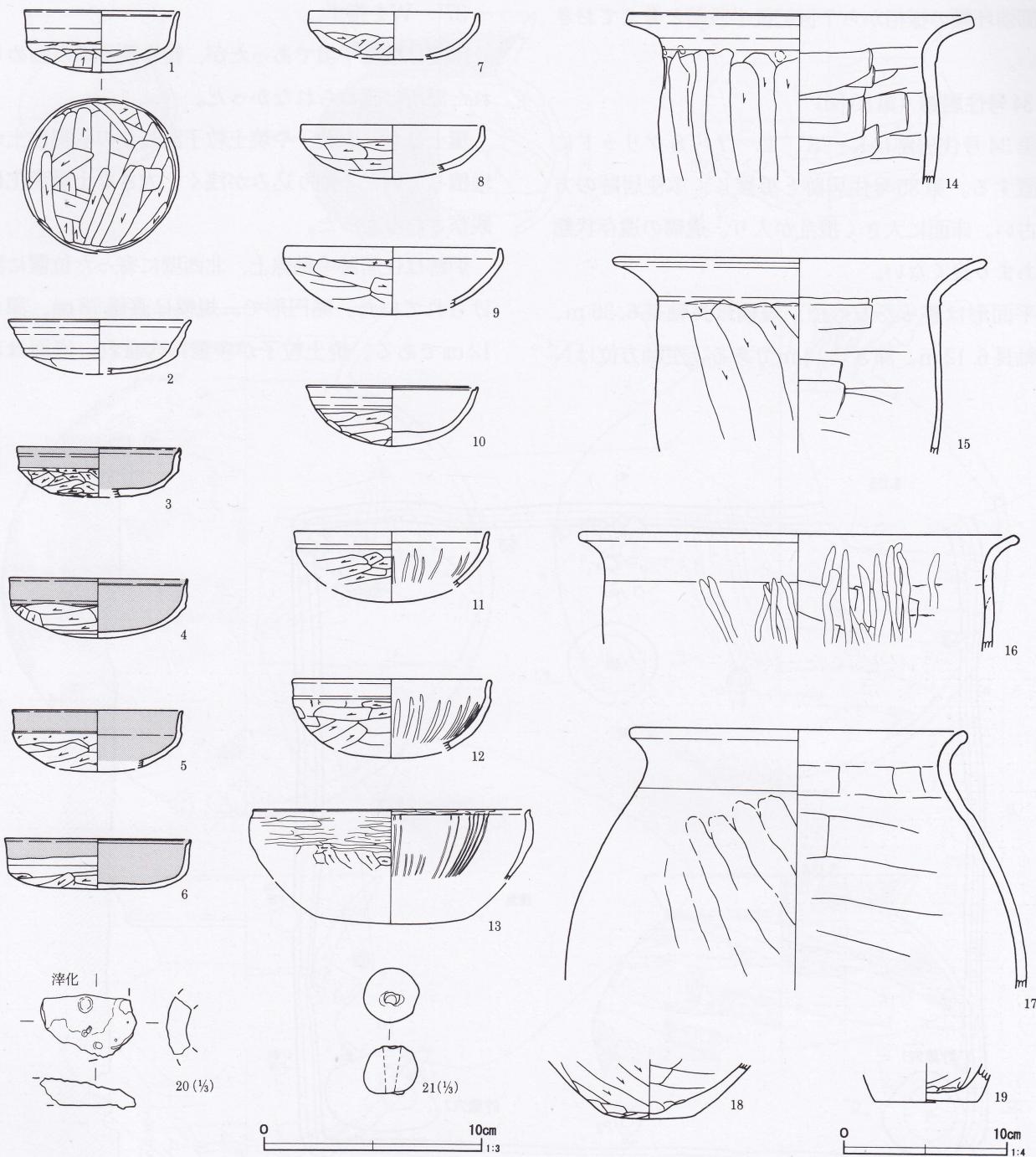
番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎 土	焼成	色調	出土位置・備考	
										横	縦
1	土師器	壺	9.5	3.8	—	90	I・J	良好	黒褐	No.3・7 (床+17~19)	統比企型壺 無彩
2	土師器	壺	11.2	3.9	—	60	C・I	良好	明褐	No.8 (床+31)	有段口縁壺 底部風化し調整不明瞭
3	土師器	壺	(10.0)	3.1	—	25	E・H・I	良好	明褐	統比企型壺	口縁外面及び内面赤彩
4	土師器	壺	(11.0)	3.7	—	65	D・H・I・J・K	良好	褐	No.4 (床+22)	口縁外面～内面赤彩 統比企型壺
5	土師器	壺	10.5	3.6	—	40	E・G	良好	褐	統比企型模倣壺	口縁外面及び内面赤彩
6	土師器	壺	(11.4)	3.1	—	25	H・I・J・K	良好	褐	カマド 統比企型壺	口縁外面及び内面赤彩
7	土師器	壺	(10.2)	2.9	—	20	C・I	良好	橙褐	北武藏型壺	
8	土師器	壺	11.0	2.9	—	25	C・E	良好	褐	北武藏型壺	やや風化
9	土師器	壺	(13.2)	3.7	—	15	C・D	良好	橙褐	確認面	北武藏型壺
10	土師器	壺	(10.5)	13.7	—	60	C・I	良好	淡褐	No.2 (床+23)	暗文壺系無文壺 北武藏型
11	土師器	壺	(11.8)	3.5	—	20	C・I	良好	明褐	確認面	内面粗い放射暗文
12	土師器	壺	(12.0)	4.4	—	20	C・I	良好	褐	確認面	内面粗い放射暗文 下野系か
13	土師器	椀	(17.0)	4.3	—	15	C・I・K	良好	明褐	確認面	北武藏型 内面放射暗文 外面ミガキ
14	土師器	甕	(21.0)	10.4	—	30	C・I・K	良好	淡褐	No.1 (床+16)	器壁厚い 内面ヘラナデ(ケズリ風)
15	土師器	甕	(22.6)	11.9	—	15	C・G・H・I	良好	橙褐	胴部外面ヘラケズリ	内面ヘラナデ
16	土師器	甕?	(26.6)	7.1	—	15	A・E・I・K	良好	淡褐	胴部外面ナデ+雑なミガキ	
17	土師器	壺	(20.0)	15.7	—	20	E・I	良好	褐	確認面	胴部外面ナデ 内面ヘラナデ
18	土師器	甕	—	3.5 (5.8)	20	C・I	良好	淡褐	胴部及び底部ヘラケズリ	内面ヘラナデ	
19	土師器	甕	—	2.4 (6.4)	45	C・E・L	良好	褐	胴部ナデ	内面指ナデ	
20	土製品	羽口	確認面	長さ4.5cm	12.16g	通風孔扇端部は黒色ガラス質に滓化	胎土に白色粒子多量混入				
21	土製品	土玉	最大径2.6×2.6cm	最大高2.2cm	孔径0.4~0.7cm	残存率100%	12.39g				

ある。P 5・P 6 は掘り込みが浅く柱穴とは異なる。

土壙は2基検出された。第1号土壙は住居跡中央部にあり、不整楕円形である。規模は長径0.76m、短径0.38m、深さ0.15mである。土壙内には砂岩の破片が散乱していた。覆土中には焼土が多く、底面はやや弱く被熱していた。第2号土壙はカマド前

面にあり、不整円形である。直径0.65m、短径0.54m、深さ0.09mである。覆土中に焼土を多く含み、底面は強く被熱していた。いずれも炉跡状の被熱面を伴う点で共通するが、性格は不明である。

出土遺物は全て破片で、床面よりも10数cmまたはそれ以上浮いた位置から出土した。土師器壺・皿・



第88図 第33号住居跡出土遺物

甕・壺・瓶、土玉、羽口がある（第88図）。1・3～6は続比企型壺である。1は続比企型壺であるが、赤彩されていない。6はカマド内出土。2は有段口縁壺。覆土中層出土。第2号土壙には伴わない。7～9は北武藏型壺、10は北武藏型の暗文壺系無文壺。暗文壺の器形・つくり方であるが内面の放射暗文は施文されない。11・12は内面に粗い暗文を施す丸椀型の壺。同一個体かもしれない。口縁部形態

は北武藏型暗文壺とは異なる。下野系か。13は北武藏型の暗文瓶。14・15は土師器甕。16は胴部ナデ後、粗いヘラミガキ調整が加わる。瓶、または下野系の甕か。17・19も胴部外面ナデ調整で、武藏とは系譜を異なる可能性がある。20は鞴羽口先端部。21は土玉である。その他、図化できなかつたが炉壁片が18.16g出土している。

確認面から出土した遺物の帰属は不明確であるが、

土師器壺類の様相から7世紀後半段階と考えておきたい。

### 第34号住居跡（第89図）

第34号住居跡はK-8、L-7・8グリッドに位置する。第35号住居跡と重複し、本住居跡の方が古い。床面に大きく攪乱が入り、遺構の遺存状態はあまり良くない。

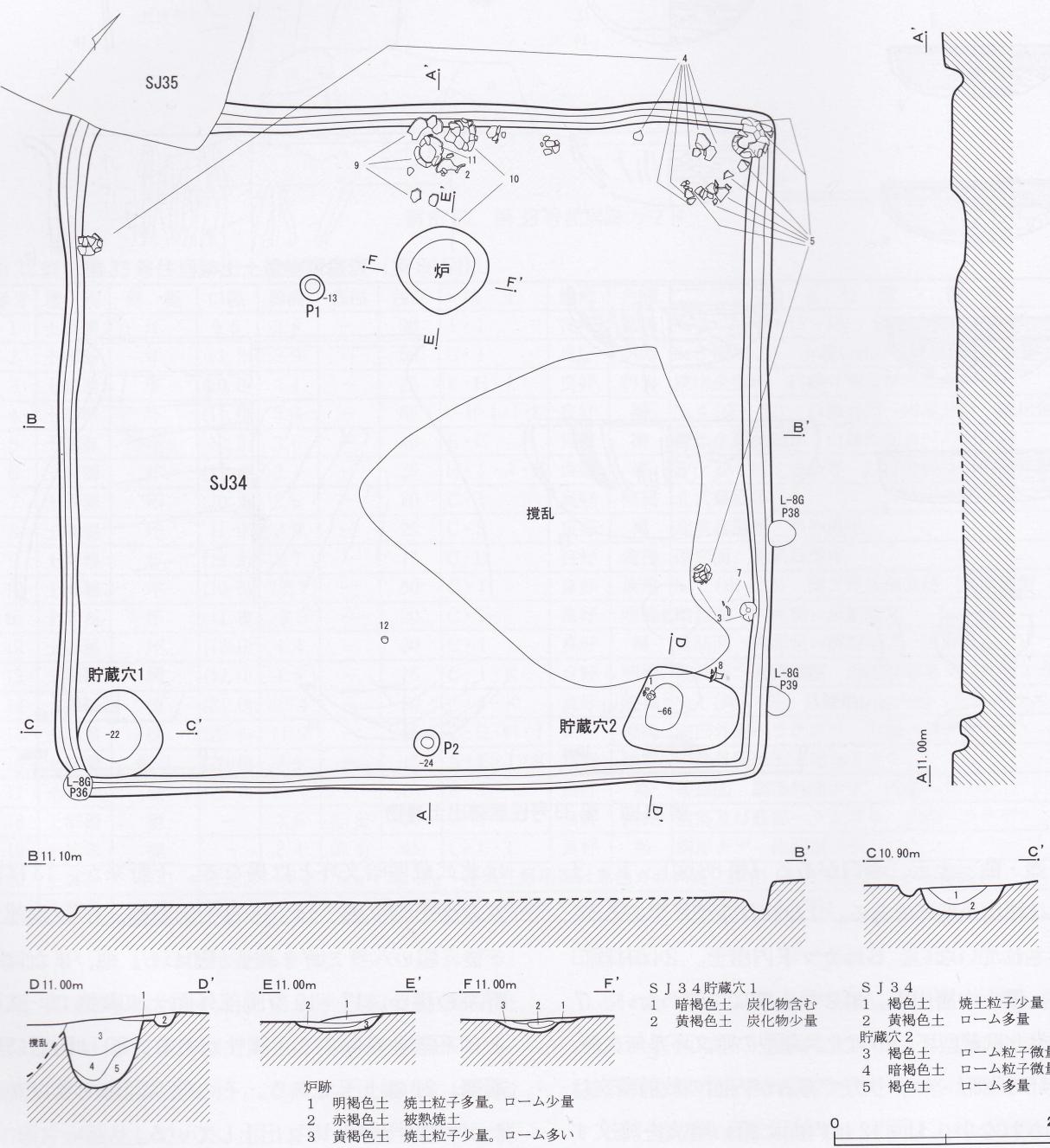
平面形は整った方形で、規模は長軸長6.36m、短軸長6.12m、深さ0.14mである。主軸方位はN

-37°-Wを指す。

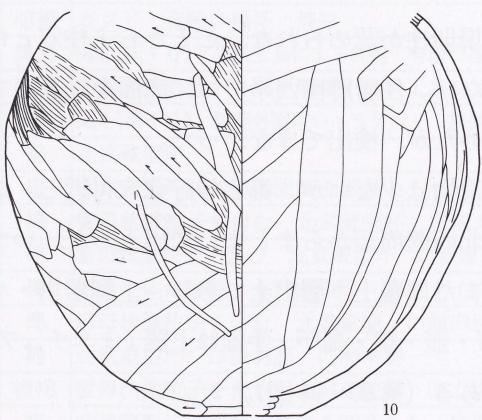
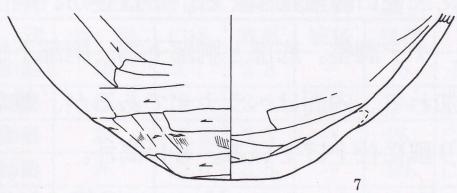
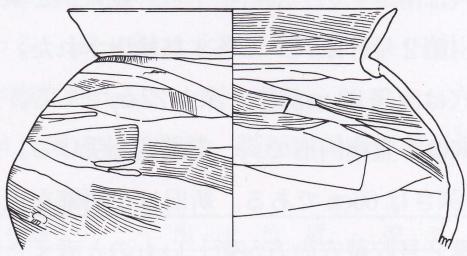
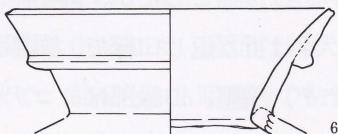
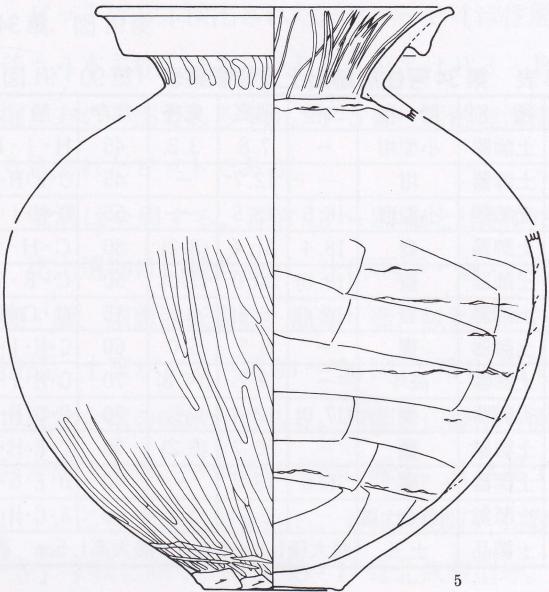
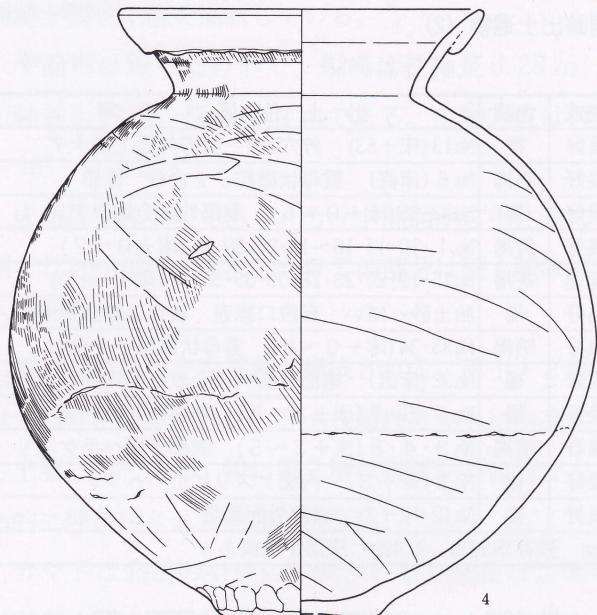
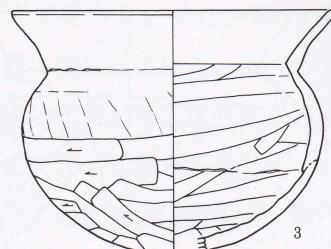
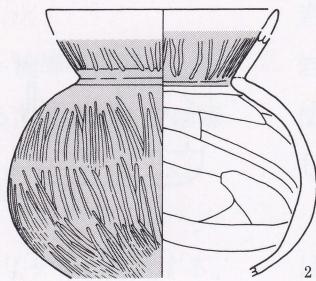
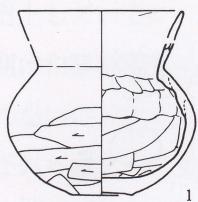
床面は概ね平坦であったが、特に硬く踏み固められた箇所は認められなかった。

覆土はローム粒子や焼土粒子混じりの明褐色土が堆積していた。掘り込みが浅く、大きな土層変化は観察されなかった。

炉跡は住居跡中軸線上、北西壁に寄った位置に設けられていた。略円形で、規模は直径78cm、深さ12cmである。焼土粒子が多量に含まれ、底面はあ

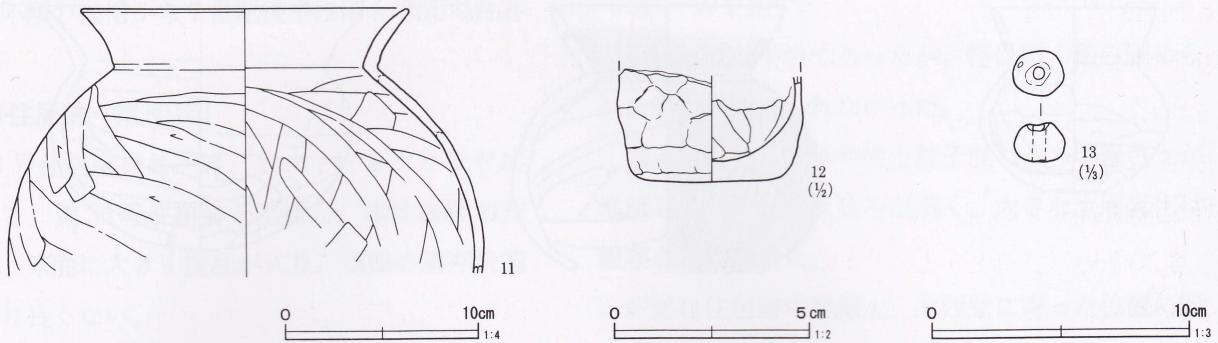


第89図 第34号住居跡



0 10cm 1:4

第90図 第34号住居跡出土遺物 (1)



第91図 第34号住居跡出土遺物(2)

第33表 第34号住居跡出土遺物観察表(第90・91図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	出土位置・備考
1	土師器	小型埴	—	7.8	3.2	45	H・I・K・L	良好	褐	No.13(床+53) 貯穴2内 胴部外面上端ナデ
2	土師器	埴	—	12.7	—	45	C・E・H・I・L	良好	明褐	No.6(床直) 雲母状微粒子を含む 赤彩
3	土師器	小型壺	16.5	12.5	—	55	D・H・I・K・L	良好	褐	No.33・35(床+0~6) 胴部外面上端ナデ
4	土師器	壺	18.4	31.4	(8.2)	80	C・H・I・K	良好	黄褐	No.1・10・14・16~18・27・29・31(床+0~7)
5	土師器	壺	(18.0)	30.0	(7.0)	50	C・E・L	普通	茶褐	No.15・19・20・23・28・30・35・36・38(床+1~13)
6	土師器	壺	(16.4)	6.5	—	15	C・G・H・I	良好	褐	胎土砂っぽい 有段口縁壺 複合口縁部指頭痕
7	土師器	甕	—	8.5	5.0	60	C・H・I・K・L	良好	明褐	No.33・34(床+0~6) 雲母状微粒子を含む
8	土師器	高坏	—	9.7	(14.8)	70	C・H・I・K・L	良好	褐	No.32(床直) 裙部外面ヘラミガキ 内面シボリ目
9	土師器	甕	(17.0)	12.4	—	70	C・G・H・I・K	良好	褐	No.3・5・7(床+3~5) 胴部ハケ後ナデ
10	土師器	甕	—	20.7	(6.2)	50	C・E・H・I・L	良好	暗褐	No.3・4・8(床+2~5) 胴部外面ヘラケズリ
11	土師器	甕	16.6	13.7	—	40	D・E・G・H・I	良好	褐	No.5(床+3) 内面ケズリに近いヘラナデ
12	土製品	手捏ね土器	—	2.9	3.8	90	A・C・H・I・K	良好	褐	No.12(床+3) 底部外面黒斑
13	土製品	土玉	最大径1.8×2.0cm	最大高1.5cm	孔径0.4cm	残存率98%	4.42g	—	—	頂部使用痕あり

まり強くはないが、被熱していた。

貯蔵穴は南コーナー部(第1号貯蔵穴)と東コーナー部(第2号貯蔵穴)に各1基検出された。第1号貯蔵穴は直径80cm前後、深さ22cmである。第2号貯蔵穴は不整楕円形で、一部攪乱を受ける。長径108cm、深さは66cmである。新旧は不明確な点もあるが、第2号貯蔵穴の方が新しいものと考えた。

ピットは2本検出された。いずれも深度が浅く、配置に規則性が認められることから主柱穴とは考えられない。住居跡南西半では、床面を除去して確認に努めたが、検出できなかった。

出土遺物は少ないが、第2号貯蔵穴付近と、炉跡北側の北西壁周辺からまとまって出土した。いずれも床面または覆土下層出土である。土師器埴・小型壺(鉢)・壺・甕・高坏・手捏ね土器(ミニチュア)・土玉がある(第90・91図)。

1は埴。第2号貯蔵穴内覆土上層から出土した。口縁部を欠く。2は大型の埴で、外面と口縁部内面

は赤彩される。口縁部のミガキは間隔が開いており、暗文に近い。3は壺としたが、鉢か。4~6は複合口縁の壺。4は折り返し口縁で、頸部以下粗い刷毛目(木口ナデ)調整。口縁部はヨコナデ。頸部下端に指頭圧痕を顕著に残す。5は粗いミガキ調整。6と共に二重口縁風につくる。7は甕か。胴部は刷毛目後、ナデ調整。底部と胴部下端、胴部下位はケズリが加わる。内面はヘラナデであるが、雑な調整でケズリ風に仕上げている。8は高坏。

9は甕。つくりはやや雑で、口縁部はかなり歪む。全体に刷毛目整形後、口縁部はヨコナデ、胴部はヘラナデ。一部は光沢があり、ヘラミガキ風の効果を生んでいる。10は甕。刷毛目後、ヘラナデ。一部ヘラミガキ風に仕上がる。直接接合しないが、9と同一個体の可能性が高い。10は甕。口縁部はヨコナデ。胴部はヘラケズリ後、ヘラナデ。光沢を持つ。12は手捏ね土器。口縁部を欠く。図化した以外に、発泡して軽石状になった炉壁または羽口片が25.02

g 出土している。

時期は和泉期である。組成に壺・椀等の供膳器が含まれることから、和泉期であっても末葉までは降らないと考えられる。

### 第35号住居跡 (第92・93図)

第35号住居跡はK・L-7グリッドに位置する。重複する第34号住居跡を切って構築され、第13号溝跡が覆土上層を横断している。

平面形は整った方形で、規模は長軸長6.28m、短軸長5.94m、深さ0.51mである。主軸方位はN-18°-Wを指す。

床面は概ね平坦である。カマド前面から主柱穴に囲まれた住居跡中央部にかけての部分は硬く踏み固められていた。

覆土は暗褐色土を基調に構成される。第1・2層は自然堆積と思われる。3~5層はカマドに由来する土層、6・7層、特に第7層は堆積が不自然で人為的に埋め戻された可能性が高い。

カマドは北壁の中央に設置される。全長は2.31mと長大である。燃焼部は長さ1.08m、壁を僅かに切り込んで構築され、壁外に長く延びる煙道部に続く。燃焼部幅は0.45mで、底面は皿状に窪む。

袖部は幅狭で、黄褐色から暗褐色の粘質土を積んで構築されていた。左右袖部の最下層には凝灰質砂

岩の小塊が据えてあった。また、第19層中にも砂岩の粒子が多量に混じっていた。他のカマド袖石に使用された砂岩に比較してあまりに小さく、袖石としての実用性に乏しいと思われる。

貯蔵穴はカマドの東脇に位置する。楕円形で規模は、長径118cm、短径63cm、深さ45cmである。底面は2段に掘り込まれていた。

ピットは8本検出された。P1~P4は住居跡に伴う4本主柱穴である。P6・P7はP3・P4の掘り方の一部であろうか。P5は住居跡埋没後に掘り込まれたピットである。

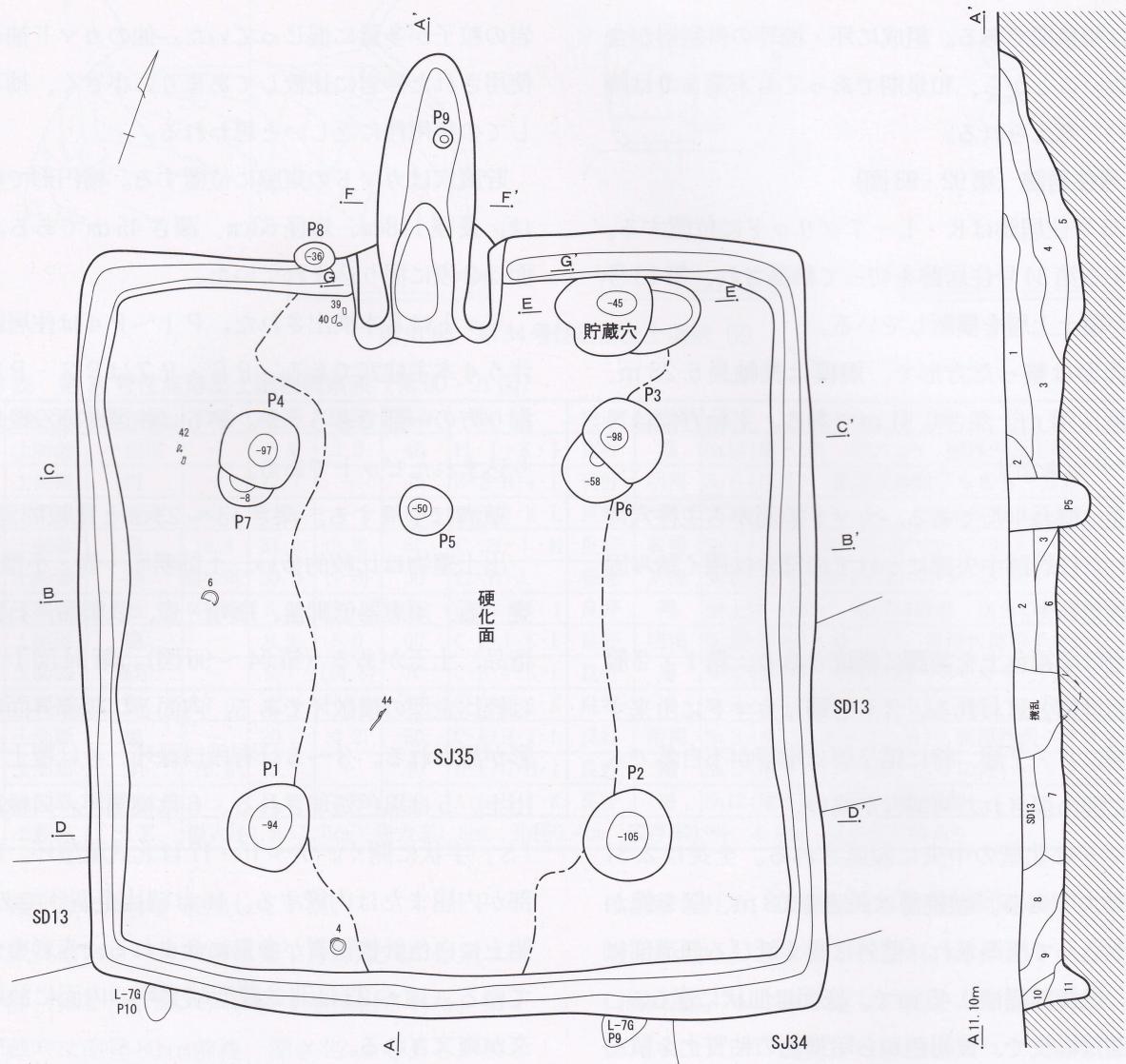
壁溝は全周する。深さ13~23cmと比較的深い。

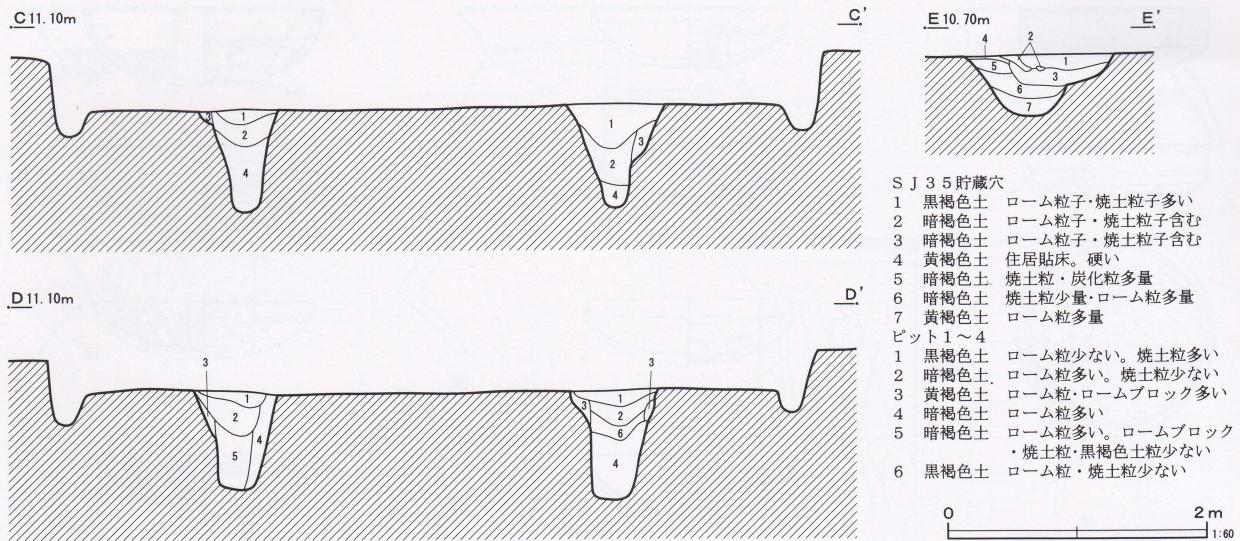
出土遺物は比較的多い。土師器壺・壺・小型甕・甕・甌、須恵器低脚盤、瓶類・壺、鉄製品、石製模造品、土玉がある(第94~96図)。第94図1・2は続比企型の模倣壺である。内面と口縁部外面に赤彩が施される。3~5は有段口縁壺。4は覆土下層出土。5は黒色処理される。6は模倣壺。口縁部は「S」字状に開く。7~15・17は北武藏型壺。口縁部が内屈または内彎する。16は続比企型壺である。胎土に白色針状物質が多量に含まれる。赤彩を欠いている。18~23は北武藏型暗文壺。内面に放射暗文が施文される。

24は須恵器低脚盤。脚部内面と壺部外面に自然

第34表 第35号住居跡出土遺物観察表(第94・95・96図)

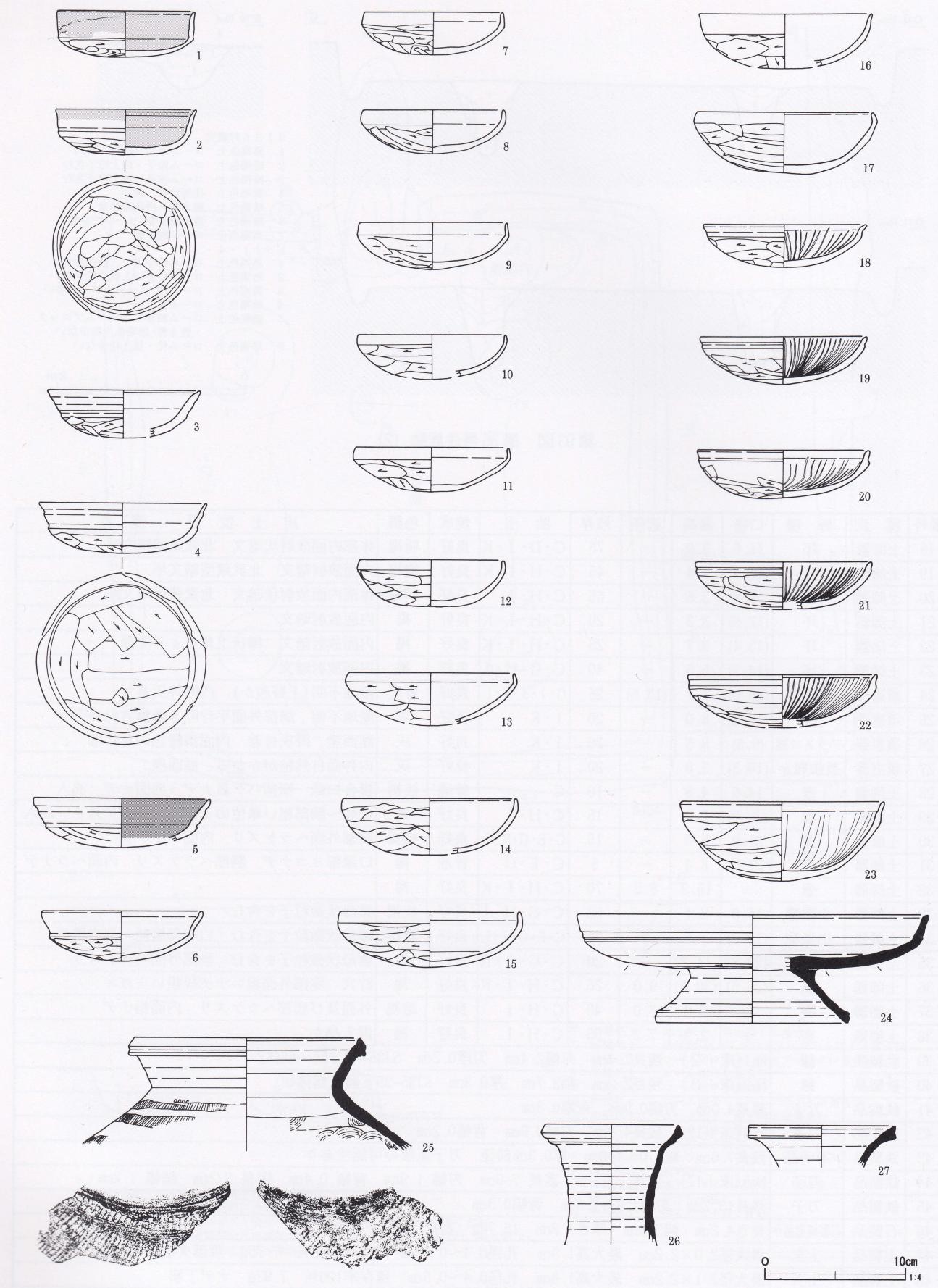
番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	出土位置・備考
1	土師器	壺	9.7	3.8	—	75	G・H・I	良好	淡褐	続比企型壺 口縁部外面及び内面赤彩
2	土師器	壺	10.0	3.2	—	100	E・H・I・J・K	良好	褐	続比企型壺 口縁部に補修痕あり 赤彩
3	土師器	壺	(10.8)	3.3	—	25	C・G・H・I	良好	明褐	カマド 有段口縁壺 無彩
4	土師器	壺	12.0	3.6	—	95	C・H・I・K	良好	淡褐	No.6(床+6) 棒状工具による沈線 有段口縁壺 無彩
5	土師器	壺	(12.6)	3.0	—	10	C・H・I・K	良好	淡褐	内面黒色処理 外面不明確 棒状工具による沈線
6	土師器	壺	11.4	3.5	—	75	C・H・I・K	良好	褐	No.4(床+7) 体部外面粗いヘラケズリ 模倣壺 無彩
7	土師器	壺	9.7	3.0	—	85	C・H・I・K	良好	褐	北武藏型壺
8	土師器	壺	10.0	3.1	—	90	C・G・H・I	良好	褐	北武藏型壺 体部内面凹凸顯著
9	土師器	壺	(10.5)	3.3	—	30	C・E・H・I	良好	褐	雲母状微粒子を含む 北武藏型杯 内屈タイプ
10	土師器	壺	(10.4)	3.0	—	40	C・H・I・K	良好	褐	雲母状微粒子を含む 北武藏型壺 口縁直立タイプ
11	土師器	壺	(10.9)	3.2	—	35	C・H・I・K	良好	褐	内面全体に磨耗 北武藏型壺 内屈タイプ
12	土師器	壺	(10.2)	3.8	—	50	C・H・I・K	良好	褐	雲母状微粒子を含む 北武藏型 口縁内屈タイプ
13	土師器	壺	(11.8)	3.6	—	20	C・H・I・K	良好	褐	北武藏型壺 口縁内屈 内面平滑
14	土師器	壺	(12.4)	4.0	—	30	C・H・I・K	良好	橙褐	雲母状微粒子を含む 北武藏型杯 直立タイプ
15	土師器	壺	(12.8)	3.9	—	45	C・E・G・H・I	良好	褐	北武藏型壺 オサエによる凹凸あり 内面平滑
16	土師器	壺	(12.3)	3.7	—	45	C・H・I・J・L	良好	褐	続比企型壺 白色針状物質の混入が目立つ 無彩
17	土師器	壺	(12.6)	4.4	—	55	C・E・H・I・K	良好	褐	北武藏型壺 内面凹凸あり 体部外面一部無調整



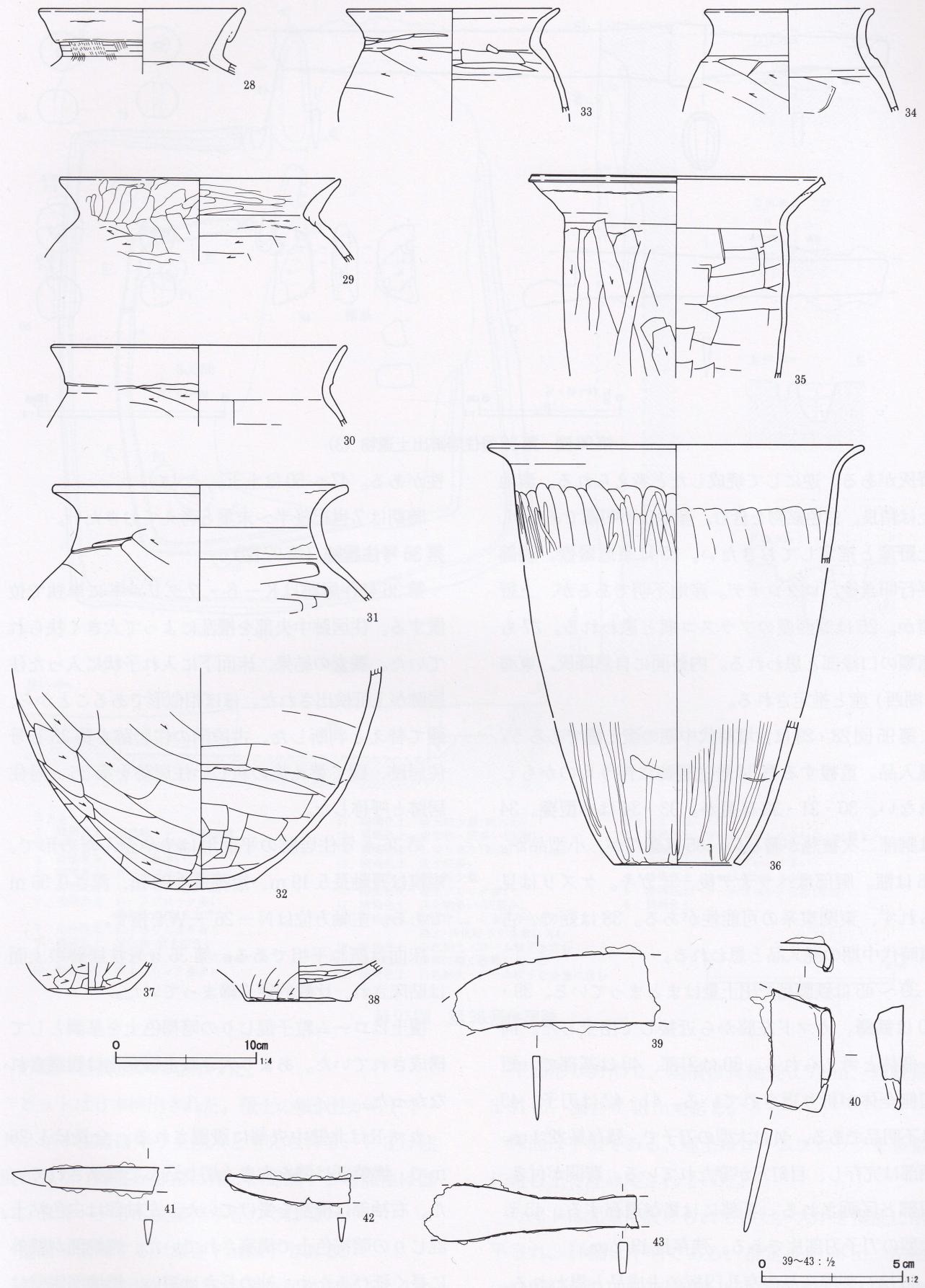


第93図 第35号住居跡 (2)

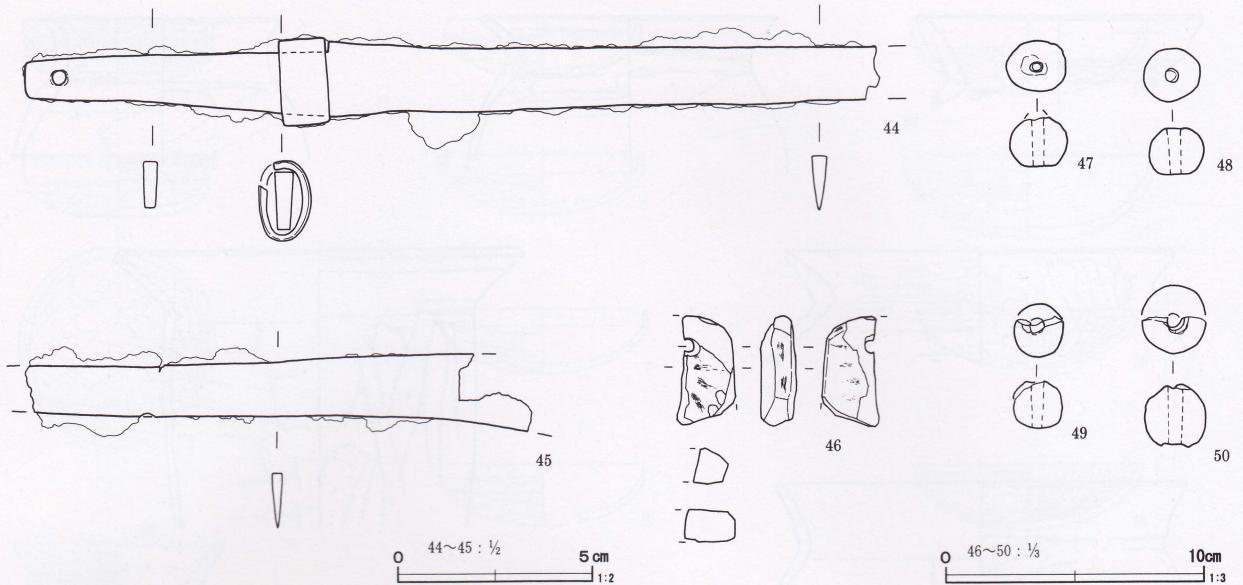
番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	出土位置・備考
18	土師器	壺	11.6	3.0	—	75	C・D・I・K	良好	明褐	体部内面放射状暗文 北武藏型暗文壺
19	土師器	壺	(11.8)	3.4	—	45	C・H・I・K	良好	橙褐	内面放射暗文 北武藏型暗文壺
20	土師器	壺	12.3	3.5	—	65	C・H・I	良好	明褐	体部内面放射状暗文 北武藏型暗文壺
21	土師器	壺	(12.5)	3.3	—	20	C・H・I・K	良好	褐	内面放射暗文
22	土師器	壺	(13.4)	3.7	—	25	C・H・I・K	良好	褐	内面放射暗文 棒状工具による沈線
23	土師器	壺	(14.3)	5.6	—	40	C・G・H・I	良好	褐	内面放射暗文
24	須恵器	低脚盤	(25.0)	7.7	(13.6)	25	G・I・J・K・L	良好	青灰	产地不明(上野産か) 内面降灰あり
25	須恵器	壺	(16.2)	8.0	—	20	I・K	良好	灰	产地不明 胴部外面平行叩き後横方向のナデ
26	須恵器	フラスコ瓶	(9.6)	8.6	—	25	I・K	良好	灰	湖西産 降灰付着 内面淡緑色の自然釉
27	須恵器	長頸瓶か	(10.3)	3.0	—	20	I・K	良好	灰	内外面自然釉がかかる 湖西産
28	土師器	壺	14.6	4.8	—	10	C	普通	淡褐	複合口縁 頸部ハケ目ナデ 内面ナデ 混入
29	土師器	甕	(20.0)	5.9	—	15	C・H・I	良好	褐	口縁～胴部粗い単位のミガキ 一部ケズリ 混入
30	土師器	壺	21.0	5.6	—	15	C・E・G・H・I	良好	暗褐	胴部外面ヘラケズリ 内面ヘラナデ
31	土師器	壺	21.0	8.4	—	5	C・E・G	普通	褐	口縁部ヨコナデ 胴部ヘラケズリ 内面ヘラナデ
32	土師器	壺	—	15.9	8.3	70	C・H・I・K	良好	褐	
33	土師器	小型甕	15.0	8.1	—	60	C・G・H・I	良好	淡褐	雲母状微粒子を含む
34	土師器	小型甕	(12.0)	7.6	—	25	C・E・G・I・L	良好	赤褐	雲母状微粒子を含む 口唇部磨耗 器肉厚手
35	土師器	甕	(20.8)	14.3	—	20	C・G・I・K	良好	褐	雲母状微粒子を含む 胴部外面ヘラケズリ
36	土師器	甕	(26.5) (30.0)	9.0	25	C・H・I・K	良好	褐	貯穴 胴部外面粗いナデ後粗いミガキ	
37	土師器	甕	—	2.0	6.0	40	G・H・I	良好	暗褐	外面及び底部ヘラケズリ 内面指ナデ
38	土師器	壺	—	2.9	7.2	55	C・H・I	良好	褐	混入品か
39	鉄製品	鎌	No.1(床+2) 残長7.4cm 刃幅2.4cm 刃厚0.2cm		SJ35-40と同一個体か					
40	鉄製品	鎌	No.2(床+3) 残長2.2cm 幅3.7cm 厚0.3cm		SJ35-39と同一個体か					
41	鉄製品	刀子	残長4.0cm 刃幅0.9cm 背幅0.3cm							
42	鉄製品	刀子	No.3(床+12) 残長4.4cm 刃幅0.9cm 背幅0.2cm							
43	鉄製品	不明品	残長7.6cm 幅2.0～1.0cm 厚0.3cm前後 刀子茎部の可能性あり							
44	鉄製品	刀子	No.5(床+17) 残長22.1cm 茎長7.9cm 刃幅1.9cm 背幅0.4cm 鋏長2.2cm 鋏幅1.2cm							
45	鉄製品	刀子	残長13.2cm 刃幅1.4～1.6cm 背幅0.3cm							
46	石製品	石製模造品か	長さ4.2cm 幅2.0cm 厚さ1.2cm 16.74g 石材:滑石							
47	土製品	土玉	最大径2.0×2.2cm 最大高1.9cm 孔径0.4～0.45cm 残存率100% 7.75g 頂部欠損							
48	土製品	土玉	最大径2.1×2.2cm 最大高1.8cm 孔径0.4～0.5cm 残存率100% 7.92g ナデ丁寧							
49	土製品	土玉	最大径1.9cm 最大高1.8cm 孔径0.4～0.5cm 残存率50% 4.72g							
50	土製品	土玉	最大径2.5cm 最大高2.4cm 孔径0.5～0.6cm 残存率50% ナデ光沢あり 6.42g							



第94図 第35号住居跡出土遺物 (1)



第95図 第35号住居跡出土遺物 (2)



第96図 第35号住居跡出土遺物 (3)

降灰がある。逆にして焼成したと考えられる。素地土は精良。白色鉱物を含む。産地は不明確であるが、上野産と推定しておきたい。25は須恵器壺。胴部平行叩き後、ロクロナデ。産地不明であるが、上野産か。26は湖西産のフラスコ瓶と思われる。27も瓶類の口縁部と思われる。内外面に自然降灰。東海(湖西)産と推定される。

第95図28・29は古墳時代中期の壺と甕であろう。混入品。重複する第34号住居跡に伴うものかもしれない。30・31・32は壺か。33・34は小型甕。34は胴部二次被熱が著しい。35は甕だが、小型品か。36は甕。胴部はヘラナデ後、ミガキ。ケズリは見られず、東関東系の可能性がある。38は壺で、古墳時代中期の混入品と思われる。

39～45は鉄製品で出土量はまとまっている。39・40は鉄鎌。カマド左脇から近接して出土した。同一個体と考えられる。39は刃部、40は基部で、短辺側全体が折り返されている。41・42は刀子。43は不明品である。44は大型の刀子で、残存長22.1cm。柄部は完存し、目釘穴が穿たれている。背関が付き、刃部と区画される。茎部には錐が遺存する。45も大型の刀子刃部片である。残存長13.2cm。

46は石製模造品の有孔円板の未完成品と思われる。滑石製。混入品で、本来第34号住居跡に伴う可能

性がある。47～50は土玉。

時期は7世紀後半～末葉と考えておきたい。

### 第36号住居跡 (第97図)

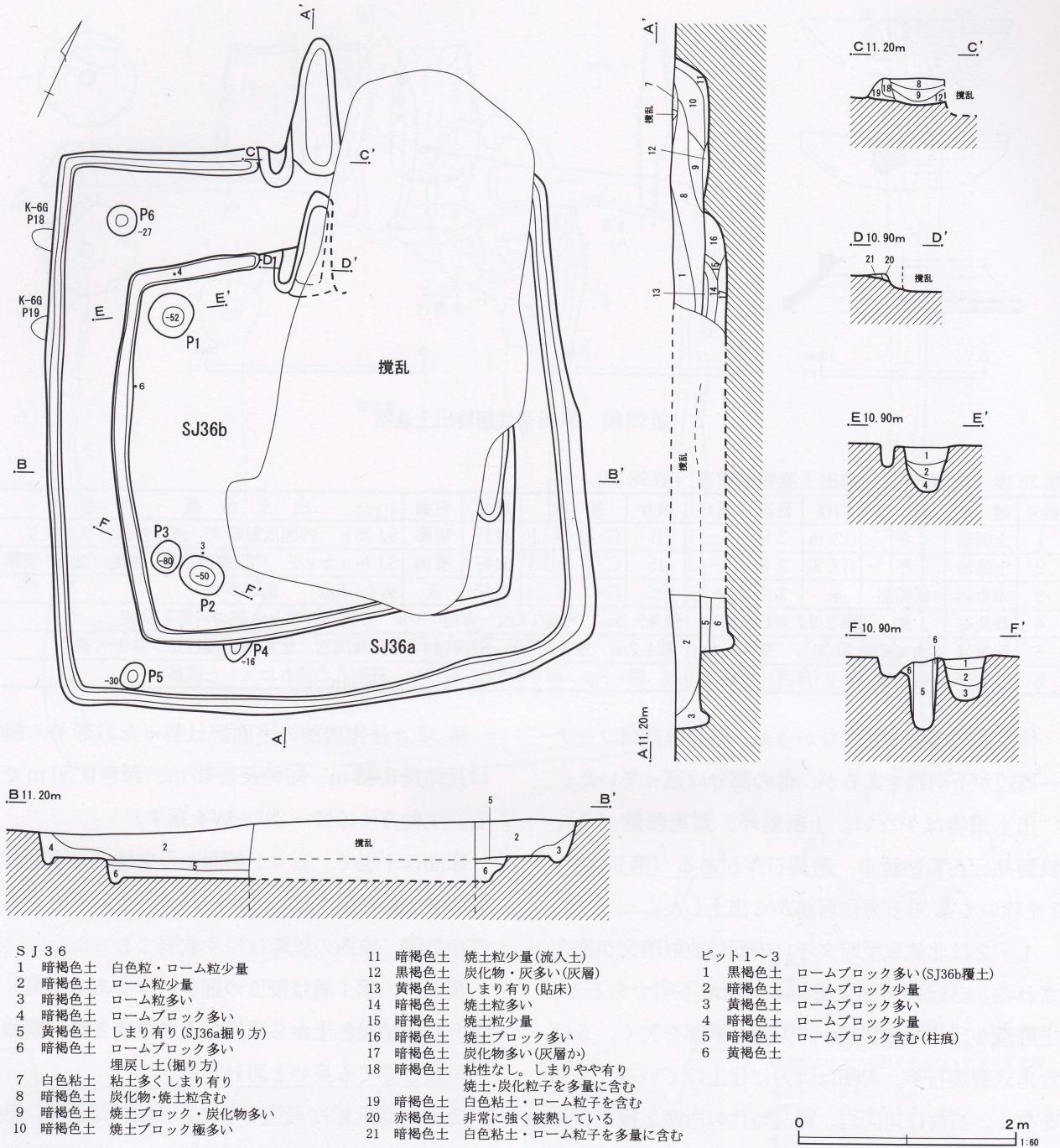
第36号住居跡はK-6・7グリッドに単独で位置する。住居跡中央部を攪乱によって大きく抉られていた。調査の結果、床面下に入れ子状に入った住居跡が1軒検出された。ほぼ相似形であることから、建て替えと判断した。古段階の住居跡を第36b号住居跡、建て替え後の新しい住居跡を第36a号住居跡と呼称した。

第36a号住居跡の平面形はやや歪んだ方形で、規模は長軸長5.19m、短軸長4.98m、深さ0.36mである。主軸方位はN-26°-Wを指す。

床面は概ね平坦である。第36.b号住居跡の上面は貼床され、比較的硬く締まっていた。

覆土はローム粒子混じりの暗褐色土を基調として構成されていた。あまり大きな土層変化は観察されなかった。

カマドは北壁中央部に設置される。全長は1.26mで、燃焼部は壁を大きく切り込んで構築されていた。右袖部は攪乱を受けていた。左袖部は白色粘土混じりの暗褐色土で構築されていた。燃焼部が壁外に長く延びるため、袖の長さは短い。燃焼部側壁は被熱、底面は僅かに窪んでいた。



第97図 第36号住居跡

貯蔵穴は検出されなかった。

ピットは6本検出された。覆土の類似性からP1・P2が本住居に伴う主柱穴と考えられる。P3は柱痕が残り、深度が非常に深いが帰属する可能性は低い。P4～P6も直接伴うものではない。

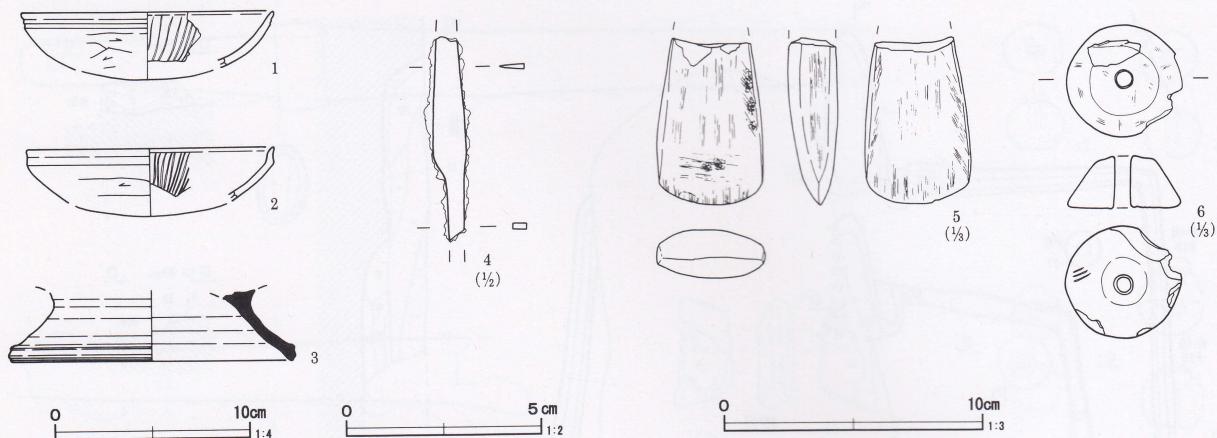
壁溝は全周する。深さ7cm以下である。

第36b号住居跡は第36a号住居跡床面下に入れ子状につくられていた。

平面形は方形で、規模は長軸長3.72m、短軸長3.51m、深さ0.48mである。

床面は平坦である。埋土はロームブロックを多量に含む土で埋め戻されていた。

カマドは北壁に設けられていた。大半を攪乱に削平され、詳細は不明である。推定長0.96m、左袖は白色粘土混じりの暗褐色土で構築され、内面は強く被熱していた。



第98図 第36号住居跡出土遺物

第35表 第36号住居跡出土遺物観察表 (第98図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎 土	焼成	色調	出土位置・備考
1	土師器	壺	(13.0)	2.9	—	5	C・H・I・K	良好	暗褐	SJ 36 b 内面放射暗文 体部外面ヘラケズリ
2	土師器	壺	(12.8)	2.8	—	15	C・G・H・I	良好	橙褐	SJ 36 a カマド 内面放射暗文 磨耗のため不明瞭
3	須恵器	低脚盤	—	3.7	(14.4)	25	G・I・K	良好	灰	No.1(床直) 産地不明
4	鉄製品	鉄	No.3 SJ 36 b	壁構内	残長5.2cm	刃幅0.8cm	背幅0.1cm	刀関の形態から鉄の一部と推定		
5	石製品	定角式石斧	SJ 36 b	長さ6.4cm	幅4.2cm	厚さ1.8cm	88.81g	石材:角閃岩 定角式磨製石斧	基部欠損	
6	石製品	紡錘車	No.2(床直)	長さ4.3cm	幅4.5cm	厚さ2.0cm	47.94g	底面孔の周りにスレた痕跡		

伴う柱穴は検出されなかった。壁溝は南東コーナー一周辺が不明確であるが、他の部分は巡っていた。

出土遺物は少ない。土師器壺、須恵器盤(?)、鉄製品、石製紡錘車、磨製石斧がある(第98図)。2を除いて第36 b号住居跡から出土した。

1・2は北武藏型暗文壺。内面に放射暗文が施される。3は須恵器低脚盤か。産地不明であるが、上野産か。4は鉄製鉄か。刃部と柄部を欠く。5は定角式磨製石斧。刃部は両刃に仕上げている。基部を欠く。石材は角閃岩。縄文時代の所産と推定される。混入品。6は石製紡錘車。

時期は不明確であるが、7世紀後半～末葉頃と推定しておきたい。

### 第37号住居跡(第99・100図)

第37号住居跡はK・L-5・6グリッドに単独で位置する。東側に第36号住居跡が隣接し、西側には第38・39号住居跡が接している。調査の結果、壁溝が二重に巡ることが確認され、一度拡張されたことが判明した。古段階の住居跡を第37 b号住居跡、拡張後の住居跡を第37 a号住居跡とする。

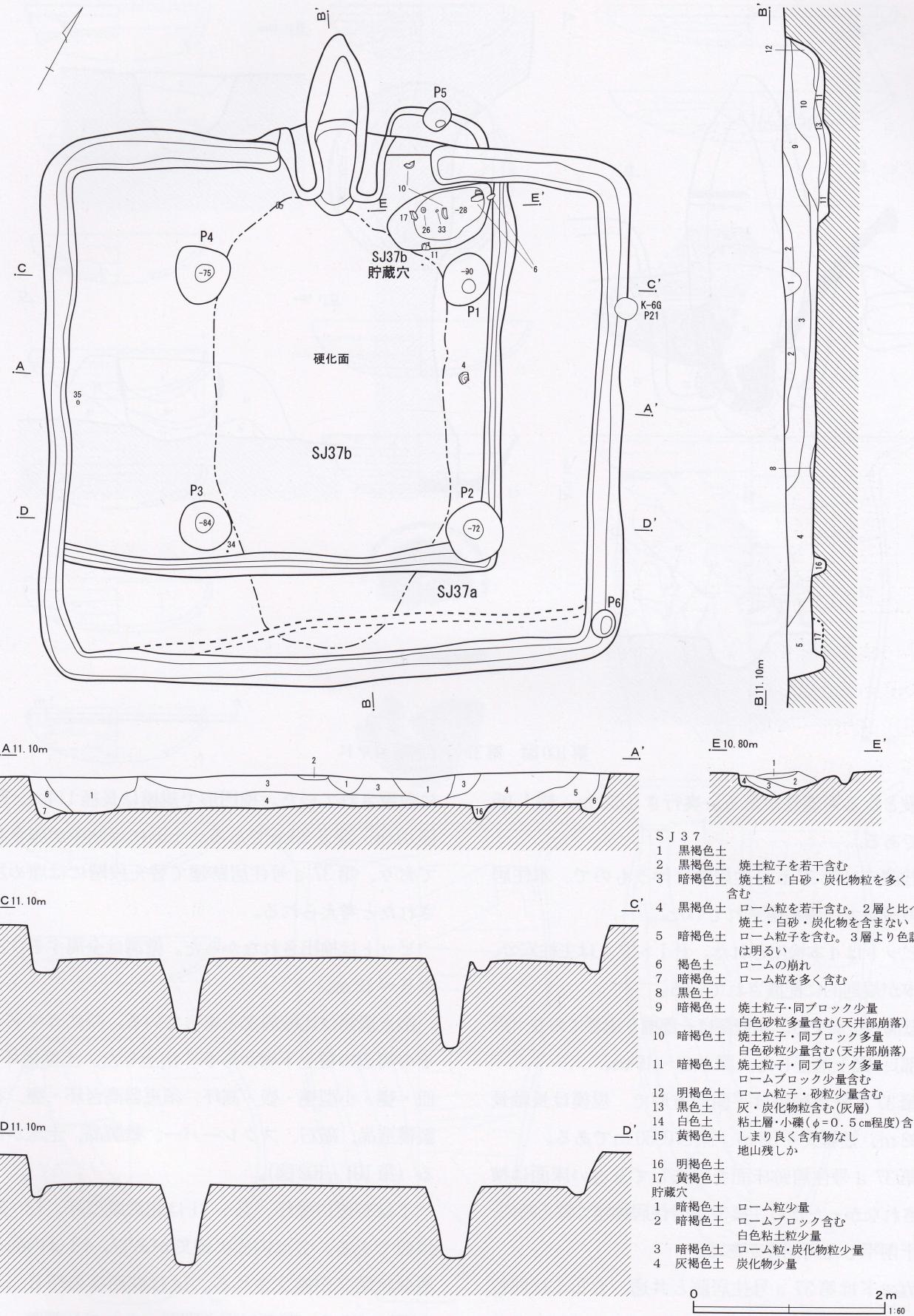
第37 a号住居跡の平面形は整った方形で、規模は長軸長6.12m、短軸長5.76m、深さ0.50mである。主軸方位はN-28°-Wを指す。

床面は平坦で、カマド前面から主柱穴で囲まれた範囲を中心に硬く踏み固められていた。一方、主柱穴の外側、東西の壁際はやや軟弱であった。

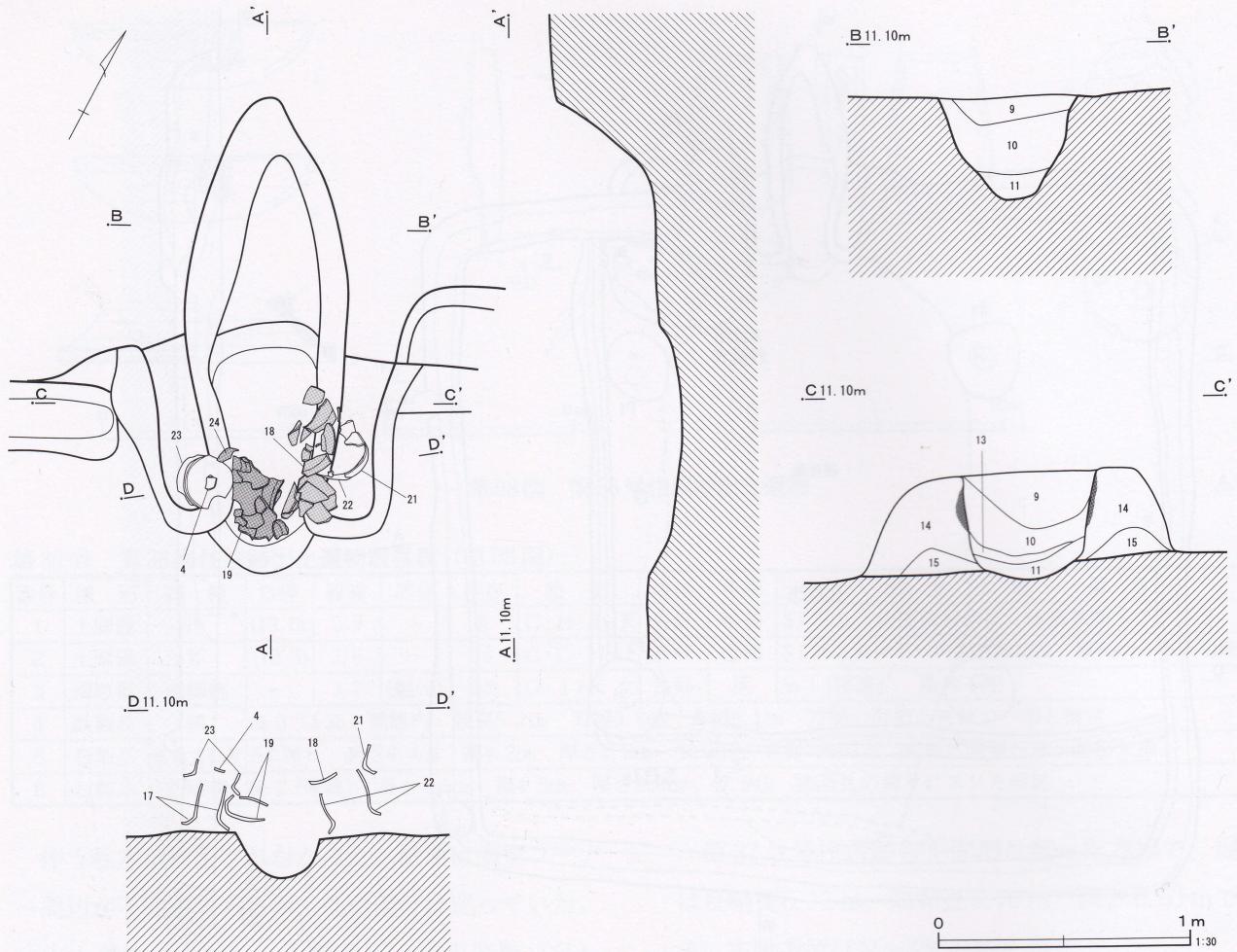
覆土中、第1層は後世の掘り込みである。第2～第5層は暗褐色土から黒褐色土で構成され、概ね自然堆積と見ても良いと思われる。

カマドは北壁に設置される。全長1.86m、燃焼部は壁を僅かに切り込んで構築され、煙道部は高さ10cmの段差を以って水平方向に壁外に延びている。燃焼部幅は45cmで、左右の袖部先端には底部を欠いた土師器甕を各2個体、倒置させた状態で上下に重ね袖部の補強としていた。更に、焚口部底面に横倒しの状態で土師器甕が2個体出土した。天井部の(架構)補強材として使用されたと考えられる(第100図)。

カマド右脇の壁外には深さ5～10cmの浅い土壙が検出された。住居跡覆土と近似しており、棚状の



第99図 第37号住居跡



第100図 第37号住居跡カマド

施設となる可能性がある。奥行き 0.30 m、幅 1.05 m である。

貯蔵穴は第37 b号住居跡に伴うもので、本住居跡の段階では埋め戻されていた。

ピットは4本検出された。P 1～P 4は主柱穴で、4本が規則的に配置されている。

壁溝は全周する。南壁部は一部掘り過ぎており（点線部）、図上補正した。深さ 2～10 cm。

第37 b号住居跡は平面形方形で、規模は長軸長 4.92 m、短軸長 4.68 m、深さ 0.50 m である。

第37 a号住居跡床面を除去しても古い床面は検出されなかつたため、第37 a号住居跡建て替え時に、若干削平した可能性がある。

カマドは第37 a号住居跡と共に、もしくは同位置に設置されたと思われる。

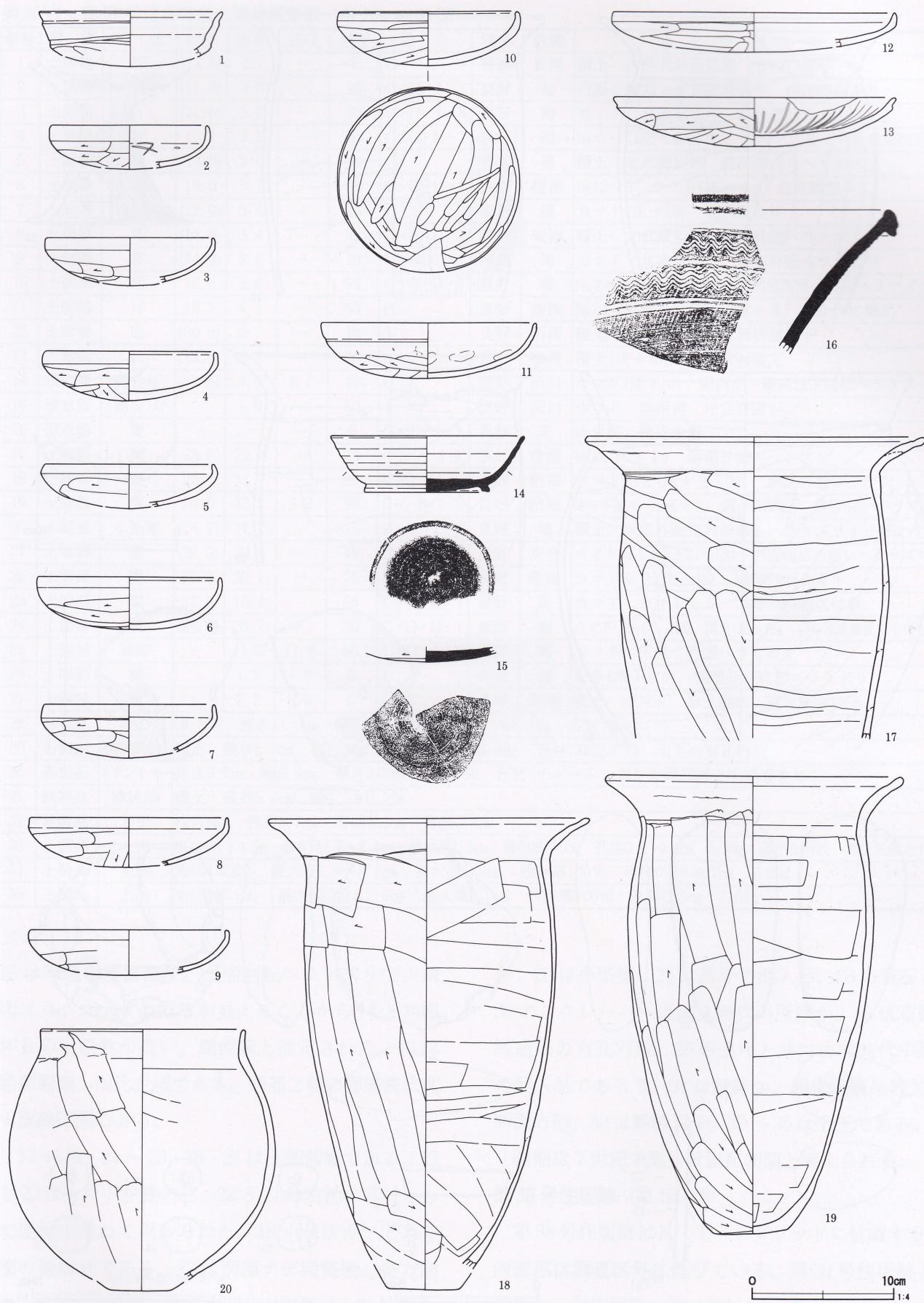
貯蔵穴はカマドに向かって右脇の北東コーナー部

に設置されていた。楕円形で規模は長径 114 cm、短径 61 cm、深さ 28 cm である。上面には貼床が施されており、第37 a号住居跡建て替え段階には埋め戻されたと考えられる。

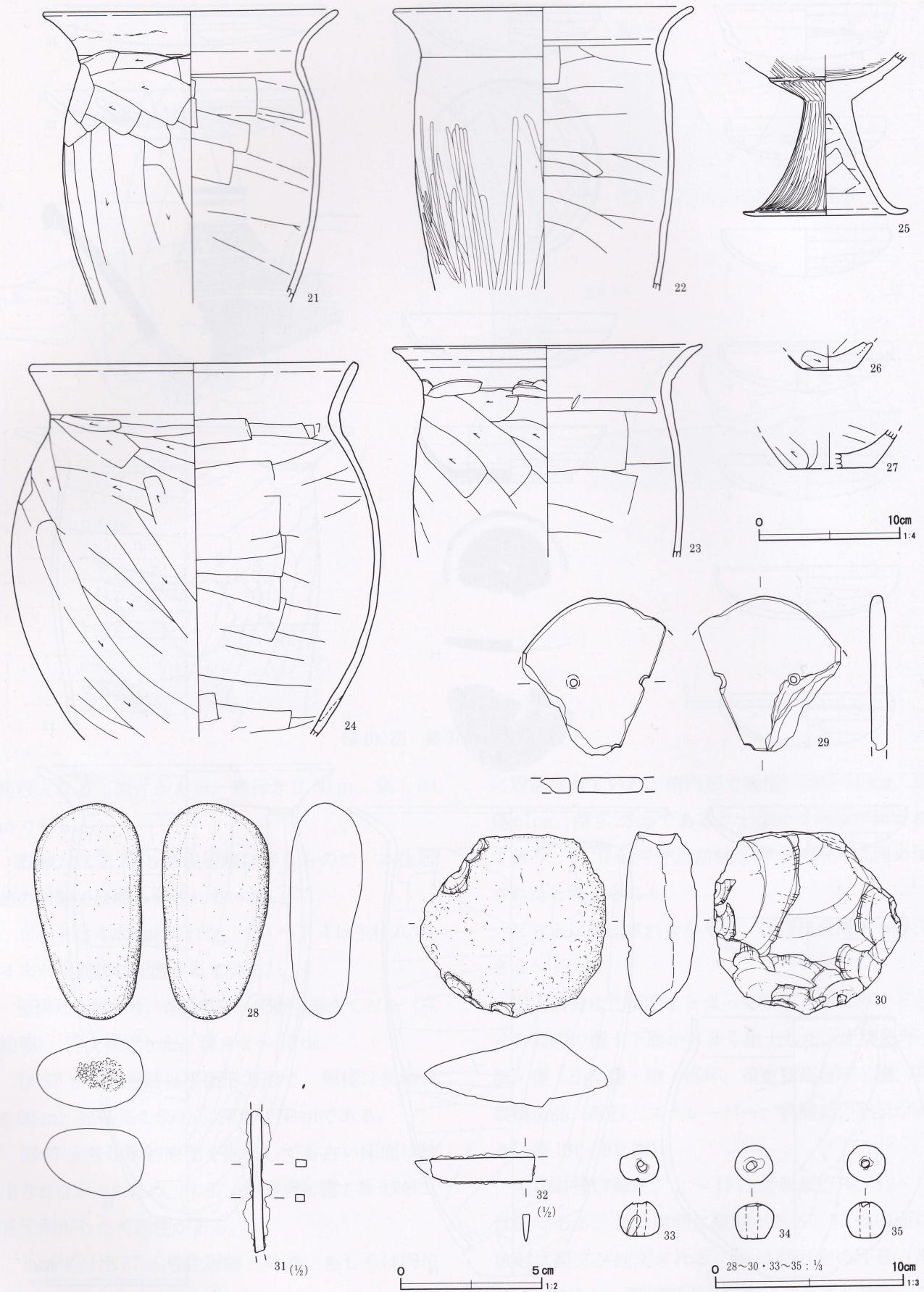
ピットは検出されなかった。壁溝は全周する。深さ 5～13 cm。

出土遺物は比較的まとまっている。特にカマドとその周辺の覆土下層から多く出土した。土師器壺・皿・甕・小型甕・壺・高壺、須恵器高台壺・甕、石製模造品、敲石、スクレーパー、鉄製品、土玉がある（第101・102図）。

1は有段口縁壺。2～11は北武藏型壺、12・13は皿である。2は内面に線刻がある。13は内面に放射状暗文が施文される。14は湖西産の壺B（高台壺）である。腰部以下を回転ヘラケズリ調整。その後、高台貼り付け、丁寧なロクロナデを加える。



第101図 第37号住居跡出土遺物 (1)



第102図 第37号住居跡出土遺物 (2)

第36表 第37号住居跡出土遺物観察表（第101・102図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎 土	焼成	色調	出土位置・備考
1	土師器	壺	(13.0)	3.2	—	5	C	普通	黄褐	覆土 内外面黒色処理 有段口縁壺
2	土師器	壺	(11.0)	3.0	—	20	C・H・I	良好	褐	内面に線刻による記号あり 内面凹凸あり
3	土師器	壺	(11.6)	3.2	—	30	C・H・I・K	良好	褐	カマド 北武藏型壺 口縁部直立タイプ
4	土師器	壺	12.1	3.5	—	75	C・G・H・I	良好	褐	No.6・15(床+6~8) カマド 覆土 北武藏型壺
5	土師器	壺	(12.0)	3.0	—	10	C	普通	褐	覆土 北武藏型壺 底部手持ちヘラケズリ
6	土師器	壺	13.0	3.7	—	80	C・G・H・I	良好	橙褐	No.12・13 カマド(床+4) 北武藏型壺
7	土師器	壺	(12.0)	3.4	—	20	C	普通	褐	カマド(床+18) 北武藏型壺
8	土師器	壺	(14.0)	3.4	—	20	C・E・G	普通	暗褐	覆土 北武藏型壺 体部外面ヘラケズリ
9	土師器	壺	(14.0)	3.0	—	10	C・G	普通	褐	カマド 北武藏型壺 体部外面ヘラケズリ
10	土師器	壺	12.6	3.8	—	95	C・G・H・I	良好	褐	No.7・11(床+3~11) 北武藏型壺 外面ヘラケズリ
11	土師器	壺	15.1	4.1	—	60	H	良好	淡褐	No.14 カマド 覆土(床+4) 全体に風化
12	土師器	皿	(20.0)	2.7	—	10	I	良好	明褐	覆土 北武藏型皿 雲母状微粒子
13	土師器	皿	(19.8)	3.5	—	60	A・C	良好	淡褐	覆土(床+18) 内面放射暗文
14	須恵器	高台壺	(13.6)	4.0	8.7	45	G・K	良好	灰白	カマド(床+18) 湖西産 腰部以下回転ヘラケズリ
15	須恵器	(高台)壺	—	1.0	—	50	I・K	良好	灰白	カマド 湖西産 壺B底部か
16	須恵器	甕	—	—	—	5	G・I・J・L	良好	灰	カマド 南比企産
17	土師器	甕	23.6	23.4	—	75	C・G・H・I・K	良好	淡褐	No.18(床+1) 脊部外面ヘラケズリ
18	土師器	甕	22.3	31.7	—	90	C・I	良好	橙褐	カマドNo.2(床+2~25) 脊部外面ヘラナデ
19	土師器	甕	20.6	32.3	5.2	90	C・G・H・I・K	良好	橙褐	カマドNo.4・5(床+2) 雲母状微粒子 脊部外面ヘラケズリ
20	土師器	小型甕	(14.2)	17.7	—	15	A・H・I・K	良好	褐	覆土 脊部外面光沢のあるヘラケズリ 一部ナデ
21	土師器	甕	(20.9)	20.8	—	40	C・E・H・I	良好	淡褐	カマドNo.1(床+21~25) 外面幅広の粗いヘラケズリ
22	土師器	甕	21.1	20.1	—	75	E・G・H・I・K	良好	橙褐	カマドNo.3(床+16) 脊部外面ミガキ
23	土師器	甕	22.0	15.1	—	65	C・G・H・I	良好	褐	カマド カマドNo.6 口縁部内面煤付着
24	土師器	壺	(23.0)	26.7	—	30	C・G・H・I	良好	褐	カマド No.6 床直 覆土(床+18) 口唇部沈線状にくぼむ
25	土師器	高壺	—	11.5	11.8	65	C・H・I・K	良好	褐	カマド 床直 外面ヘラミガキ
26	土師器	甕	—	1.9	4.0	5	C	普通	褐	No.9(床+4.5) 脊部及び底部ヘラケズリ
27	土師器	甕	—	2.7	6.0	5	G・K	良好	黄褐	覆土 カマド 胎土緻密 雲母状微粒子
28	石製品	敲石	カマド	長さ11.5cm 幅5.8cm 厚さ3.1cm	365.33g	石材:砂岩				
29	石製品	石製模造品	覆土	長さ8.3cm 幅7.3cm 厚さ1.0cm	85.39g	石材:緑泥片岩	大型の有孔円板			
30	石製品	スクレイパー	—	長さ9.7cm 幅9.9cm 厚さ3.7cm	390.75g	石材:チャート	剥片の両側縁と末端面を加工			
31	鉄製品	棒状品	覆土	残長5.0cm 幅0.2×0.3cm						
32	鉄製品	刀子	柱穴No.3	残長3.7cm 刃幅0.9cm 背幅0.2cm						
33	土製品	土玉	No.10(床+4.5)	最大径1.6~2.1cm 最大高1.9cm 残存率100%	孔径0.4~0.6cm 6.39g	扁平な形状	棒状圧痕あり			
34	土製品	土玉	No.16(床直)	最大径1.9~2.1cm 最大高1.9cm 残存率100%	孔径0.5~0.7cm 7.30g					
35	土製品	土玉	No.17(床+8)	最大径2.0×2.0cm 最大高2.0cm 残存率100%	孔径0.5cm 7.51g					

15は須恵器壺底部片。全面回転ヘラケズリで、周辺にロクロナデの痕跡が見えることから14と同様壺Bの可能性が高い。湖西産と推定される。16は須恵器甕、南比企産である。頸部2段の櫛描波状文+沈線区画である。

17~19・21~23・26・27は土師器甕である。17と23はカマド左袖の芯、22と21は右袖の芯材として逆位に重ねて用いられた。18・19はカマド天井部の架構材である。22は脊部ナデ調整後、縦方向のミガキを加える。内面も凹凸が顕著で、指ナデ後、軽いヘラナデと部分的にミガキ。東関東系であろう

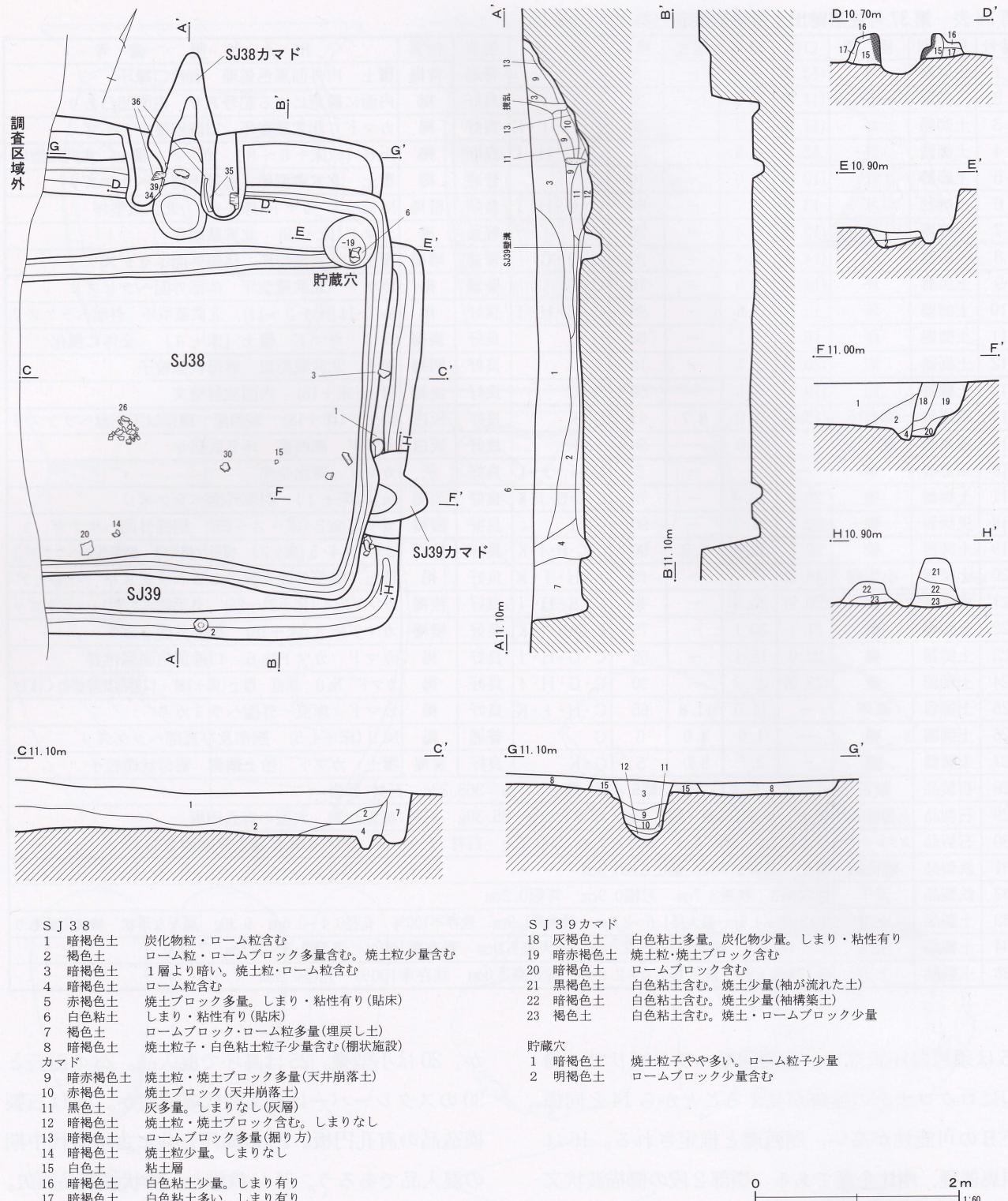
か。20は小型甕。25は高壺で混入品。28の敲石と30のスクレイパーは縄文時代の所産か。29は石製模造品の有孔円板。25の高壺と共に古墳時代中期の混入品であろう。31は鉄鎌か。棒状鉄製品残欠。断面方形。32は鉄製刀子。33~35は土玉である。

時期は7世紀末葉~8世紀初頭と考えられる。

### 第38号住居跡（第103図）

第38号住居跡はK・L-5グリッドに位置する。西壁部は調査区外に延びている。第39号住居跡と重複し、本住居跡の方が新しい。

平面形は方形と推定される。残存規模は長軸長



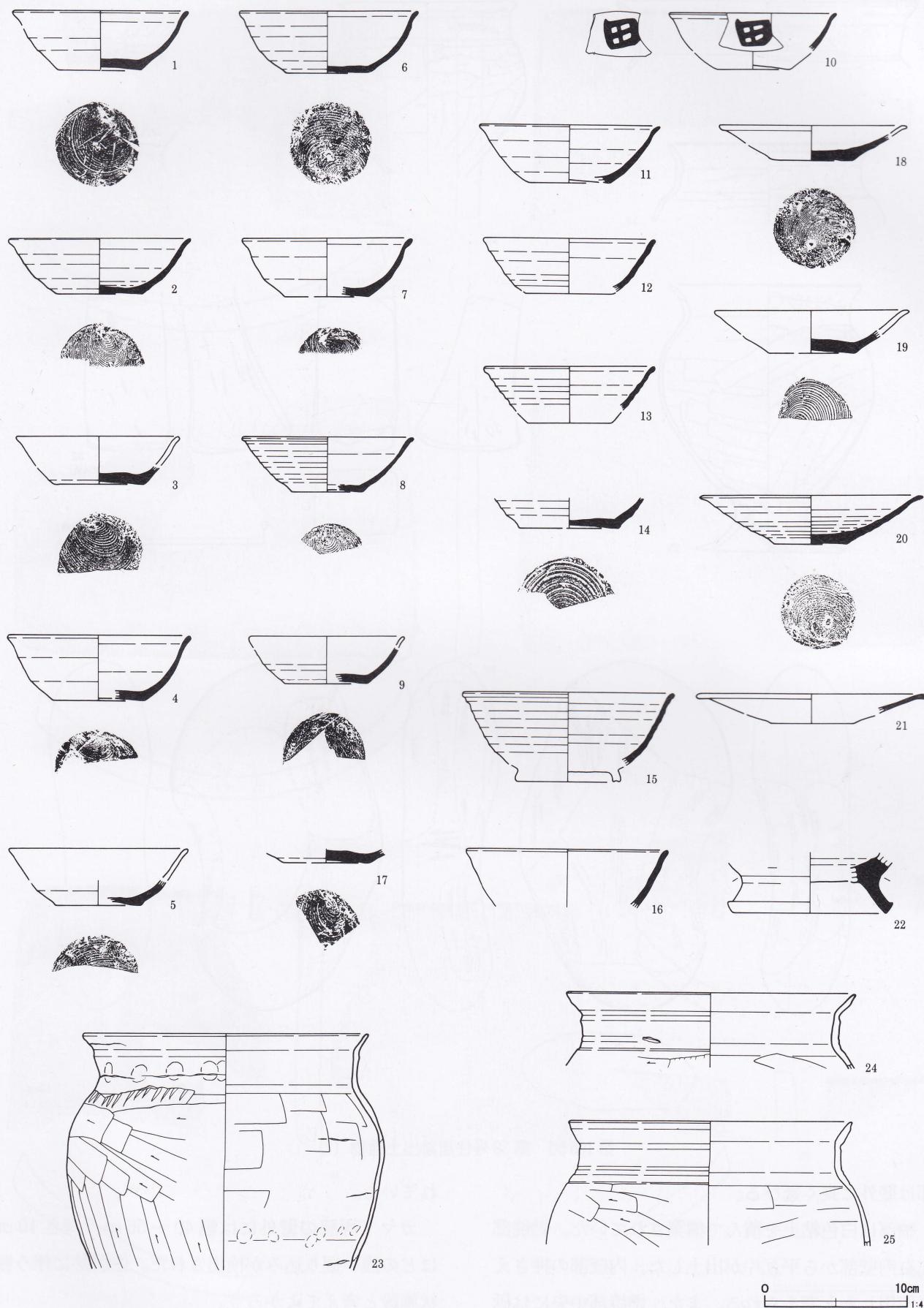
第103図 第38・39号住居跡

3.90 m、短軸長3.48 m、深さ0.46 mである。主軸方位はN-15°-Wを指す。

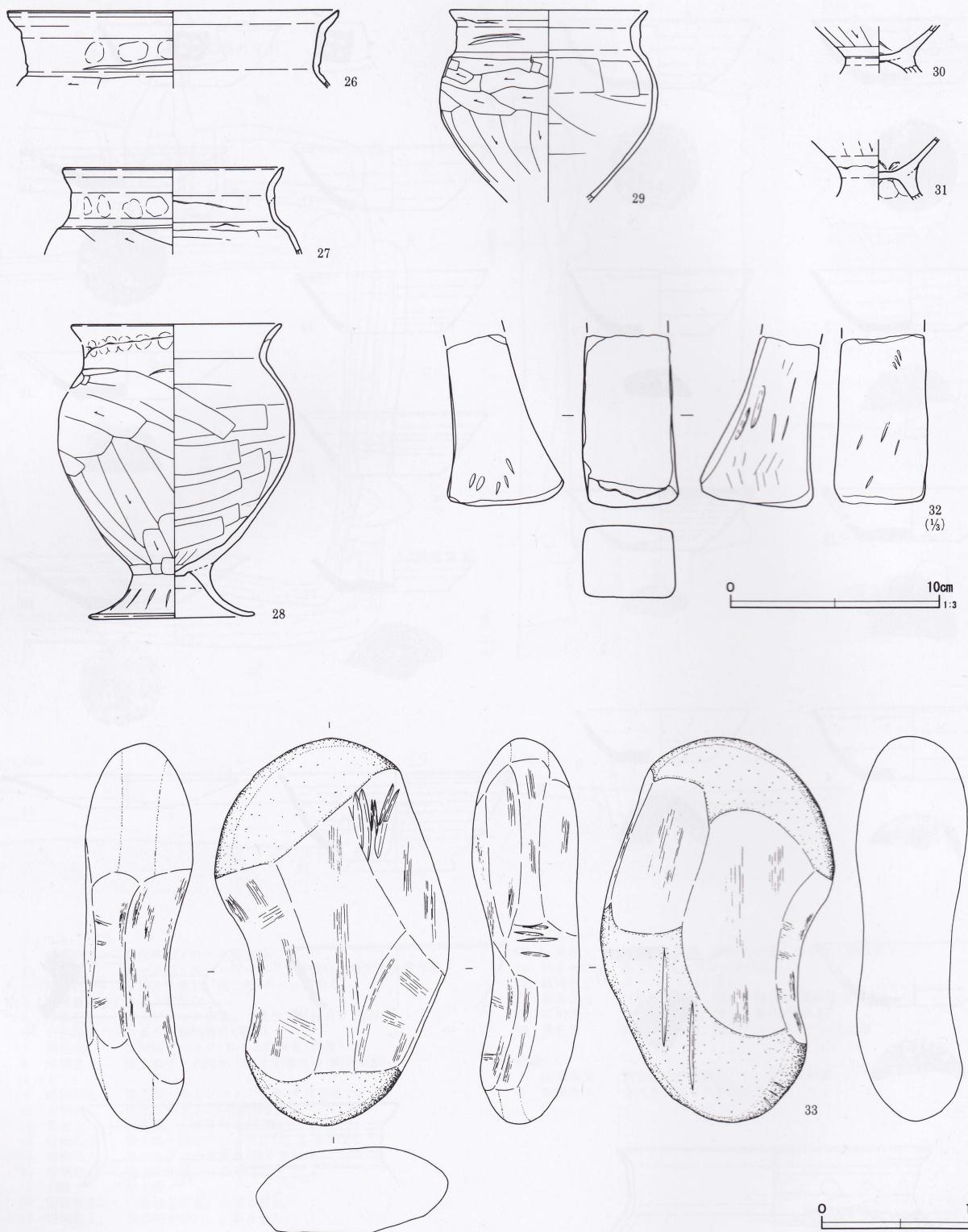
床面は概ね平坦である。住居跡中央付近とカマド前面は比較的硬化した面が形成されていたが、壁際はやや軟弱であった。

覆土は第2層にローム粒子とロームブロックが目立ち、一部埋戻しされた可能性があるが、基本的には自然堆積と思われる。

カマドは北壁に設置される。全長は1.80 mと長大である。燃焼部は壁を切り込んで構築され、煙道



第104図 第38号住居跡出土遺物 (1)



第105図 第38号住居跡出土遺物 (2)

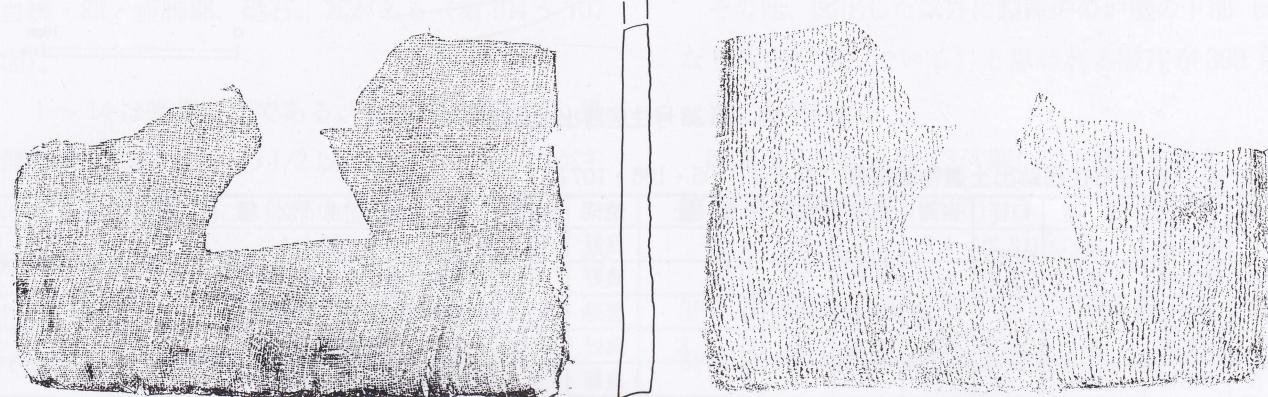
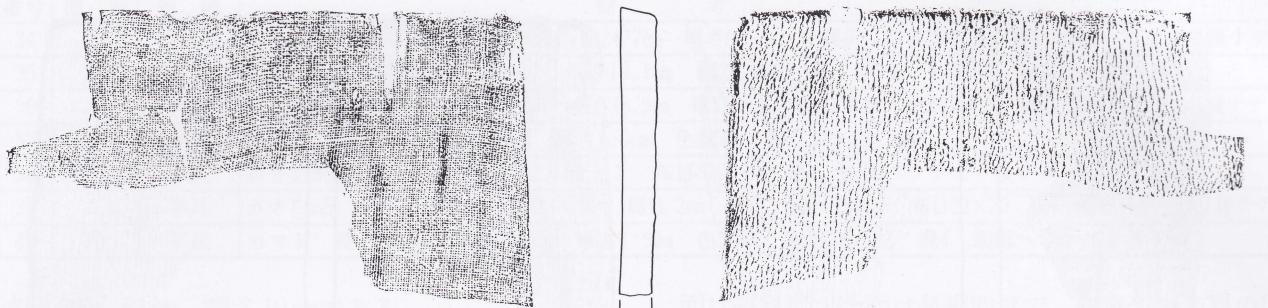
部は壁外に長く延びる。

袖部は白色粘土を積んで構築されていた。燃焼部左右内壁部から平瓦片が出土した。内壁部の押さえに使用したと考えられる。また、燃焼部中央には砥石として使用された磨耗痕のある礫が支脚に転用さ

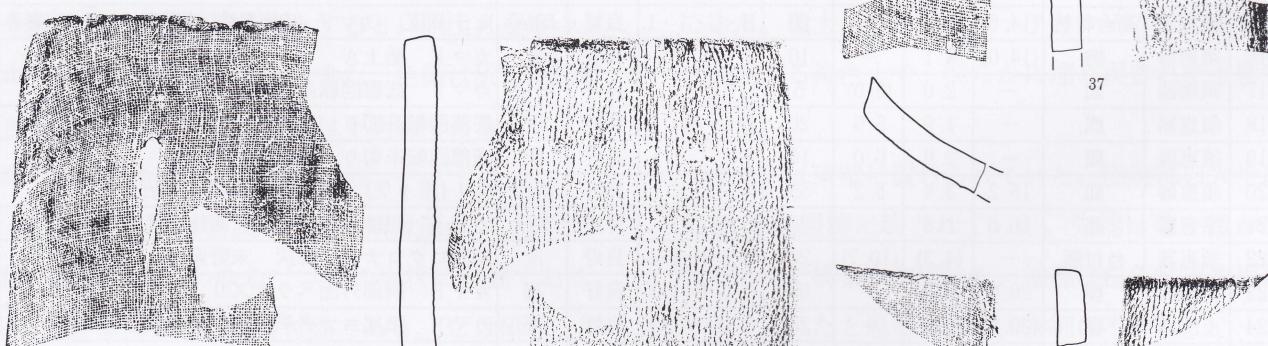
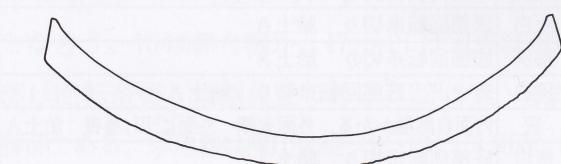
れていた。

カマド両脇の壁外には幅40～56cm、深さ10cmほどの浅い掘り込みが検出された。住居跡に伴う棚状施設と考えてよからう。

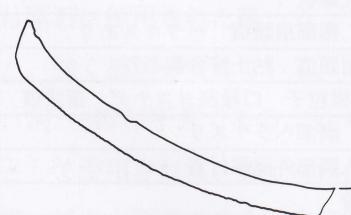
貯蔵穴は北東コーナーにある。略円形で、規模は



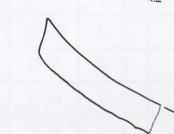
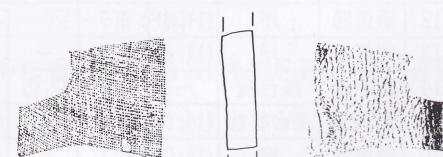
35



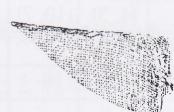
36



37



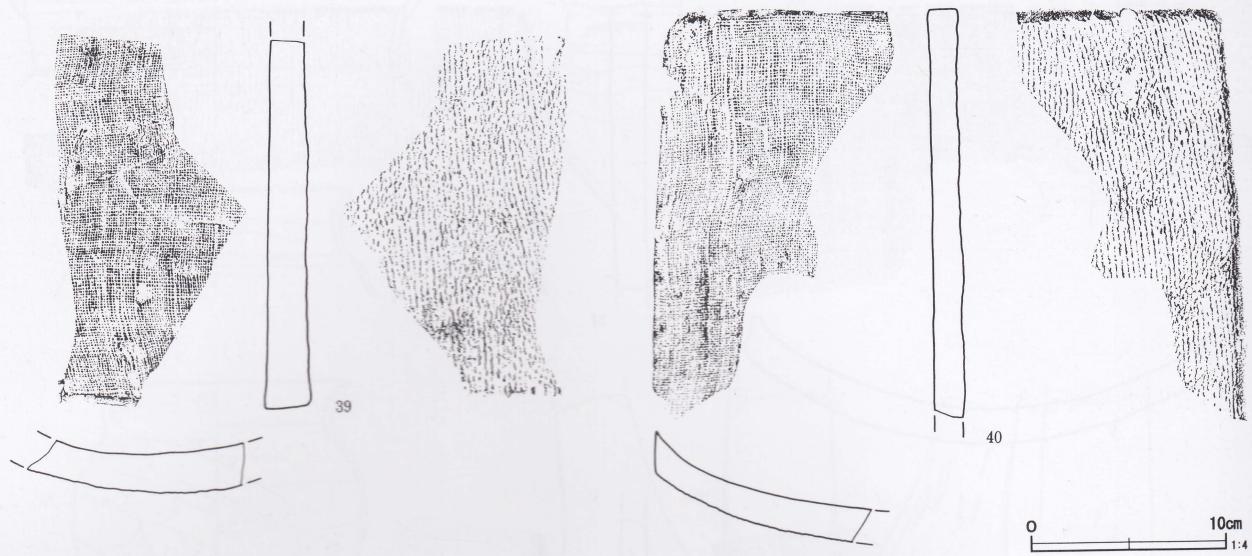
38



38

0 10cm 1:4

第106図 第38号住居跡出土遺物 (3)



第107図 第38号住居跡出土遺物 (4)

第37表 第38号住居跡出土遺物観察表 (第104・105・106・107図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	
										床	壁
1	須恵器	壺	(12.2)	4.2	5.9	55	I・K	良好	灰白	底部ヘラ記号	胎土A
2	須恵器	壺	(12.6)	4.0	(6.0)	35	I・K	良好	灰	底部回転糸切り	胎土A
3	須恵器	壺	—	1.2	(6.2)	10	G	普通	灰白	底部回転糸切り	胎土A
4	須恵器	壺	12.7	4.6	(6.4)	40	C・I・K	良好	灰白	カマド	底部回転糸切り 胎土A
5	須恵器	壺	—	1.8	6.0	10	I・J	良好	灰	底部回転糸切り	産地不明 胎土A
6	須恵器	壺	12.5	4.4	6.0	70	I・K	良好	灰白	No.8 貯穴(床+10)	底部回転糸切り ロクロ右回転 胎土A
7	須恵器	壺	11.8	4.1	6.0	30	I	良好	灰白	底部回転糸切り	胎土A
8	須恵器	壺	(12.0)	3.9	(5.0)	20	H・I	良好	褐灰	底部回転糸切り	胎土A
9	須恵器	壺	—	2.6	5.8	20	I	良好	灰白	カマド	底部回転糸切り 胎土A
10	須恵器	壺	(11.8)	2.7	—	5	I	良好	灰	内面自然釉かかる	外面火襷 外面に「田」墨書 胎土A
11	須恵器	壺	(12.5)	4.1	5.8	20	I・K	良好	灰白	底部回転糸切り	胎土A
12	須恵器	壺	(11.8)	3.7	—	10	I・J・L	良好	灰白	カマド	南北企産
13	須恵器	壺	(11.8)	3.2	—	10	I	良好	灰	外面墨痕あり	胎土緻密 胎土A
14	須恵器	無台椀	—	2.2	(7.0)	20	I・L	普通	灰	No.2(床直)	底部回転糸切り 東金子産 内面見込み摩滅
15	須恵器	高台付椀	(14.6)	5.1	—	20	B・C・I・L	良好	暗灰	No.5(床直)	カマド 内面摩滅 末野産 ロクロ目顯著
16	須恵器	椀	(14.0)	4.1	—	10	I	良好	灰	カマド	胎土A
17	須恵器	皿	—	2.0	(6.0)	5	G・I	良好	灰白	カマド	底部回転糸切り 胎土A
18	須恵器	皿	—	1.9	5.9	20	G・I	良好	灰	底部回転糸切り	胎土A
19	須恵器	皿	—	2.6	6.0	10	I	良好	灰	底部回転糸切り	胎土A
20	須恵器	皿	15.2	3.4	5.2	55	I	良好	灰白	No.1(床+7)	底部回転糸切り 胎土A
21	須恵器	皿	16.0	1.8	—	20	G・J	普通	黄灰	カマド	口縁部ヨコナデ 南北企産
22	須恵器	台付瓶	—	(4.3)	(10.7)	20	D・E・H・I・L	良好	灰	内面ロクロナデ	降灰 末野産か
23	土師器	甕	20.0	12.6	—	60	C・G・H・I・K	良好	褐	カマド	胴部外面ヘラケズリ
24	土師器	甕	(20.0)	5.3	—	20	C・H・I・K	良好	褐	カマド	頸部ヨコナデ 粘土接合痕あり
25	土師器	甕	(19.8)	8.7	—	20	C・G・H・I	良好	暗褐	カマド	頸部沈線状
26	土師器	甕	(21.0)	5.0	—	10	C・G・H・I	良好	明褐	No.3(床+6)	頸部指頭痕 ヘラキズあり
27	土師器	台付甕	14.0	5.6	—	25	A・C・H・I・K	良好	明褐	カマド	頸部指頭痕 粘土接合痕あり
28	土師器	台付甕	(13.4)	18.9	9.8	40	C・G・H・I・K	良好	暗褐	SJ 39	雲母状微粒子 口縁部ヨコナデ 指頭痕
29	土師器	台付甕	(12.6)	12.3	—	45	C・G・H・I・K	良好	明褐	頸部ヘラキズ	胴部ヘラケズリ
30	土師器	台付甕	—	3.0	—	75	A・C・H・I・I	良好	淡褐	No.4(床+3)	胴部外面煤付着
31	土師器	台付甕	—	4.1	—	55	C・G・I・K	良好	明褐	胴部外面煤付着	
32	石製品	砥石	長さ8.2cm 幅4.3cm 厚さ5.3cm 276.92g	石材:安山岩	右側面に刃傷状条線						
33	石製品	支脚	カマド支脚 長さ24.4cm 幅14.9cm 厚さ7.1cm 2984.36g	石材:安山岩	砥石を支脚として使用						

番号	種別	器種	備考
34	瓦	平瓦	カマド№6(床+6) 長さ15.2cm 幅24.7cm 厚さ0.6cm 色調灰 布目26×26 繩4 端部ヘラケズリ後ナデ
35	瓦	平瓦	カマド№1・2 (床+5~9) 長さ19.1cm 幅25.7cm 厚さ1.6cm 色調灰 布目25×30 繩5
36	瓦	平瓦	№4 カマド№2・7(床+5~15) 長さ16.5cm 幅17.8cm 厚さ1.6cm 布目25×24 繩4 端部ヘラケズリ後ナデ
37	瓦	平瓦	カマド 長さ6.0cm 幅7.3cm 厚さ1.6cm 色調灰 布目29×22 繩4
38	瓦	平瓦	長さ3.8cm 幅7.0cm 厚さ1.2 胎土I 布目31×24 繩4 端部ヘラケズリ後ナデ
39	瓦	平瓦	カマド№5 カマド(床+19) 長さ13.7cm 幅11.2cm 厚さ2.2cm 色調灰 布目23×20 繩4 端部ヘラケズリ後ナデ
40	瓦	平瓦	カマド 長さ26.5cm 幅11.8cm 厚さ1.5cm 色調灰 布目26×22 繩4 端部ヘラケズリ後ナデ

直径49~53cm、深さ19cmである。

壁溝は全周する。深さ7~12cm。

出土遺物は全て破片で、床面から覆土下層にかけて多く出土した。土師器甕・台付甕、須恵器坏・高台椀・皿・壺脚部、砥石、瓦がある(第104~107図)。

1~14は須恵器坏である。底部は回転糸切り後無調整。底径は口径の1/2以下に縮小したものが主体である。器形的には体部中位に膨らみを持ち、口縁部は外反気味に納める。全体に深身である。10は坏口縁部片で、体部側面に「田」の墨書が記されていた。14は底径が大きく無台椀と考えておく。15は胎土から末野産と考えられ、おそらく高台椀となろう。16は無台椀か。17~21は須恵器皿。底部は回転糸切り後無調整である。22は壺・瓶類の脚部である。須恵器は南比企産(12・21)・末野産(15・22)・東金子産(14)以外に、南比企産の器形に似るが、白色針状物質が含まれず、胎土が肌目細かい一群がある。仮に胎土Aとすると、胎土Aをもつグループが量的に最も多い。また、色調は灰白色に焼きあがるものが多い。産地は不明確であるが、三毳産の可能性を考えておきたい。

23~26は土師器武蔵型甕。口縁部が「コ」の字状に屈曲するいわゆる「コ」の字状口縁甕である。27~31は同タイプの台付甕である。32は砥石。33は砥石に使用された後、カマド支脚に転用されていた。強く被熱を受けている。

34~40は平瓦である。カマド袖部内壁の補強材として使用された。胎土は白色粒子を含み非常に緻密、焼きも硬質である。生産窯は不明。全て粘土板一枚作りで、側部はヘラケズリ後ナデ(1面)。凹

面は布目痕、凸面は長縄叩きで、観察表中布目の□×□とは3cm四方の縦糸×横糸の本数、縄の後の数字は幅1cmあたりの縄の本数である。34・36・38・40は狭端面、35・39は広端面が遺存する。

その他、図化した以外に製錬炉の炉壁の下部(かなり滓化が進んでいる)と思われる破片が390.64g出土している。

時期は9世紀後半(3/4期)頃と考えられる。

### 第39号住居跡(第103図)

第39号住居跡はL-5グリッドに位置する。第38号住居跡にほぼ直交するように重複しており、時期的にも近接時期であることから、第39号住居跡から第38号住居跡に直接建て替えた可能性が高い。西壁部は調査区外に延び、遺構の詳細は不明である。

平面形は方形系と推定される。残存規模は長軸長3.90m以上、短軸長3.84m、深さ0.46mである。主軸方位はN-72°-Eを指す。

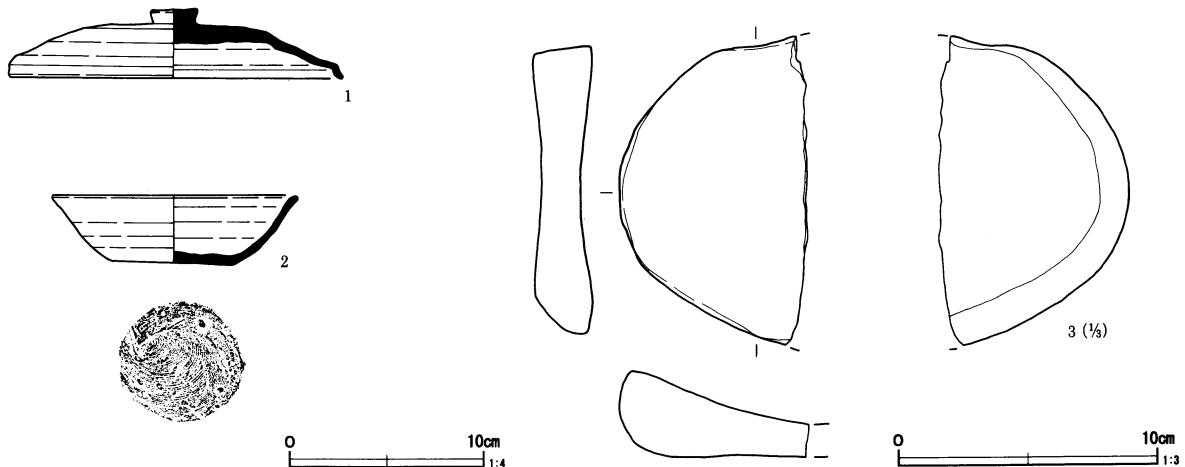
床面の大半は重複する第38号住居跡に削平されていた。覆土はロームブロックとローム粒子を多量に混在する褐色土で、明らかに埋め戻された土層であった。

カマドは東壁に設けられていた。燃焼部の大半は第38号住居跡に壊されていた。先端は壁を僅かに切り込んで構築されていた。袖部は白色粘土を用いてつくられたと思われるが、詳細は不明。

貯蔵穴・ピットは検出されなかった。

壁溝は第38号住居跡床面下からも検出され、全周する。深さ6~12cm。

出土遺物は少ない。南壁際からほぼ完形の須恵器坏、カマド脇から須恵器蓋と砥石が出土した(第108図)。1は南比企産の須恵器蓋。椀蓋であろう。



第108図 第39号住居跡出土遺物

第38表 第39号住居跡出土遺物観察表 (第108図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎 土	焼成	色調	出土位置・備考
1	須恵器	蓋	17.2	3.6	—	95	I・J	普通	灰	No.3(床直) ロクロ右回転 南北企産
2	須恵器	壺	12.5	3.6	6.2	100	I・J	良好	灰	No.1(床+16) 内外面に火櫻痕有り 南北企産
3	石製品	砥石	No.4(床+3)	長さ11.6cm	幅7.2cm	厚さ2.3cm	306.7g	石材:安山岩		

2は同様に南北企産の須恵器壺。底径は口径の約1/2で、回転糸切り後無調整である。やや浅身の器形である。3は石皿状の石製品。砥石か。上下両面と側縁の一部が平滑に磨かれている。上下面は凹面を形成している。条線は観察できない。

時期は9世紀中葉と推定される。

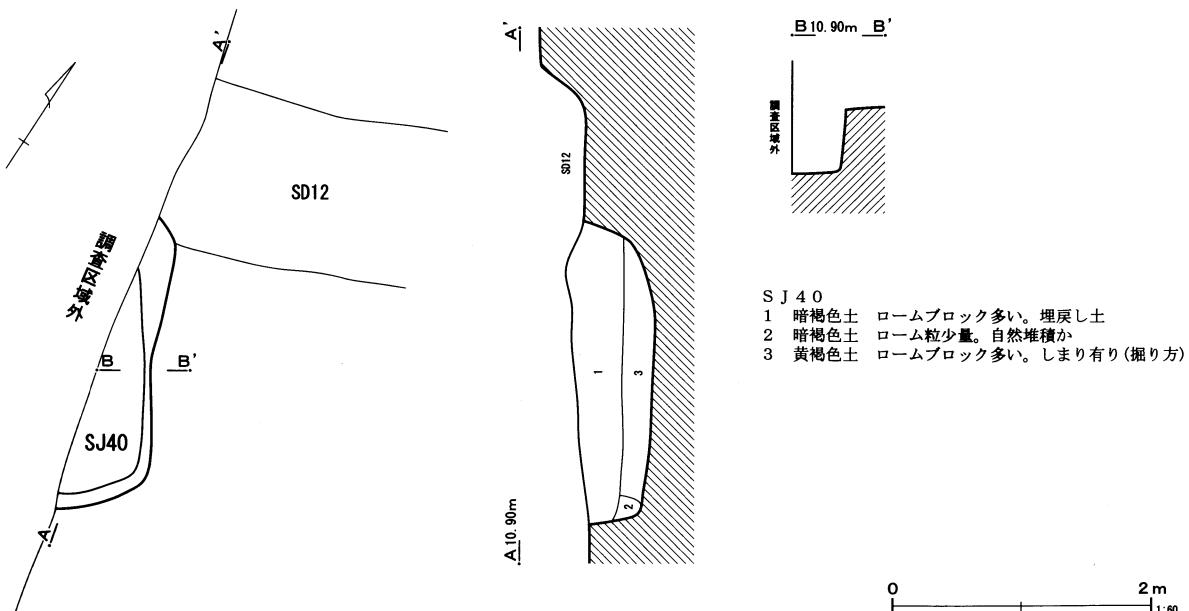
#### 第40号住居跡 (第109図)

第40号住居跡はM-7グリッドに位置する。住居跡南東コーナー付近が僅かに検出されたのみで、

大半は調査区外に延びている。上面を第12号溝跡に削平されていた。

平面形は方形系であろう。残存規模は長軸長2.72m、短軸長0.72m、床面までの深さ0.60mである。主軸方位は、東辺を基準にするとN-30°-Wを指す。

床面は掘り方上に貼床されていたが、特に硬く踏み固められた部分は見られなかった。覆土はロームブロックが混在する暗褐色土で、明らかに埋め戻さ



第109図 第40号住居跡

れた土層であった。

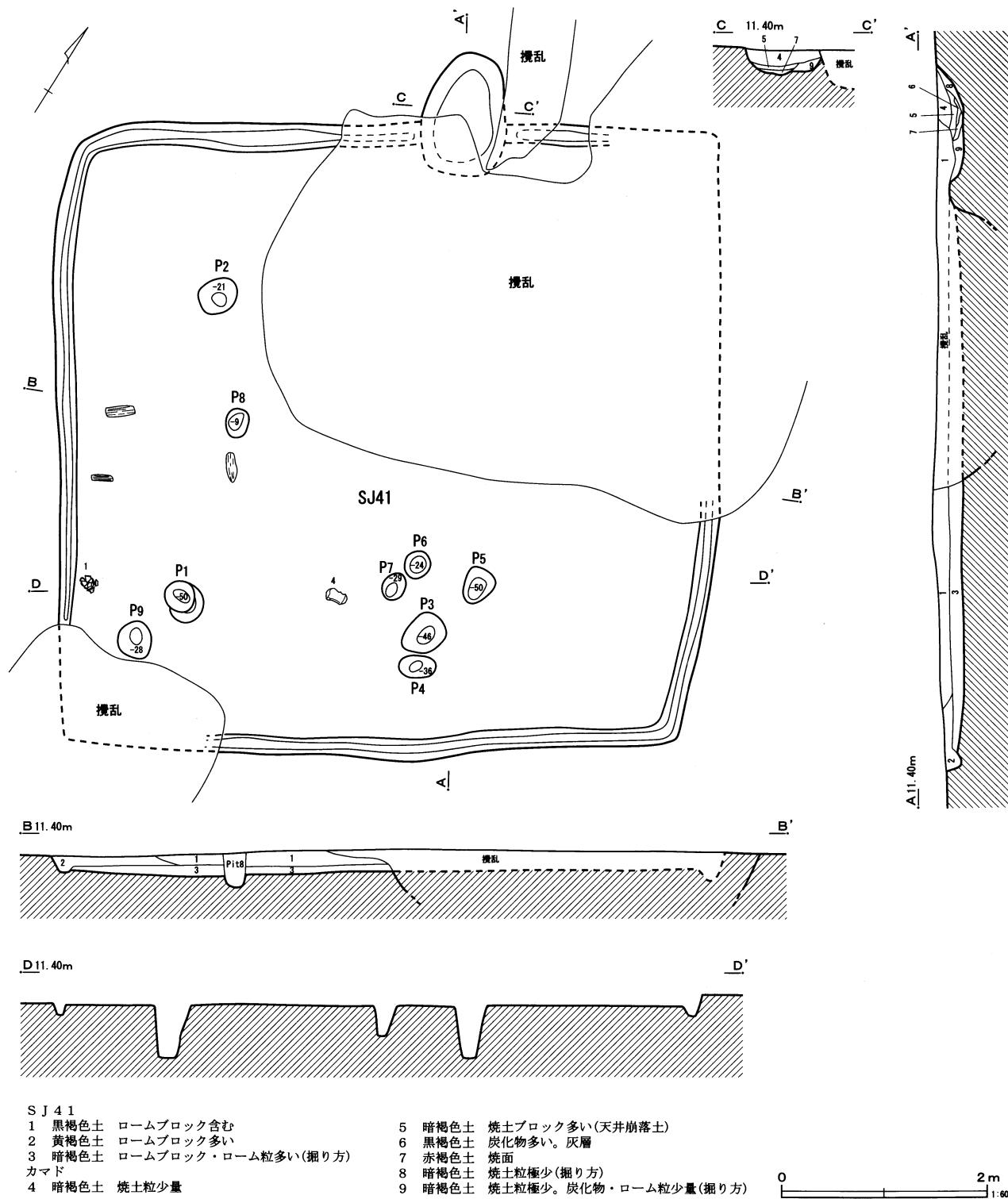
カマド他の施設は検出されなかった。

出土遺物は全く検出されず、時期は明らかにできない。

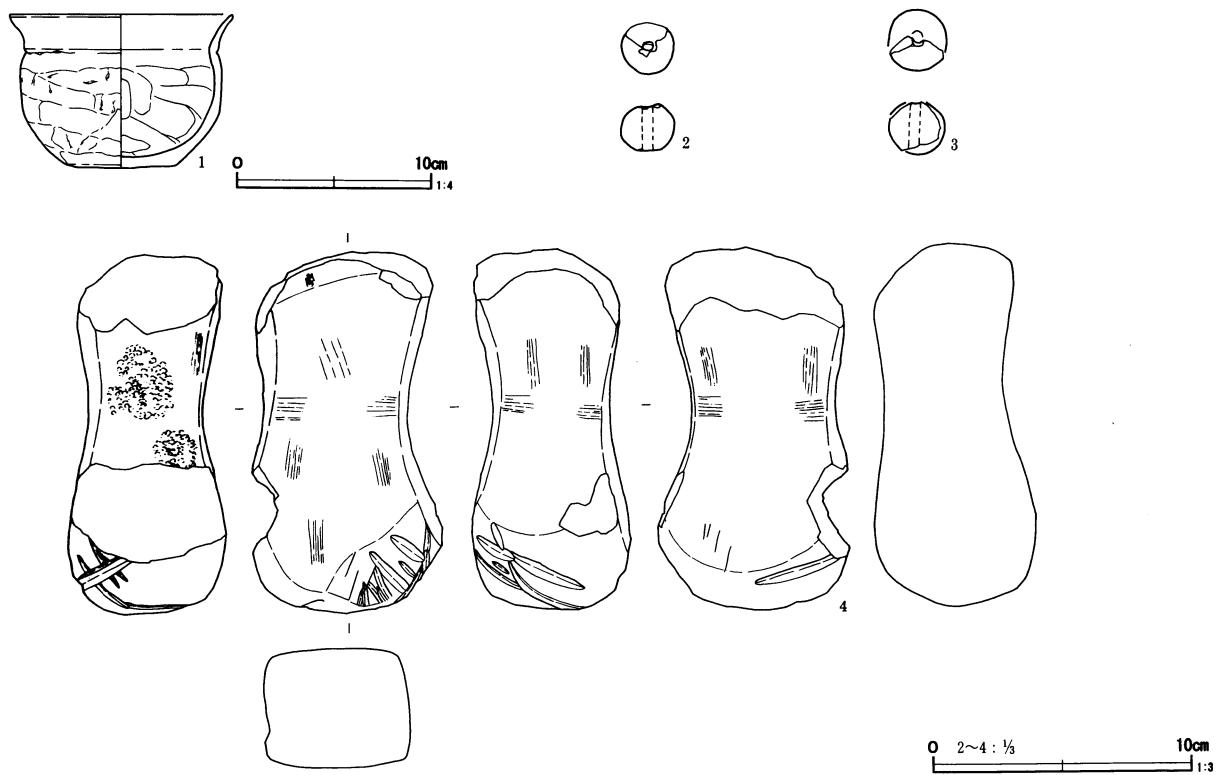
### 第41号住居跡（第110図）

第41号住居跡はJ・K-7・8グリッドに位置する。掘込みが浅く、攪乱が激しいため、遺構の遺存状態は良くない。

平面形は方形と推定される。規模は長軸長 6.42 m、単軸長 6.12 m、深さ 0.18 m である。主軸方位は N



### 第110図 第41号住居跡



第111図 第41号住居跡出土遺物

第39表 第41号住居跡出土遺物観察表 (第111図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	出土位置・備考
1	土師器	小型壺	(11.5)	7.9	(5.5)	55	H・I	良好	橙	No.2(床直) 体部外面雑なナデ 内面丁寧なナデ
2	土製品	土玉	最大径1.9×2.0cm	最大高1.9cm	残存率85%		孔径0.4cm	6.11g		
3	土製品	土玉	最大径(2.0)cm	最大高1.8cm	残存率25%		孔径0.4cm	2.75g		
4	石製品	砥石	No.1(床+10)	長さ13.9cm	幅7.3cm	厚さ6.2cm	891.77g			

—30°—Wを指す。

床面は概ね平坦である。南西部では確認段階では床面が露出していた。東コーナー部周辺は木根がはびこり、詳細な観察はできなかった。西壁付近では床面に炭化材が散在していた。攪乱が著しく、堆積環境は不明確である。

カマドは北西壁に設置されていた。攪乱に影響され、残存状態は悪いが、燃焼部は壁を切り込んでつくられていた。底面の掘込みは浅いが、燃焼部底面は被熱した状況が観察され、灰層はその上面に薄く形成されていた。

貯蔵穴は検出されなかった。ピットは9基検出された。配置からP1・P2・P5が主柱穴と考えられる。壁溝は全周する。深さ2~12cmである。

出土遺物は少ない。土師器小型壺と砥石、土玉が

ある(第111図)。1は南西壁際の床面から出土した。胴部雑なヘラナデ。4は砥石。表面は被熱しているように見える。4側面が良く使用され平滑。刃傷が顕著に残る。

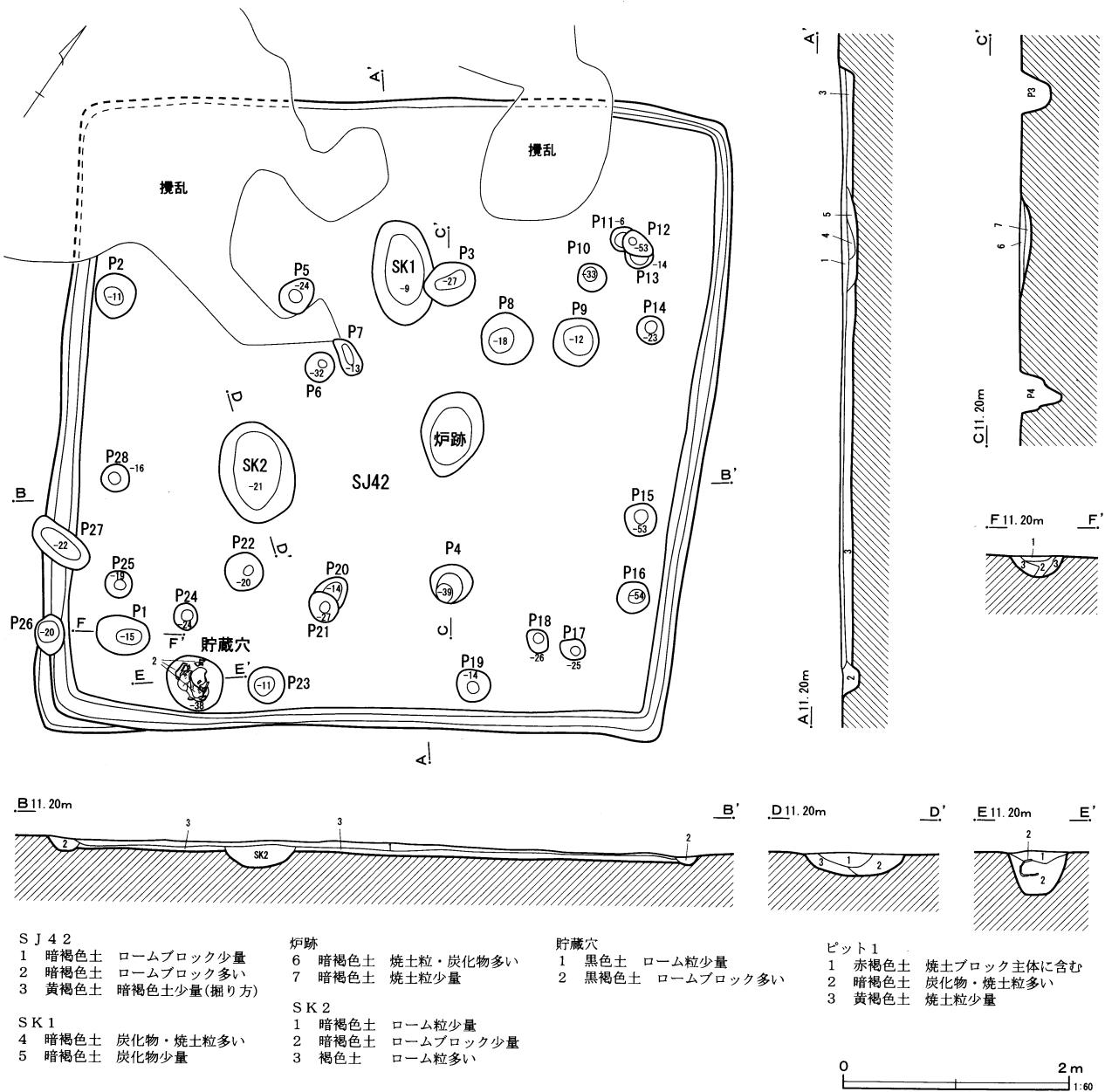
時期は不明確である。1の小型壺は古墳時代後期頃のものであろうか。

#### 第42号住居跡(第112図)

第42号住居跡はK・L-8・9グリッドに位置する。住居跡相互の重複はないが、抜根やピット等の攪乱が激しく、床面までの深度が浅いために遺存状態は良くない。

平面形は方形であるが、平行四辺形状に歪む。規模は長軸長5.82m、短軸長5.52m、深さ0.09mである。主軸方位はN-34°-Wを指す。

床面は平坦で、南壁から住居中央付近は部分的に



第112図 第42号住居跡

硬化していたが、面的に広がらなかった。覆土は暗褐色土をベースとするが、深さが浅いために堆積状況は不明確である。

炉跡は住居中央からやや北東壁に寄った位置に設けられていた。長径 75 cm、短径 53 cm の楕円形で、深さは 10 cm。底面は皿状に窪む地床炉で覆土中に土器片と焼土粒子が含まれるが、底面の被熱は弱い。また、炉跡と類似する楕円形土壙が 2 基検出された (SK1・2)。SK1 には焼土粒子が多量に含まれていたが、いずれも被熱面は観察できなかった。土層観察から住居に伴うと判断した。

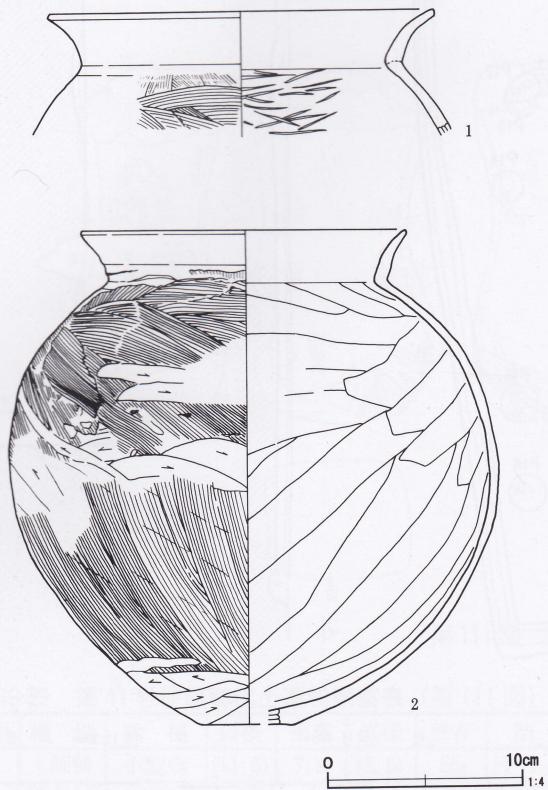
貯蔵穴は南壁際に位置する。規模は長径 52 cm、短径 46 cm、深さ 38 cm、内部から土器が 1 個体、横倒しの状態で出土した。

ピットは 27 基検出されたが、大半は中世以降の所産と考えられる。住居跡の主柱穴は P3・P4 を想定したが、4 本柱穴と仮定すると対応する他の 2 本は検出できなかった。また、位置的に柱穴とは異なると思われるが、P2 は覆土の状態から住居に伴う可能性がある。

壁溝は北壁部では明確ではなかったが、他の部分では巡ることが確認された。深さ 2~8 cm と浅い。

第40表 第42号住居跡出土遺物観察表 (第113図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	出土位置・備考
1	土師器	甕	(19.6)	6.3	—	20	H・I・K	良好	褐	炉 胴部外面ハケ目
2	土師器	甕	16.7	25.5	(4.8)	60	C・G・H・I	良好	暗褐	貯穴No.1・4・6(床-9~31) 底部ヘラケズリ 僅かに上げ底



第113図 第42号住居跡出土遺物

出土遺物は非常に少ない。土師器甕が2点検出された(第113図)。1は炉跡覆土から出土した。甕口縁部。2は貯蔵穴内から出土した。胴部が球状で口縁部はヨコナデ。胴部外面は弱い刷毛目(木口状工具ナデ)後、胴部中位以下ヘラケズリ。その後、木口状工具のナデを加えている。内面は強いヘラナデ(ケズリ?)。

出土遺物が甕に限られるため、不明確な面はあるが、時期は和泉期前半と考えておきたい。

#### 第43号住居跡(第114図)

第43号住居跡は調査区南端P-11、Q-10・11グリッドに位置する。谷部低地帯に移行する斜面に位置し、住居跡東半は洪水等により床面が削平されていた。第8号溝跡が覆土上面を通る。

平面形は方形と推定される。規模は長軸長6.30m、短軸長6.18m、深さ0.54mである。主軸方位はN

—36°—Wを指す。

床面は地形に沿うように、西から東に向かって緩やかに傾斜していた。カマド前面から住居跡中央部にかけて硬化面が観察された。

覆土第1・2層は鉄分や黒色砂(砂鉄由来か)を多量に含み、おそらく洪水等の影響で形成された流出土と思われ、住居跡床面を削平していた。第3~6層もおそらく自然に堆積した土層と考えられる。

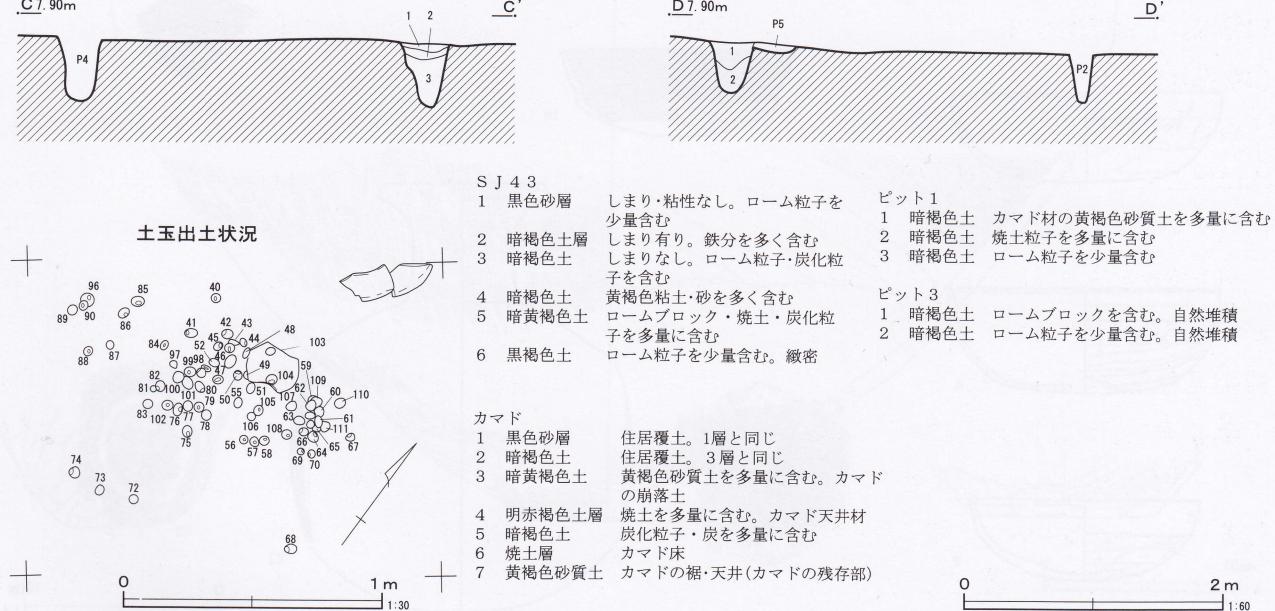
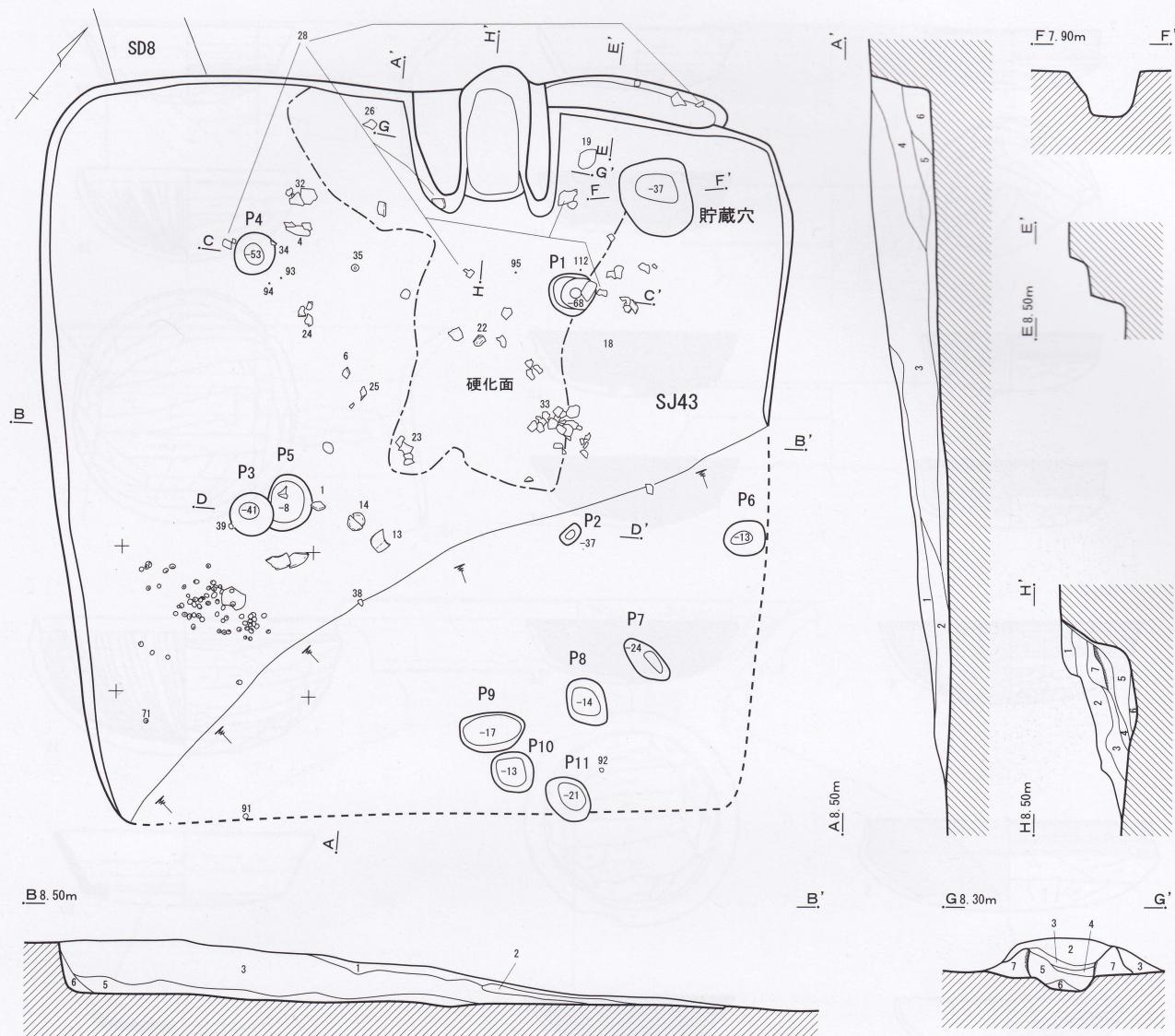
カマドは北西壁に設けられていた。全長は約1.20m、燃焼部はほぼ壁内に収まっている。袖部は黄褐色の砂質粘土を積み上げて構築されており、掛け口よりも奥の燃焼部内面天井部と側壁の被熱焼土が、ある程度原形を留めた状態で遺存していた。また、カマド東側の壁外に幅0.35m、長さ1.50mのテラス状の掘り込みが検出された。埋土は住居跡覆土と区別なく、棚状の施設が付属していた可能性がある。

貯蔵穴はカマド右脇に掘り込まれていた。不整円形で、規模は直径0.58~0.66m、深さ0.37mである。

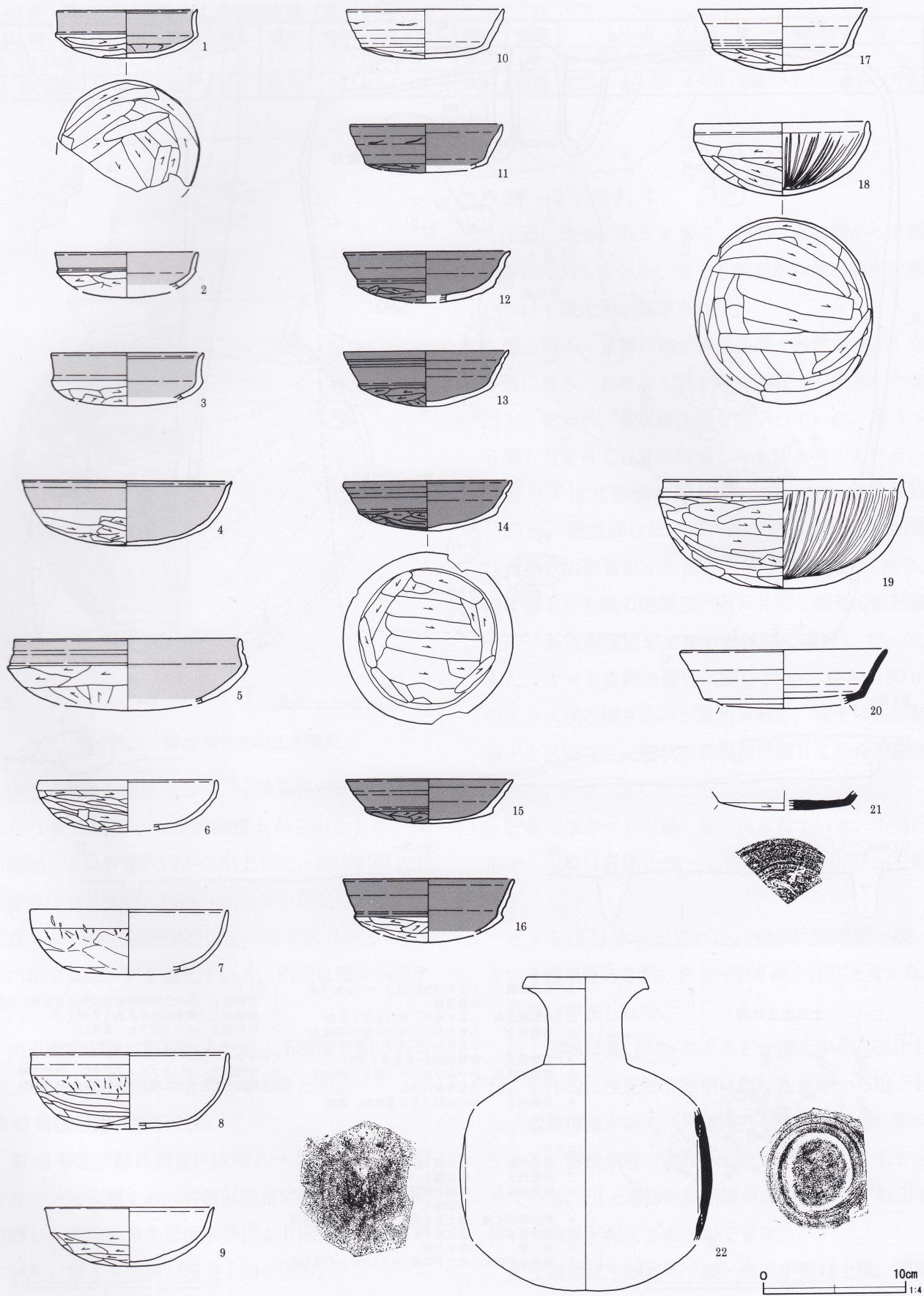
ピットは11本検出された。やや柱間距離が狭いという難点はあるが、P1~P4が主柱穴と考えた。壁溝は存在しない。

出土遺物は多いが、ほとんどが覆土中から出土した。全体的に住居跡北西壁に寄った位置から出土した。遺物標高が高く、南東寄りの遺物高が低い傾向があり、埋没過程で流れ込んだものが多いことを示している。出土遺物の時期幅が広いことも、斜面地特有の現象と捉えることができよう。

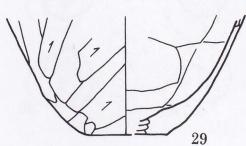
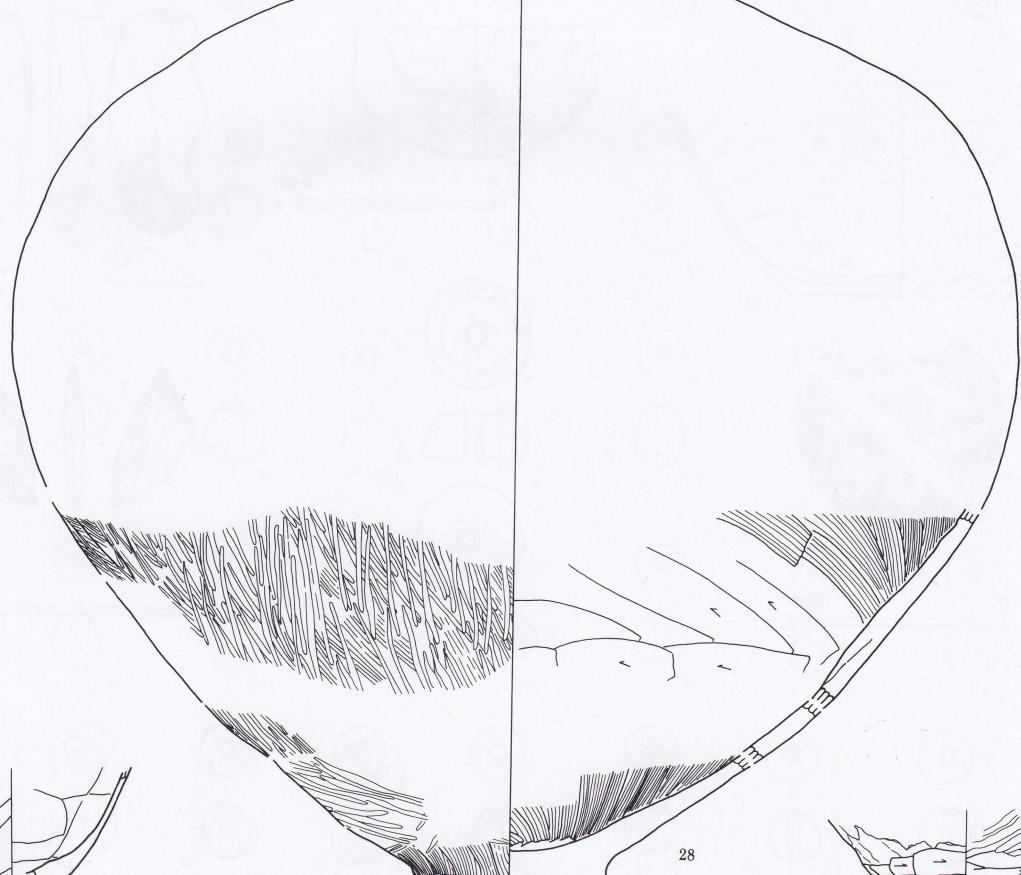
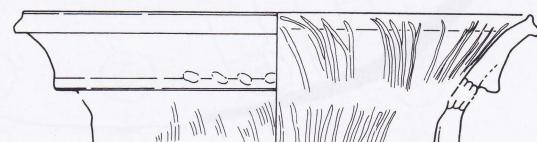
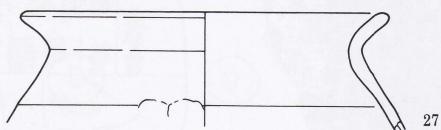
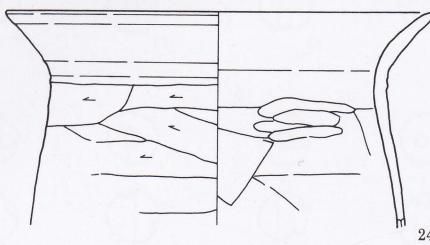
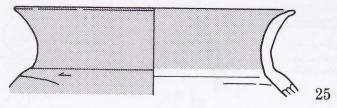
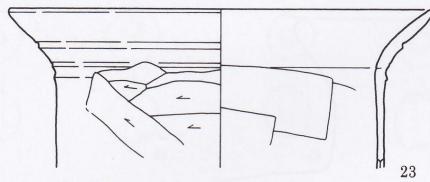
出土遺物は土師器壺・甕・壺・手捏ね土器、須恵器壺・瓶・甕、土玉、土錐、石製紡錘車・石鏃・スクレイパーがある(第115~118図)。1~5は比



第114図 第43号住居跡

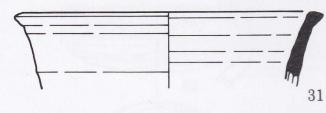


第115図 第43号住居跡出土遺物 (1)



0 10cm 1:4

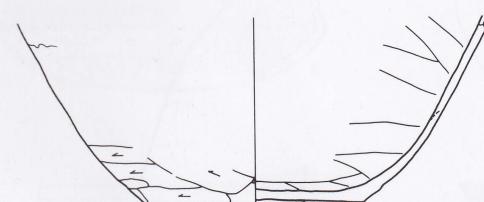
第116図 第43号住居跡出土遺物 (2)



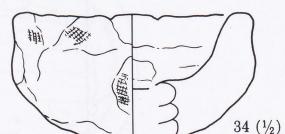
31



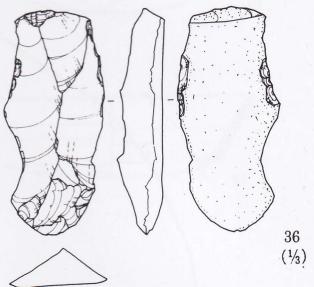
32



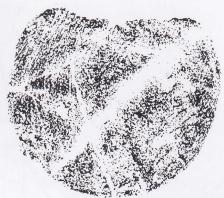
33



0 5 cm 1:2



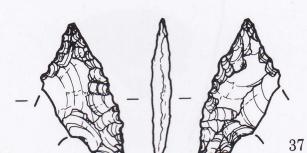
36 (1/3)



0 10 cm 1:4



35 (1/3)



37 (2/3)

0 5 cm 2:3



38



39



40



41



42



43



44



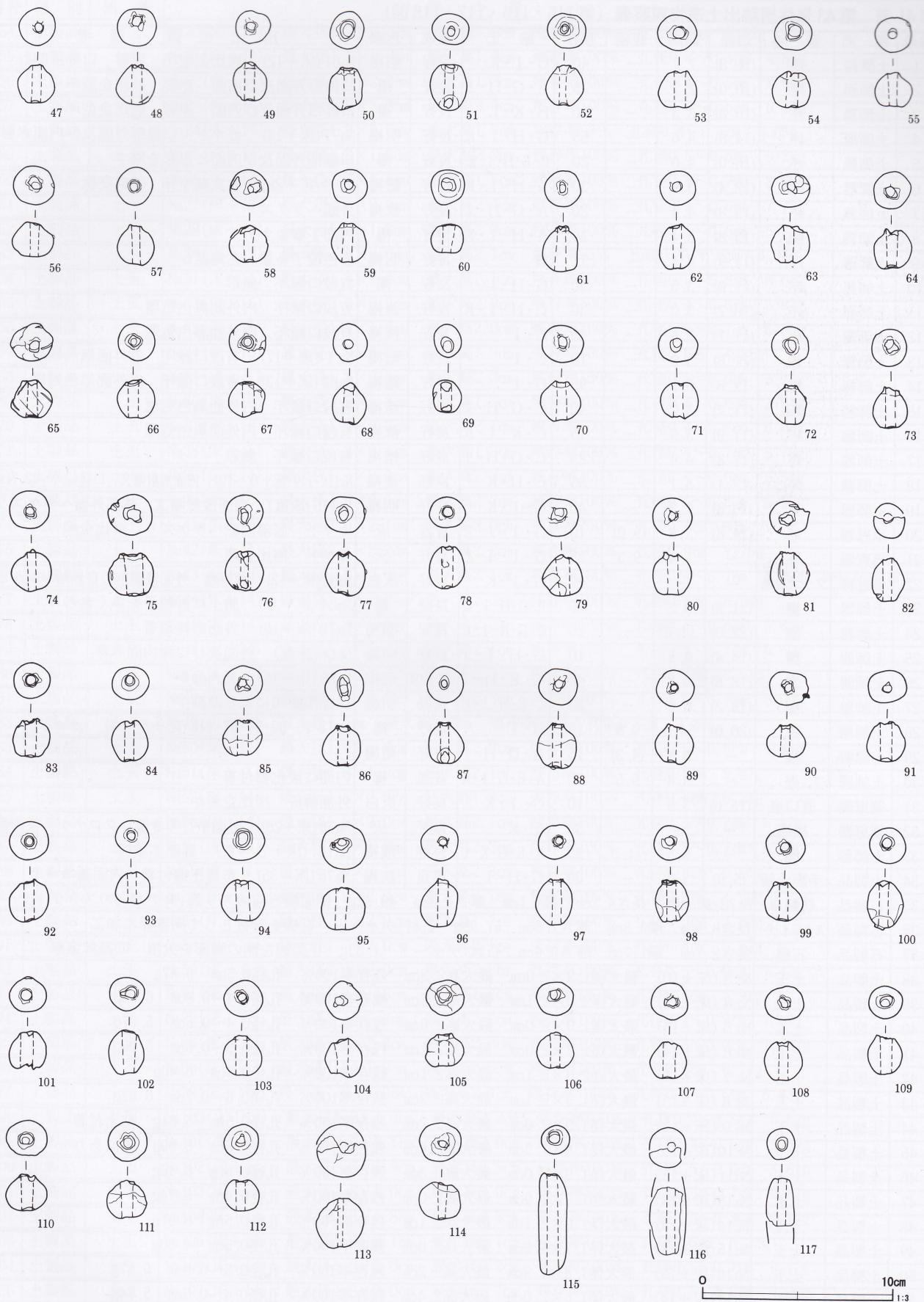
45



46

0 38~46 : 1/3 10 cm 1:3

第117図 第43号住居跡出土遺物 (3)



第118図 第43号住居跡出土遺物 (4)

第41表 第43号住居跡出土遺物観察表（第115・116・117・118図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	出土位置・備考
1	土師器	壺	(16.8)	7.7	—	40	C・I・K	良好	明褐	No.61(床+12) 總比企型壺 赤彩 口唇部凹む
2	土師器	壺	(10.0)	2.7	—	25	E・G・H・I	良好	褐	口縁部外面及び内面 赤彩 總比企型壺
3	土師器	壺	(10.8)	3.3	—	30	H・K・L	良好	褐	口縁部外面及び内面 赤彩 總比企型壺
4	土師器	壺	(14.8)	4.6	—	55	G・H・I・K	良好	明褐	No.77(床+13) カマド 口縁部外面及び内面赤彩
5	土師器	壺	(16.0)	4.0	—	20	C・E・H・I・K	良好	褐	口縁部外面及び内面に赤彩を施す
6	土師器	壺	(12.4)	3.6	—	30	A・H・I・K	良好	暗褐	No.69(床+28) 北武藏型杯 焼成堅緻
7	土師器	壺	(13.8)	4.4	—	20	A・G・H・I	良好	淡褐	外面ヘラケズリ
8	土師器	椀	(13.8)	5.4	—	30	A・H・I・K	良好	褐	内面丁寧なナデ
9	土師器	壺	(11.9)	4.1	—	75	H	良好	明褐	赤色粒子多量 在地産か
10	土師器	壺	(11.0)	3.5	—	30	G・H・I	良好	褐	有段口縁壺 無彩
11	土師器	壺	(10.7)	3.2	—	30	C・H・I・K	良好	淡褐	有段口縁杯 内外面黒色処理
12	土師器	壺	(11.7)	3.6	—	45	C・I	良好	淡褐	有段口縁壺 内外面黒色処理
13	土師器	壺	(11.5)	3.9	—	70	C・I	良好	暗褐	No.1(床+17) 有段口縁壺 内外面黒色処理
14	土師器	壺	11.8	3.5	—	95	C・I	良好	暗褐	No.62(床+13) 有段口縁壺 内外面黒色処理
15	土師器	壺	(11.7)	3.2	—	40	C・G・H・I	良好	暗褐	有段口縁壺 内外面黒色処理
16	土師器	壺	(11.9)	3.9	—	15	C・K・I・K	良好	淡褐	有段口縁壺 内外面黒色処理
17	土師器	壺	(11.8)	4.4	—	25	C・G・H・I	良好	橙褐	有段口縁壺 無彩
18	土師器	壺	12.1	5.1	—	95	C・H・K	良好	淡褐	No.117・119(床+9~10) 内面放射暗文 口径12.1~12.7cm
19	土師器	壺	(16.8)	7.7	—	40	C・I・K	良好	明褐	No.115(床直) 内面放射暗文 体部外面ヘラケズリ
20	須恵器	壺	(14.6)	3.8	(9.0)	10	G・I・J	良好	灰	カマド 底部回転ヘラケズリ 南北企産
21	須恵器	壺	—	1.4	9.3	25	G・I・J・L	良好	灰	カマド 南北企産
22	須恵器	フラスコ瓶	—	—	—	—	G・I・K	良好	灰白	No.81(床+12) 湖西産 外面濃緑色の自然釉がかかる
23	土師器	甕	(21.8)	8.2	—	20	E・G・H・I・L	良好	褐	No.64(床+5) 胎土に砂粒子を多く含む
24	土師器	甕	(22.0)	11.0	—	20	C・G・H・I・L	良好	明褐	No.70(床+16) 外面磨耗顕著
25	土師器	甕	(14.4)	4.5	—	10	G・H・I・J	良好	明褐	No.68(床直) 外面及び口縁内面赤彩
26	土師器	壺	(18.6)	6.4	—	40	C・E・H・I・K	良好	淡褐	No.88(床+16) 混入品か
27	土師器	甕	(18.2)	6.3	—	20	C・E・H・I・L	良好	明褐	口縁部使用による摩擦？
28	土師器	壺	(26.0)	54.0	9.9	15	H・I	良好	褐	No.73・86・89・94・97・118(床+8~34) カマド
29	土師器	甕	—	6.1	(4.3)	15	A・D・H	良好	暗褐	
30	土師器	壺	—	3.4	9.5	50	A・E・G・I・K	普通	褐	内面に炭化物付着
31	須恵器	直口壺	(15.0)	3.9	—	10	G・I・K	良好	灰白	外面降灰 南北企産か
32	須恵器	横瓶	—	—	—	30	I・K	良好	灰	No.76(床+26) 外面平行叩き後ロクロナデ 東海産
33	土師器	甕	—	9.5	11.3	35	A・E・G・K・L	良好	淡褐	No.121(床+3~6) 底部木葉痕
34	土製品	手捏土器	(5.9)	3.4	—	60	G・H・I	不良	淡褐	No.75(床+35) 布目圧痕付着 内面雜なナデ
35	石製品	紡錘車	No.78(床+8)	長さ4.2cm 幅4.1cm 厚さ1.3cm	49.32g	侧面横方向のスリ痕+タテ方向のスクランチ				
36	石製品	スクレイパー	長さ8.5cm 幅3.8cm 厚さ1.8cm	57.39g	石材:チャート	石核を素材として両側縁に加工				
37	石製品	石鎌	長さ2.7cm 幅1.7cm 厚さ0.4cm	石材:チャート	1.33g	正面図左側の脚部を欠損 凹基無茎鎌				
38	土製品	土玉	No.3(床+10)	最大径1.9×2.0cm	最大高2.3cm	残存率100%	孔径0.5cm	5.87g		
39	土製品	土玉	No.4(床+12)	最大径2.0×2.1cm	最大高2.2cm	残存率100%	孔径0.4~0.8cm	6.56g		
40	土製品	土玉	No.5(床+13)	最大径1.9×2.0cm	最大高2.0cm	残存率100%	孔径0.4~0.5cm	5.77g		
41	土製品	土玉	No.6(床+14)	最大径1.7×2.0cm	最大高2.1cm	残存率100%	孔径0.5~0.6cm	5.56g		
42	土製品	土玉	No.7(床+13)	最大径2.0×2.1cm	最大高2.1cm	残存率100%	孔径0.5cm	6.40g		
43	土製品	土玉	No.8(床+13)	最大径1.9×2.1cm	最大高2.3cm	残存率100%	孔径0.5~0.7cm	6.32g		
44	土製品	土玉	No.9(床+12)	最大径1.9×2.0cm	最大高2.2cm	残存率100%	孔径0.5cm	5.61g	粘土付着	
45	土製品	土玉	No.10(床+13)	最大径1.8×1.9cm	最大高2.4cm	残存率100%	孔径0.5cm	5.99g	圧痕あり	
46	土製品	土玉	No.11(床+12)	最大径1.9×2.0cm	最大高2.3cm	残存率100%	孔径0.6cm	6.46g		
47	土製品	土玉	No.13(床+13)	最大径1.9×1.9cm	最大高2.0cm	残存率100%	孔径0.4cm	5.74g		
48	土製品	土玉	No.14(床+13)	最大径1.9×2.1cm	最大高2.1cm	残存率100%	孔径0.5cm	6.51g		
49	土製品	土玉	No.15(床+13)	最大径1.7×1.9cm	最大高2.0cm	残存率100%	孔径0.5cm	4.60g		
50	土製品	土玉	No.16(床+13)	最大径1.8×1.9cm	最大高2.2cm	残存率100%	孔径0.5~0.9cm	5.57g		
51	土製品	土玉	No.17(床+14)	最大径1.6×2.0cm	最大高2.4cm	残存率100%	孔径0.4~0.5cm	5.74g		
52	土製品	土玉	No.18(床+14)	最大径1.8×2.0cm	最大高2.2cm	残存率100%	孔径0.4~0.6cm	5.62g		
53	土製品	土玉	No.19(床+14)	最大径1.9×2.0cm	最大高1.9cm	残存率100%	孔径0.5~0.7cm	5.45g		

番号	種別	器種	備 考				
54	土製品	土玉	No.20(床+14)	最大径1.9×2.0cm	最大高1.9cm	残存率100%	孔径0.6cm 5.62g
55	土製品	土玉	No.21(床+13)	最大径1.8×1.9cm	最大高1.9cm	残存率100%	孔径0.4~0.5cm 4.86g
56	土製品	土玉	No.22(床+14)	最大径2.0×2.2cm	最大高1.8cm	残存率100%	孔径0.4~0.5cm 5.65g
57	土製品	土玉	No.23(床+14)	最大径1.9×2.0cm	最大高2.0cm	残存率100%	孔径0.4~0.5cm 5.84g
58	土製品	土玉	No.24(床+14)	最大径1.9×2.0cm	最大高1.9cm	残存率98%	孔径0.4~0.5cm 5.05g
59	土製品	土玉	No.25(床+18)	最大径1.8×1.9cm	最大高2.2cm	残存率100%	孔径0.5~0.6cm 5.33g
60	土製品	土玉	No.26(床+18)	最大径1.7×1.8cm	最大高1.5cm	残存率100%	孔径0.5~0.7cm 3.66g
61	土製品	土玉	No.27(床+17)	最大径1.9×2.0cm	最大高2.4cm	残存率100%	孔径0.5~0.6cm 7.10g
62	土製品	土玉	No.28(床+18)	最大径1.8×1.9cm	最大高2.3cm	残存率100%	孔径0.4~0.5cm 5.74g
63	土製品	土玉	No.30(床+17)	最大径1.8×2.0cm	最大高2.1cm	残存率95%	孔径0.4~0.6cm 5.94g
64	土製品	土玉	No.31(床+16)	最大径1.9×2.0cm	最大高2.1cm	残存率100%	孔径0.5~0.6cm 6.67g
65	土製品	土玉	No.32(床+16)	最大径2.0×2.2cm	最大高2.0cm	残存率100%	孔径0.4~0.6cm 5.87g
66	土製品	土玉	No.33(床+15)	最大径1.9×1.9cm	最大高2.0cm	残存率100%	孔径0.5~0.7cm 5.95g
67	土製品	土玉	No.34(床+13)	最大径1.9×2.0cm	最大高1.9cm	残存率100%	孔径0.6cm 4.88g
68	土製品	土玉	No.35(床+6)	最大径1.8×2.0cm	最大高2.2cm	残存率100%	孔径0.5~0.6cm 5.78g
69	土製品	土玉	No.36(床+12)	最大径1.5×1.8cm	最大高1.7cm	残存率100%	孔径0.4~0.6cm 2.94g
70	土製品	土玉	No.37(床+12)	最大径1.9×2.2cm	最大高2.1cm	残存率100%	孔径0.4~0.6cm 6.68g
71	土製品	土玉	No.38(床+9)	最大径1.8×2.1cm	最大高1.9cm	残存率100%	孔径0.5~0.7cm 5.78g
72	土製品	土玉	No.39(床+14)	最大径1.9×2.0cm	最大高2.2cm	残存率100%	孔径0.4~0.6cm 5.55g
73	土製品	土玉	No.40(床+15)	最大径1.8×2.0cm	最大高2.2cm	残存率100%	孔径0.5~0.6cm 5.97g
74	土製品	土玉	No.41(床+12)	最大径2.0×2.1cm	最大高2.0cm	残存率100%	孔径0.4cm 6.84g
75	土製品	土玉	No.42(床+11)	最大径2.1×2.2cm	最大高2.2cm	残存率100%	孔径0.9cm 7.76g
76	土製品	土玉	No.43(床+14)	最大径1.9×2.0cm	最大高2.1cm	残存率100%	孔径0.4~0.7cm 5.72g 棒状压痕あり
77	土製品	土玉	No.44(床+14)	最大径1.9×2.2cm	最大高2.3cm	残存率100%	孔径0.5cm 6.94g
78	土製品	土玉	No.45(床+14)	最大径1.6×1.9cm	最大高2.2cm	残存率100%	孔径0.5~0.6cm 5.40g
79	土製品	土玉	No.46(床+14)	最大径2.0×2.1cm	最大高2.1cm	残存率100%	孔径0.5~0.7cm 6.60g
80	土製品	土玉	No.47(床+15)	最大径1.9×2.1cm	最大高2.2cm	残存率100%	孔径0.5cm 6.91g
81	土製品	土玉	No.48(床+14)	最大径1.7×2.1cm	最大高2.3cm	残存率100%	孔径0.5~0.7cm 6.09g
82	土製品	土玉	No.49(床+14)	最大径1.7cm	最大高2.3cm	残存率50%	孔径0.5cm 3.26g
83	土製品	土玉	No.50(床+14)	最大径1.9×1.9cm	最大高2.0cm	残存率100%	孔径0.5~0.6cm 5.41g
84	土製品	土玉	No.51(床+9)	最大径1.8×1.9cm	最大高2.1cm	残存率100%	孔径0.5cm 5.87g
85	土製品	土玉	No.52(床+14)	最大径1.8×2.0cm	最大高1.9cm	残存率100%	孔径0.6cm 5.21g
86	土製品	土玉	No.53(床+14)	最大径1.9×2.0cm	最大高2.1cm	残存率100%	孔径0.5~0.7cm 6.17g
87	土製品	土玉	No.54(床+13)	最大径1.9×1.9cm	最大高2.3cm	残存率100%	孔径0.5~0.7cm 5.29g
88	土製品	土玉	No.55(床+9)	最大径1.9×2.1cm	最大高2.3cm	残存率100%	孔径0.5cm 6.96g
89	土製品	土玉	No.56(床+11)	最大径1.9×2.0cm	最大高2.1cm	残存率100%	孔径0.4cm 5.20g
90	土製品	土玉	No.57(床+10)	最大径1.7×2.0cm	最大高1.7cm	残存率100%	孔径0.5cm 4.82g
91	土製品	土玉	No.58(床+11)	最大径1.7×2.0cm	最大高2.1cm	残存率100%	孔径0.4cm 5.87g
92	土製品	土玉	No.59(床-6)	最大径2.0×2.0cm	最大高2.2cm	残存率100%	孔径0.5~0.6cm 7.43g
93	土製品	土玉	No.71(床+16)	最大径1.7×1.8cm	最大高1.6cm	残存率100%	孔径0.5cm 3.91g
94	土製品	土玉	No.72(床+32)	最大径2.1×2.3cm	最大高2.2cm	残存率100%	孔径0.7~0.8cm 7.69g
95	土製品	土玉	No.85(床+34)	最大径2.3×2.3cm	最大高2.2cm	残存率100%	孔径0.5~0.6cm 10.23g
96	土製品	土玉	No.98(床+11)	最大径1.8×1.9cm	最大高2.5cm	残存率100%	孔径0.5cm 6.74g
97	土製品	土玉	No.99(床+13)	最大径1.8×1.9cm	最大高2.4cm	残存率100%	孔径0.5~0.6cm 6.43g
98	土製品	土玉	No.100(床+14)	最大径1.8×1.9cm	最大高2.2cm	残存率100%	孔径0.4~0.5cm 5.62g
99	土製品	土玉	No.101(床+13)	最大径2.0×2.1cm	最大高2.0cm	残存率100%	孔径0.4~0.6cm 5.59g
100	土製品	土玉	No.102(床+13)	最大径1.8×1.9cm	最大高2.5cm	残存率100%	孔径0.5~0.6cm 6.61g
101	土製品	土玉	No.103(床+13)	最大径1.8×2.0cm	最大高2.0cm	残存率100%	孔径0.5~0.7cm 5.47g
102	土製品	土玉	No.104(床+14)	最大径1.8×1.8cm	最大高2.3cm	残存率100%	孔径0.5~0.8cm 6.13g
103	土製品	土玉	No.105(床+15)	最大径1.8×2.1cm	最大径2.1cm	残存率100%	孔径0.6cm 6.22g
104	土製品	土玉	No.106(床+14)	最大径1.9×2.0cm	最大径2.2cm	残存率100%	孔径0.5~0.7cm 5.12g
105	土製品	土玉	No.107(床+14)	最大径1.8×2.0cm	最大径1.7cm	残存率100%	孔径0.5~0.6cm 4.90g
106	土製品	土玉	No.108(床+13)	最大径1.7×1.9cm	最大径1.8cm	残存率100%	孔径0.5cm 5.04g
107	土製品	土玉	No.109(床+15)	最大径1.9×2.0cm	最大高1.9cm	残存率100%	孔径0.5~0.8cm 5.55g

番号	種別	器種	備考					
108	土製品	土玉	No.110(床+12)	最大径1.7×2.0cm	最大高2.1cm	残存率100%	孔径0.5~0.6cm	6.13g
109	土製品	土玉	No.111(床+13)	最大径1.7×1.8cm	最大高2.1cm	残存率100%	孔径0.6~0.8cm	4.87g
110	土製品	土玉	No.112(床+11)	最大径1.8×2.1cm	最大高1.9cm	残存率100%	孔径0.5~0.7cm	5.21g
111	土製品	土玉	No.113(床+10)	最大径2.0×2.0cm	最大高2.0cm	残存率100%	孔径0.6~0.8cm	5.47g
112	土製品	土玉	No.114(床+12)	最大径1.8×1.9cm	最大高1.7cm	残存率100%	孔径0.5~0.6cm	4.09g
113	土製品	土玉	最大径2.5cm	最大高2.7cm	残存率50%	孔径0.4cm	10.71g	
114	土製品	土玉	最大径2.0×2.2cm	最大高2.0cm	残存率100%	孔径0.3~0.4cm	7.92g	
115	土製品	土錐	長さ5.3cm	最大径1.6cm	厚さ1.6cm	孔径0.5cm	残存率100%	10.49g
116	土製品	土錐	長さ3.5cm	最大径1.6cm	厚さ1.0cm	孔径0.5cm	残存率20%	5.38g
117	土製品	土錐	長さ2.4cm	最大径1.4cm	厚さ1.5cm	孔径0.6cm	残存率10%	4.18g

企型壺系統の土師器壺。いずれも内面と口縁部外面を赤彩する。1~3は続比企型の模倣壺。4は続比企型壺、5は比企型の模倣壺で、このなかでは最も古い。6世紀代のものであろう。6~8は北武藏型壺。9は模倣壺か。ヘラケズリで稜を作り出している。10~17は有段口縁壺。11~16は黒色処理されている。18・19は北武藏型の暗文壺である。内面に放射暗文が施されている。

20・21は須恵器壺である。いずれも南比企産で、底部全面回転ヘラケズリ。22はフラスコ瓶胴部片。2片あり、1次成形段階の底部と天井閉塞部の破片である。湖西産と推定される。

23・24・29は武藏型の土師器長甕。25は比企型の壺。胎土に白色針状物質を含み、外面と口縁部内面が赤彩される。26・28は複合口縁の壺。28は大型壺になる。同一個体の破片が広範囲に散在して出土したことから、二次的に流入したと推定される。おそらく和泉期から鬼高期初頭頃までのもので、遺構には伴わない可能性が高い。27は甕。胴部ナデ調整と思われ、器形・調整共に武藏産とは異なるものと考えられる。東関東系か。30は底径の大きな甕で、外面ヘラナデ(ミガキ風)+ケズリ、内面ヘラミガキ調整され、東関東系と推定される。33は土師器甕。外面ケズリであるが、底径が大きく、底部外面に木葉痕が残る。東関東(常陸または下野)産と思われる。31は須恵器直口壺。32は須恵器横瓶と思われる。外面は平行叩き後、ロクロナデ、内面は当て具の上をヘラケズリで薄く仕上げている。外面と内面の一部自然降灰。素地土は緻密で、やや

粗い白色鉱物が目立つ。東海産(湖西産か)と考えておきたい。34は手捏ね土器。布目圧痕が付着。

35は石製紡錘車。カマド前面の覆土下層出土。36はスクレイパー、37は石鏃。いずれも縄文時代の混入品。

38~114は土玉。南西コーナー部周辺の覆土下層から土玉が約100個、まとまった状態で出土した。有機質は残存していなかったが、土玉が漁具だとすると、この場所が網の保管場所であった可能性もある。115~117は土錐。

明確な時期を求めるのは難しいが、7世紀後半~末葉頃と考えておきたい。

#### 第44号住居跡(第119図)

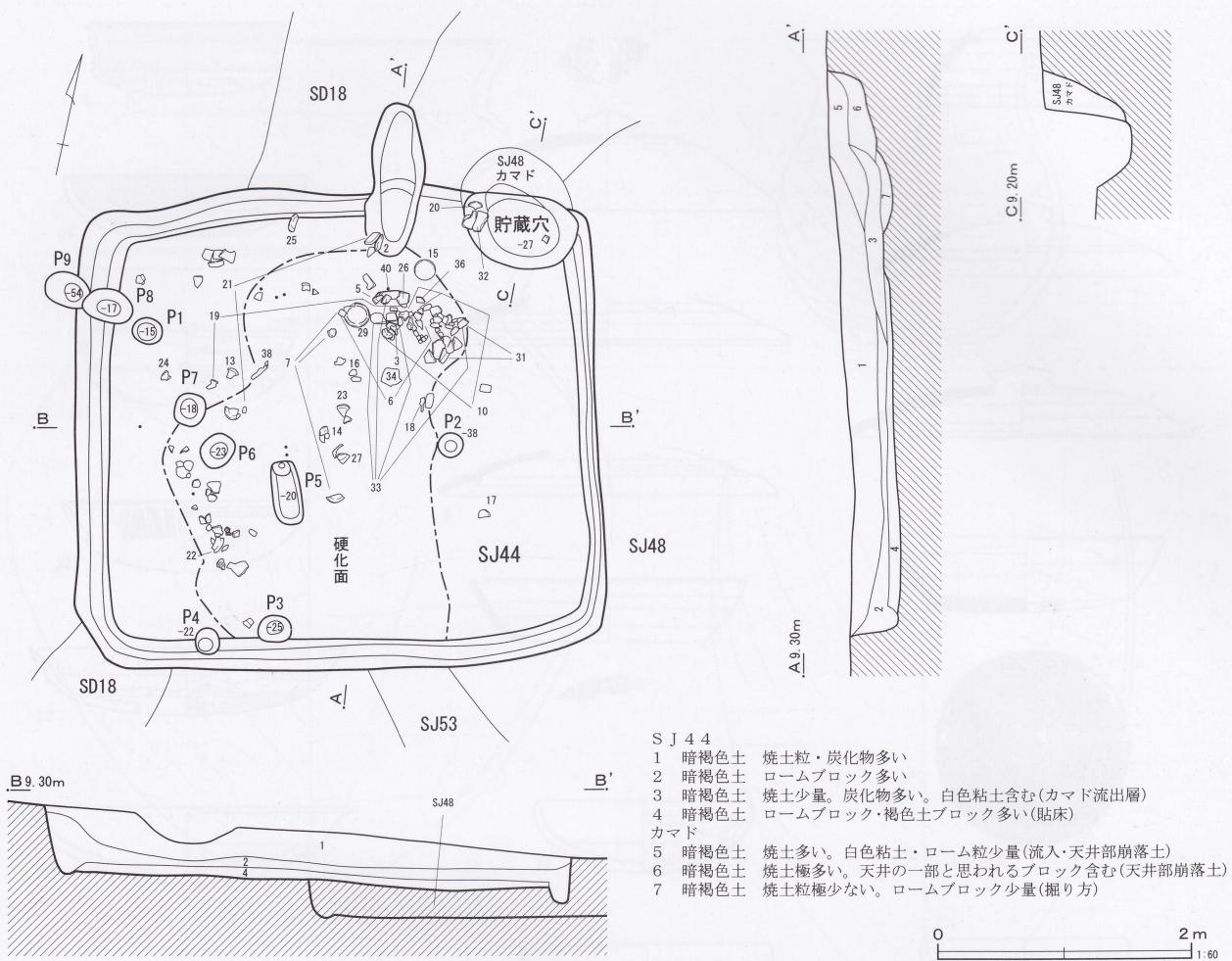
第44号住居跡は谷部に移行する斜面部、O-10・11、P-10グリッドに位置する。重複する第48・53号住居跡を切り、第18号溝跡に覆土上層を削平されていた。第47号住居跡は北側に接する位置にある。

平面形は方形で、規模は長軸長4.15m、短軸長3.78m、深さ0.46mである。主軸方位はN-13°-Wを指す。

床面は概ね平坦である。東壁際と西壁際の床面は軟弱であるが、住居跡中央部を中心に硬く踏み固められていた。

覆土は暗褐色土をベースにしており、下層にロームブロックが多量に含まれ(第2層)、上層に焼土粒子と炭化物が目立った。

カマドは北壁に設置されていた。全長は1.20m、燃焼部は壁内に収まり、煙道部は燃焼部よりも僅かに高い位置で水平方向に長く延びる。当初、重複す



第119図 第44号住居跡

る第48号住居跡のカマドを新段階の、本住居跡のカマドを古段階のカマドと誤認、カマド袖部を掘り過ぎてしまった。

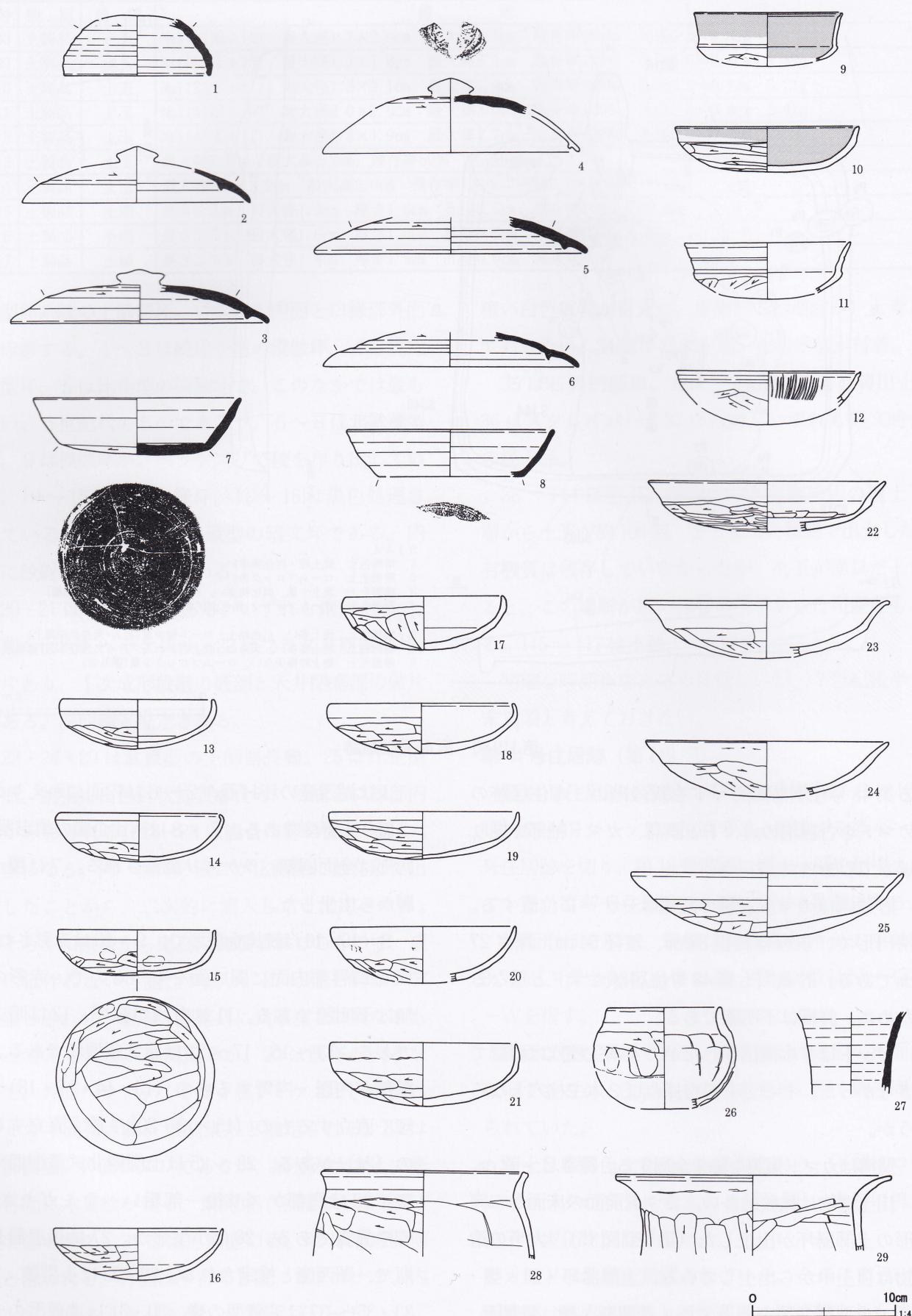
貯蔵穴はカマド右脇の北東コーナーに位置する。楕円形で、規模は長径88cm、短径54cm、深さ27cmである。貯蔵穴も第48号住居跡カマドと重なるために、詳細は不明確である。

ピットは9本検出されたが、4本主柱穴は確認できなかった。P2とP6を採れば2本主柱穴となろう。

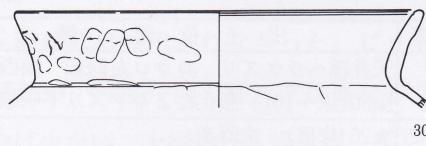
壁溝はカマド東脇を除き全周する。深さ2~12cm。出土遺物は比較的多い。カマド前面の床面から完成形の土師器壺が出土した(第120図15)。大半の遺物は覆土中から出土している。土師器壺・皿・甕・壺・小型甕・須恵器蓋・壺・長頸瓶・甕、鉄製品、土錘、土玉がある(第120・121図)。

1は湖西産の壺H蓋。2~6は内面にかえりをもつ蓋。末野産である。7・8は南比企産の須恵器壺。底部は全面回転ヘラケズリ調整される。7は覆土上層から出土した。

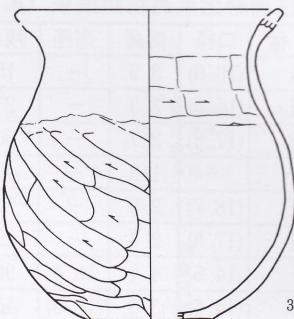
9・10・16は続比企型壺で、9・10は赤彩される。16は口唇部内面に弱い面をもつもので、赤彩の有無は不明瞭である。11は有段口縁壺、12は暗文壺である。13~15、17~21は北武藏型壺である。口縁部が内屈・内彎するもの(13・14・17・18)と、短く直立するもの(15・19・20)、長く直立するもの(21)がある。22~25は土師器北武藏型皿である。22は底部ケズリ後一部粗いヘラミガキされ、やや異質である。26は小型壺か。27は須恵器長頸瓶で、湖西産と推定される。28・32は小型甕、29・33・35~37は武藏型の甕、30・31は武藏型の土師器壺である。34は須恵器大甕で末野産。



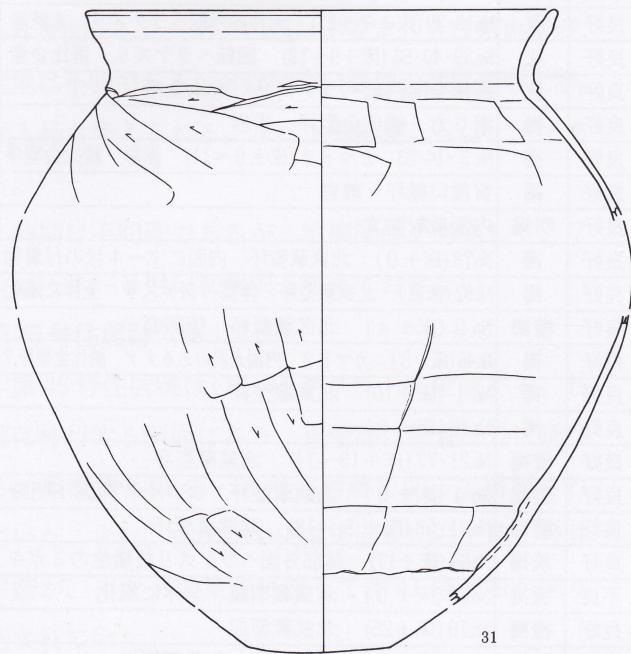
第120図 第44号住居跡出土遺物 (1)



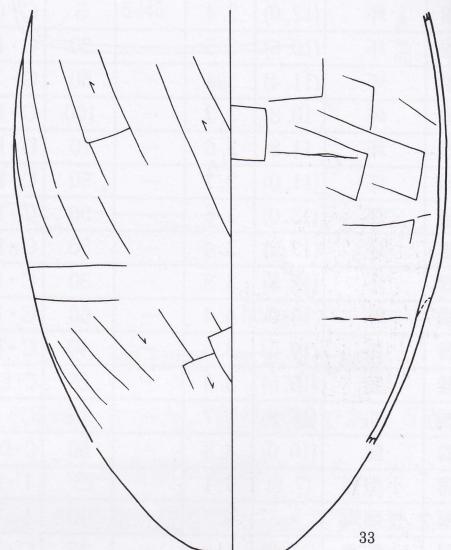
30



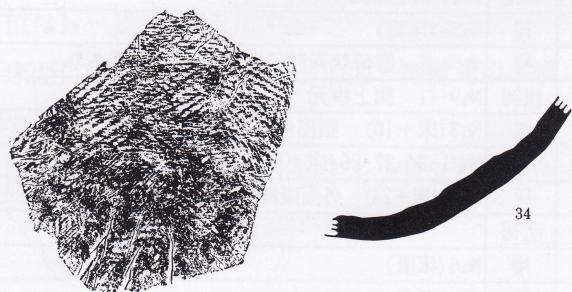
32



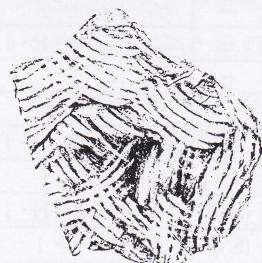
31



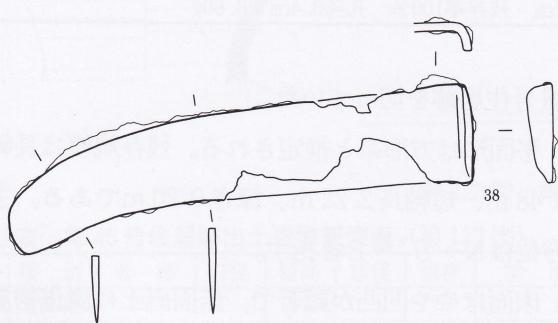
33



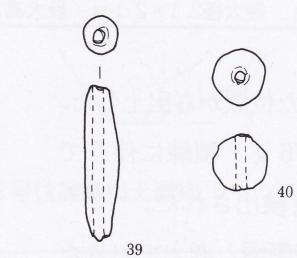
34



35

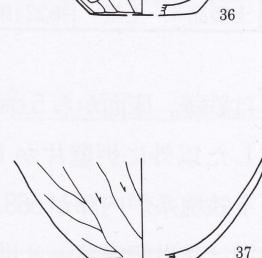


38



39

40



37

0 38~40 : 1/3 10cm 1:3

0 10cm 1:4

第121図 第44号住居跡出土遺物 (2)

第42表 第44号住居跡出土遺物観察表 (第120・121図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	出土位置・備考
1	須恵器	蓋	(10.0)	3.9	—	15	I	良好	灰	天井部ヘラケズリ ロクロ左回転 湖西産
2	須恵器	蓋	(16.0)	2.3	—	25	B・I・L	不良	灰	No.30(床+16) 風化によりケズリ不明瞭 末野産
3	須恵器	蓋	(17.8)	2.7	—	30	B・L	不良	黄灰	No.26(床直) 末野産
4	須恵器	蓋	—	1.3	—	40	B・D・I・K	普通	灰	ツマミ部分(欠損)にキザミあり 末野産
5	須恵器	蓋	(18.7)	2.5	—	10	B・G・H・I・L	不良	黄灰	No.28(床直) 天井部回転ヘラケズリ 末野産
6	須恵器	蓋	(17.8)	2.5	—	25	B・I	良好	灰	No.13・39(床+7~11) 天井部回転ヘラケズリ 末野産
7	須恵器	坏	14.6	4.1	10.4	90	I・J	良好	灰	No.39・40・56(床+9~12) 回転ヘラケズリ 南北企産
8	須恵器	坏	(14.5)	3.3	(10.0)	15	J・L	良好	灰	底部全面回転ヘラケズリ 南北企産
9	土師器	坏	(10.4)	3.4	—	20	H・I	良好	褐	掘り方 続比企型坏 赤彩
10	土師器	坏	12.9	3.2	—	75	H・I	良好	褐	No.7・14・23 カマド2(床+9~11) 赤彩 続比企型坏
11	土師器	坏	(11.6)	3.5	—	20	C・I	良好	褐	有段口縁坏 無彩
12	土師器	坏	(12.9)	2.4	—	5	C・G・H・I	良好	明褐	内面放射暗文
13	土師器	坏	(10.6)	3.5	—	30	C・E・H・I	良好	褐	No.78(床+9) 北武藏型坏 内面にタール状の付着物
14	土師器	坏	(11.4)	3.4	—	50	C・I・L	良好	褐	No.52(床直) 北武藏型坏 体部ヘラケズリ 全体に風化
15	土師器	坏	10.8	3.3	—	100	C・D・I・K	良好	橙褐	No.5(床+4) 北武藏型坏 指頭痕
16	土師器	坏	11.8	3.6	—	70	D・H・I・K	良好	褐	No.46(床+3) カマド2 内面光沢のあるナデ 続比企型坏?
17	土師器	坏	(11.0)	3.7	—	50	C・H・L	良好	褐	No.1(床+10) 北武藏型杯
18	土師器	坏	(13.0)	3.5	—	50	C・H・I・K	良好	褐	No.19(床+6)
19	土師器	坏	(13.2)	3.4	—	50	C・D・H・I	良好	橙褐	No.21・77(床+13~14) 北武藏型坏
20	土師器	坏	(12.8)	3.8	—	30	C・E・I	良好	橙褐	No.4(床+9) 北武藏型杯 ヨコナデ範囲不明瞭
21	土師器	坏	13.0	4.4	—	60	C・E・H・I	良好	橙褐	No.31・53(床+5~18) 北武藏型坏
22	土師器	皿	(16.5)	3.5	—	40	C・H・I・K	良好	淡褐	No.64(床+17) 体部外面ヘラケズリ後横位のミガキ
23	土師器	皿	(16.6)	3.9	—	25	C・E・G・I・L	不良	橙褐	No.50(床+9) 北武藏型皿 全体に風化
24	土師器	皿	(16.8)	3.7	—	15	C・E・I・K	良好	橙褐	No.79(床+25) 北武藏型皿
25	土師器	皿	(19.0)	4.5	—	50	C・D・G・H・I	良好	橙褐	No.34(床+6) 磨耗顯著 北武藏型皿
26	土師器	小型壺	(7.8)	7.1	—	25	I・K	普通	明褐	No.20(床+15)
27	須恵器	長頸瓶	—	5.7	—	10	I・K	良好	灰白	No.51(床+17) 内外面自然釉わずかに付着 湖西産
28	土師器	小型甕	(13.8)	5.8	—	15	C・I・K	良好	淡褐	口唇部沈線状
29	土師器	甕	19.3	5.7	—	85	B・I・K	良好	褐	No.38(床直)
30	土師器	壺	(20.8)	5.0	—	30	C・D・E・I	良好	褐	カマド 雲母状微粒子含む 粘土亀裂あり
31	土師器	壺	(24.0)	32.9	—	15	C・I	良好	淡褐	No.9・11 図上復元
32	土師器	小型甕	—	15.5	(6.4)	35	C・I・K	良好	褐	No.3(床+10) 頸部内面ケズリ
33	土師器	甕	—	22.2	4.7	50	C・G・H・I	普通	褐	No.9・24・27・29(床+0~14) 器面全体に磨耗
34	須恵器	大甕	—	7.4	—	10	C・I	良好	灰	No.18(床+24) 外面擬斜格子 内面青海波文 末野産
35	土師器	甕	—	1.5	(6.0)	35	C・G・H・I	良好	明褐	
36	土師器	甕	—	3.3	(5.5)	25	C・H・I	良好	褐	No.6(床直)
37	土師器	甕	—	5.4	(5.4)	20	C・H・I・	良好	褐	カマド2
38	鉄製品	鎌	No.48(床+5)	長18.2cm 刃幅3.5cm(最大) 背幅0.3cm						
39	土製品	土錐	長さ6.0cm 最大径1.4cm 厚さ1.5cm 孔径0.4cm 残存率90%	9.27g						
40	土製品	土玉	No.22(床+9)	最大径2.1×2.1cm 最大高2.2cm 残存率100%						
										孔径0.4cm 8.60g

38は鉄鎌。床面から5cm浮いた位置から出土した。図化した以外に炉壁片が116.76g、製鍊に伴うであろう鉄塊系炉内滓が568.89g検出された。

時期は7世紀末葉～8世紀前葉頃と考えておきた

#### 第45号住居跡 (第122図)

第45号住居跡はO・P-11グリッドに位置する。住居跡の東半は調査区外に延びている。重複する第

48号住居跡を切っていた。

平面形は方形系と推定される。残存規模は長軸長3.48m、短軸長2.22m、深さ0.20mである。主軸方位はN-5°-Eを指す。

床面はやや凹凸が顯著で、床面直上に炭化物層が広がっていた。硬く踏み固められた床面は形成されていなかった。

覆土は暗褐色土を基調としており、概ね自然堆積

と思われた。

カマド・貯蔵穴は検出されなかった。ピットは1本検出されたが、深度が浅く柱穴とは異なる。

出土遺物は少ない。土師器壺・壺・甕、須恵器壺、土玉がある(第123図)。1は北武藏型壺であるが、小片を図化したため、口径は不安定。2は須恵器壺。産地は不明である。3は複合口縁の土師器壺形土器。混入品と考えられる。4は土師器甕。5は土玉である。

時期は不明確であるが、重複関係を考慮して、7世紀後半～8世紀初頭頃と考えておきたい。

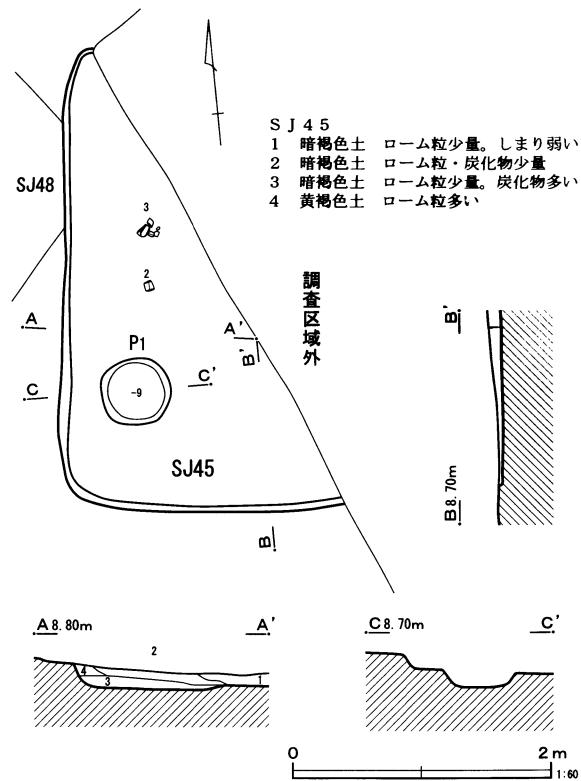
#### 第46号住居跡(第124図)

第46号住居跡はO-11グリッドに位置する。谷部に移行する斜面にあり、東壁部は調査区域外に延びる。重複する第48・50号住居跡を切って構築されていた。また、住居跡中央部床面を切って第1号井戸跡が、カマドの東側に接して第41号土壙が掘り込まれていた。

平面形は方形と推定される。残存規模は長軸長3.68m、短軸長2.40m、深さ0.25mである。主軸方位はN-29°-Wを指す。

床面は概ね平坦で、カマド前面と南壁周辺が硬く締まっていた。

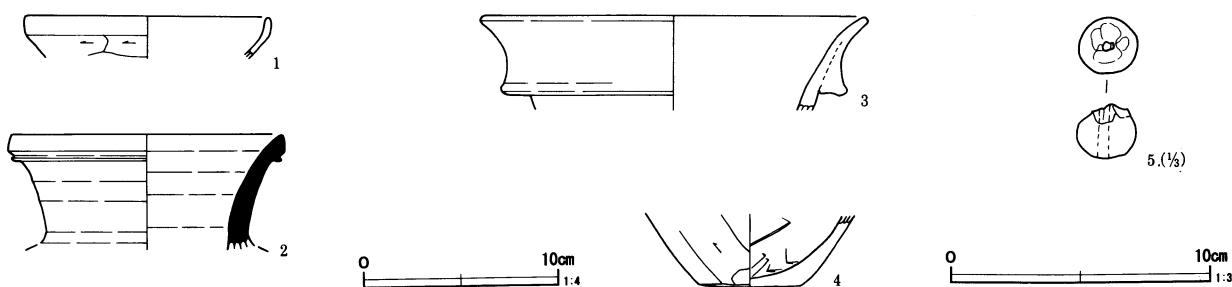
覆土はローム粒子と焼土粒子を少量含む暗褐色土



第122図 第45号住居跡

が厚く堆積していた。自然堆積であろうか。

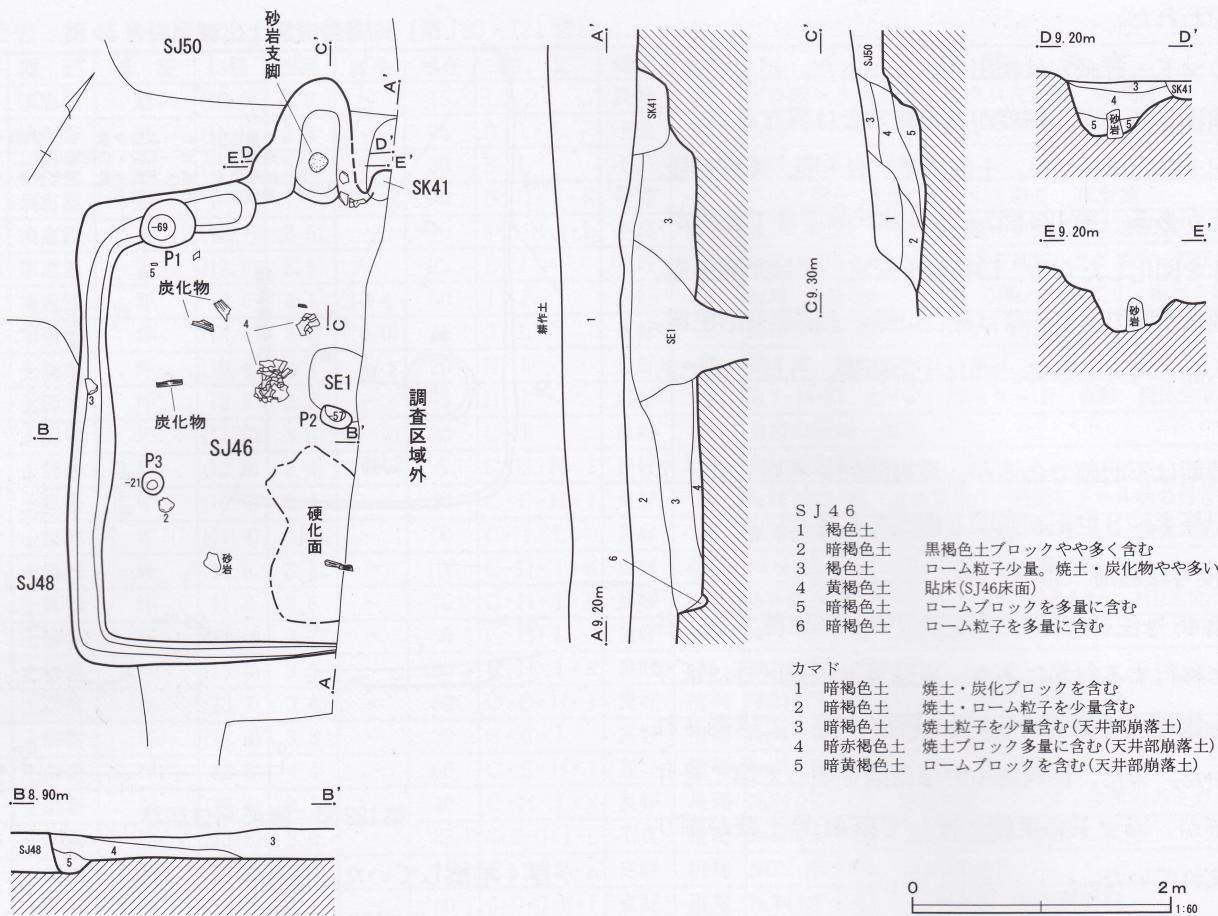
カマドは北西壁に設置される。カマド全長は0.96m、燃焼部は壁を切り込んで掘り込まれていた。燃焼部中央には砂岩製の支脚が据えられていた。右袖部は黄灰色の粘質土が使用されていたが、左袖部は明確に検出できなかった。住居跡廃絶時に取り去った可能性もある。



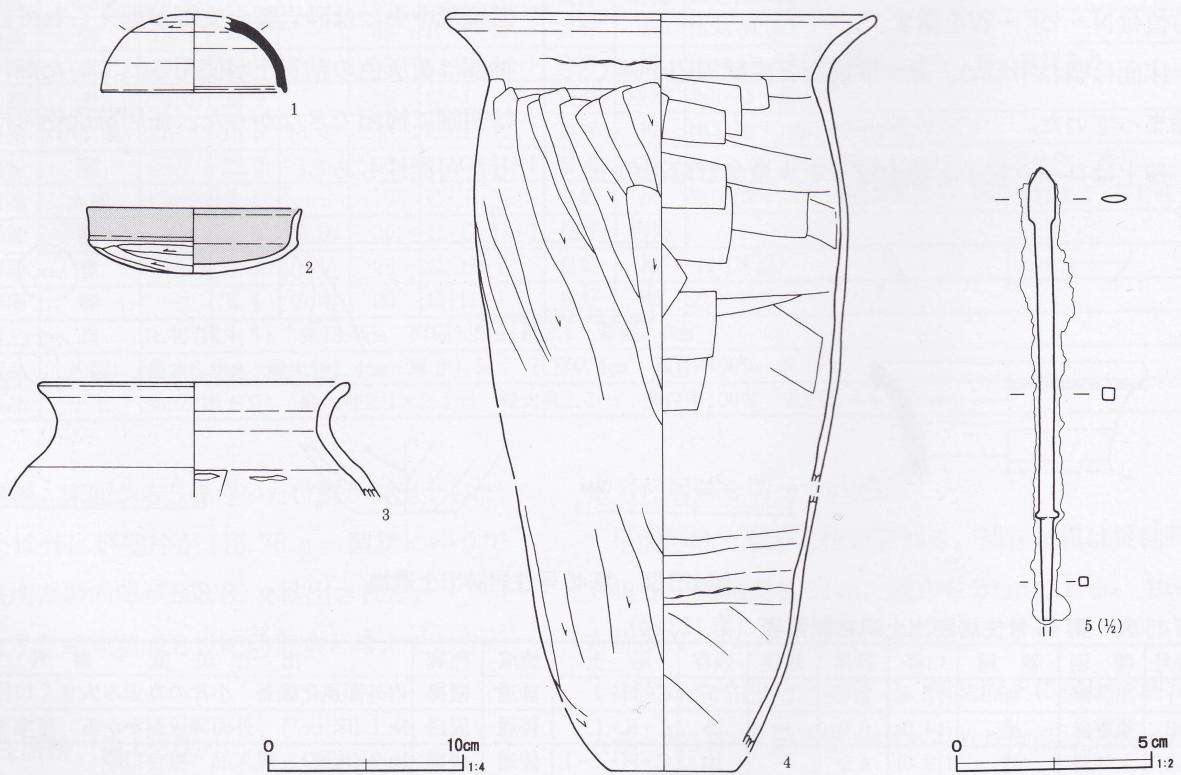
第123図 第45号住居跡出土遺物

第43表 第45号住居跡出土遺物観察表(第123図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	
										内外面風化顯著	小片の為歪み大きく口径不定
1	土師器	壺	(12.4)	2.2	—	5	C・H・I	普通	橙褐	No.1(床+7)	外面降灰がかかる 産地不明
2	須恵器	壺	(14.0)	6.0	—	25	I・K・L	普通	灰白	No.2(床直)	混入品 複合口縁
3	土師器	壺	(19.6)	4.9	—	10	C・H・I・L	普通	淡褐	—	—
4	土師器	甕	—	3.7	(5.4)	15	A・C・G・H・I	普通	褐	—	—
5	土製品	土玉	最大径2.2×2.3cm	最大高2.2cm	—	—	—	—	—	孔径0.3cm	9.48g 孔を摘み上げている



第124図 第46号住居跡



第125図 第46号住居跡出土遺物

第44表 第46号住居跡出土遺物観察表 (第125図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	出土位置・備考
1	須恵器	蓋	(9.4)	3.9	—	20	G・I・K	良好	灰白	カマド 坏H蓋 湖西産か
2	土師器	壺	11.0	3.4	—	65	G・H・I・K	良好	褐	No.8 (床+10) 口縁部外面及び内面赤彩 続比企型壺
3	土師器	甕	(15.7)	5.9	—	25	C・E・H・K・L	普通	褐	No.7 (床+20) 外面に厚く煤付着 胴部外面ヘラケズリ
4	土師器	甕	21.4	38.0	—	70	C・G・H・I・K	良好	褐	No.3・4 (床+1~8)
5	鉄製品	鉄鎌	No.5 P1(床直)	残長11.6cm	鎌身長1.4cm	鎌身幅0.7cm	長頸 柳葉形 両丸造			

貯蔵穴は検出されなかった。ピットは3本検出された。P1は深いが主柱穴とはならないであろう。

壁溝は全周する。深さ7~18cm。

出土遺物は少ないが、主に床面から覆土下層にかけて出土している。土師器壺・甕・壺、須恵器蓋、鉄製品がある(第125図)。1は須恵器壺H蓋。口唇部に沈線が入る。湖西産と推定される。2は続比企型の模倣壺。赤彩が施されている。覆土下層出土。3は土師器甕。胴部外面はケズリではなくナデ調整である。東関東系か。煤が付着する。床面出土。4は土師器甕。ほぼ床面出土。5は長頸棘箆被両丸造柳葉形式の鉄鎌である。覆土下層出土。

時期は7世紀中葉から後半頃と考えておきたい。

#### 第47号住居跡(第126図)

第47号住居跡は、谷に移行する斜面部のO-10グリッドに位置する。第44号住居跡が南に接して構築されていた。第38号土壙と第18号溝跡が覆土上面を切って掘り込まれていた。

平面形は縦長の長方形で、規模は長軸長4.56m、短軸長2.97m、深さは0.74mと非常に深い。主軸方位はN-40°-Eを指す。

床面は凹凸が顕著で、硬いロームブロック(ブラックバンドか)が全面に広がっていた。床面上には、炭化材や焼土が多量に検出された。火災を受け、焼失した住居跡と考えられる。

覆土はロームブロック混じりの黄褐色土と暗褐色土が厚く堆積していた(第2~7層)。明らかに人为的な堆積土である。消火の為に投げ込んだものであろうか。最上層(第1層)は自然堆積と思われる。

カマドは北東壁に設けられていた。全長は1.05m、燃焼部は僅かに壁を切り込んで構築されていた。燃

焼部幅は約50cmである。底面は皿状に浅く窪み、奥壁は急角度で立ち上がる。燃焼部ほぼ中央部の少し右に寄った底面には、砂岩製の支脚が据えられていた。支脚からややずれた状態で、土師器の甕が出土した。甕の内面には、土師器の壺が置かれていた。

おそらくこの土師器甕はカマドに掛けられた状態であったと考えられる。内面から出土した土師器壺は蓋代わりに使用された可能性もある。突然の火災で放置されたのであろうか。

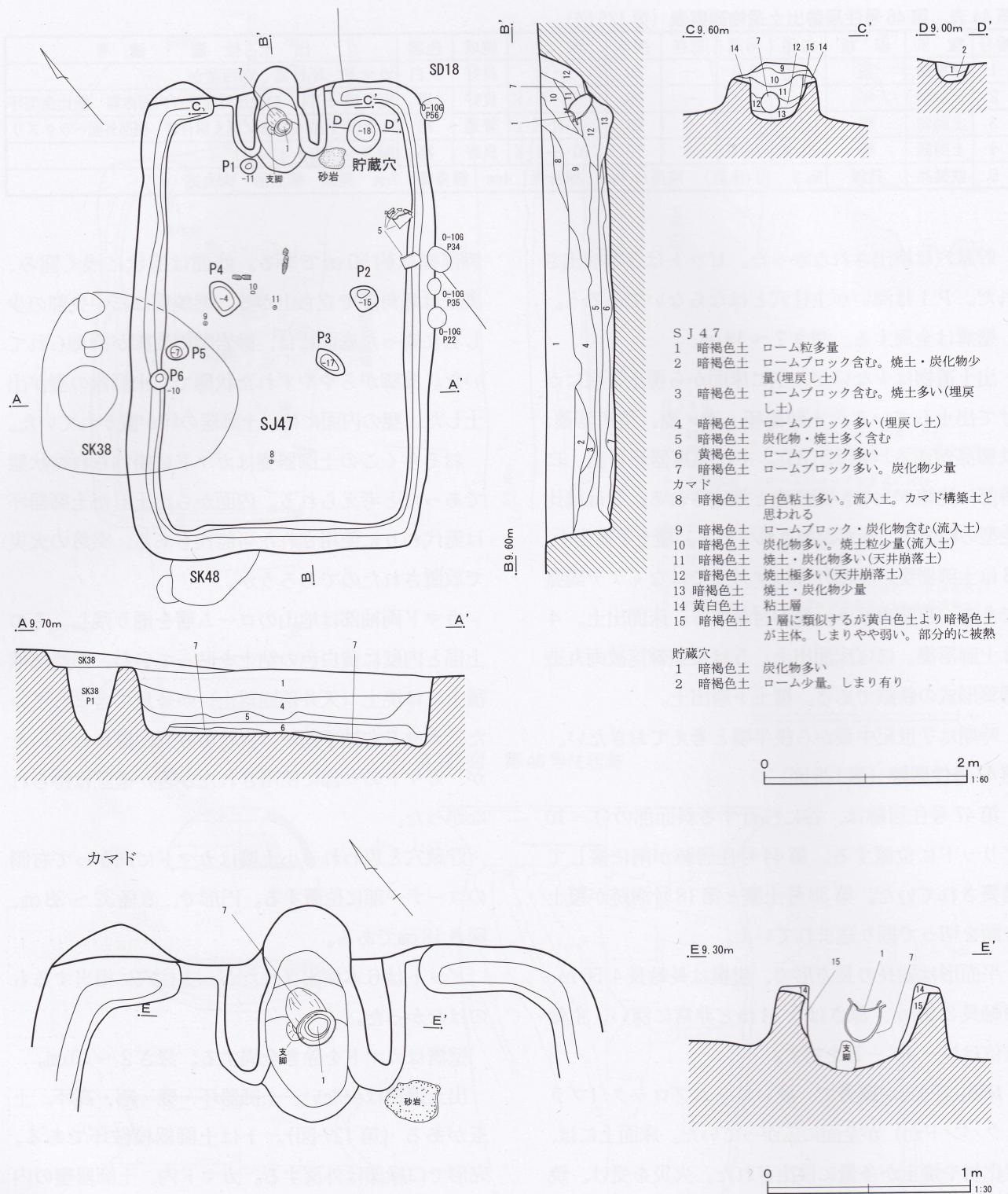
カマド両袖部は地山のローム層を掘り残し、その上部と内壁に黄白色の粘土を貼っていた。燃焼部堆積土には焼土(天井部崩落土)が多量に含まれていた。カマド右袖手前には板状の砂岩が置かれていたが、カマドの一部に使用されたか否か確証は得られなかった。

貯蔵穴と思われる小土壙はカマドに向かって右側のコーナー部に位置する。円形で、直径32~38cm、深さ18cmである。

ピットは6本検出されたが、主柱穴に相当するものはなかった。

壁溝はカマドを除き全周する。深さ2~10cm。

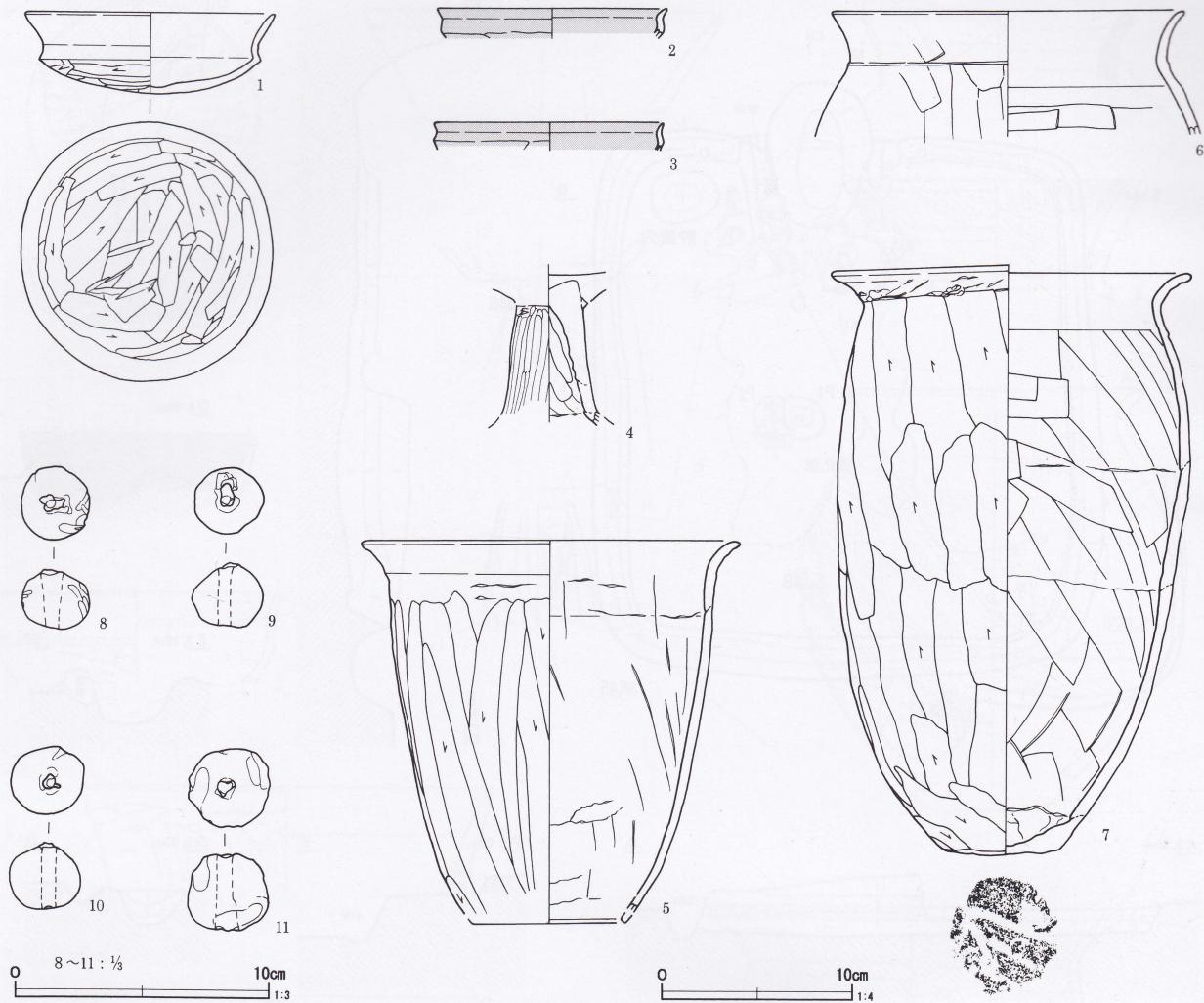
出土遺物は少ない。土師器壺・甕・瓶・高壺、土玉がある(第127図)。1は土師器模倣壺である。完形で口縁部は外反する。カマド内、土師器甕の内部に正位で置かれていた。内面と口縁部外面を中心に煤が付着していた。火災の影響ということもあるが、甕の蓋として使用されたこともその一因となったと考えることもできる。2・3は比企型壺の小片で、口径は不安定である。口縁部は「S」字状に屈曲し、内外面赤彩が施されている。4は高壺で混入品と思われる。5は土師器甕。南東壁部直下の覆



第126図 第47号住居跡・カマド

土下層から出土した。6は土師器甕で、胴部ナデ調整。表面が光沢を帯びる。7は土師器甕。カマド内に掛けられた状態で出土した。長胴甕ではあるが、胴部に膨らみが残る。底部は木葉痕。胴部は縦方向のヘラケズリ後、部分的にナデ調整。厚手でばつた

りしたつくりである。胴部外面には煤が付着する。8～11は土玉。いずれも覆土上層から検出された。住居跡の時期は土師器壺と長胴甕の様相から6世紀後半～末葉と考えておきたい。



第127図 第47号住居跡出土遺物

第45表 第47号住居跡出土遺物観察表 (第127図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎 土	焼成	色調	出土位置・備考
1	土師器	壺	13.0	4.2	—	100	C・E・H・I	良好	暗褐	No.5 カマド内(床+4) 内面・口縁部外面煤付着
2	土師器	壺	(12.0)	1.6	—	5	H・I・J	良好	褐	比企型壺 赤彩 口径不定
3	土師器	壺	(12.0)	1.5	—	5	H・I・J	良好	褐	比企型壺 赤彩 稜は鋭い
4	土師器	高壺	—	7.6	—	80	A・H・I	良好	明褐	脚部内面指ナデ痕明瞭 混入か
5	土師器	甌	19.6	19.6	—	90	C・G・H・I	良好	淡褐	No.1・2・3・4 (床+6~10) 胴部外面光沢のあるヘラナデ
6	土師器	甌	(18.4)	6.6	—	10	E・H・I	良好	明褐	胴部外面やや光沢のあるナデ 内面木口ナデ
7	土師器	甌	18.5	30.9	6.3	95	C・E・H・I・L	良好	褐	No.10(床直) 底部木葉痕 胴部外面煤付着
8	土製品	土玉	No.9 (床+36)	最大径2.7×2.9cm	最大高2.4cm	残存率100%	孔径0.4~0.6cm	16.72g	棒状工具で3重に孔を穿った痕跡	
9	土製品	土玉	No.6 (床+25)	最大径2.6×2.7cm	最大高2.5cm	残存率100%	孔径0.4~0.5cm	15.23g		
10	土製品	土玉	No.7 (床+34)	最大径2.8×3.0cm	最大高2.7cm	残存率100%	孔径0.6cm	18.62g		
11	土製品	土玉	No.8 (床+41)	最大径3.1×3.4cm	最大高3.2cm	残存率100%	孔径0.5~0.9cm	25.83g	棒2本分の孔が穿たれる	

第48号住居跡 (第128図)

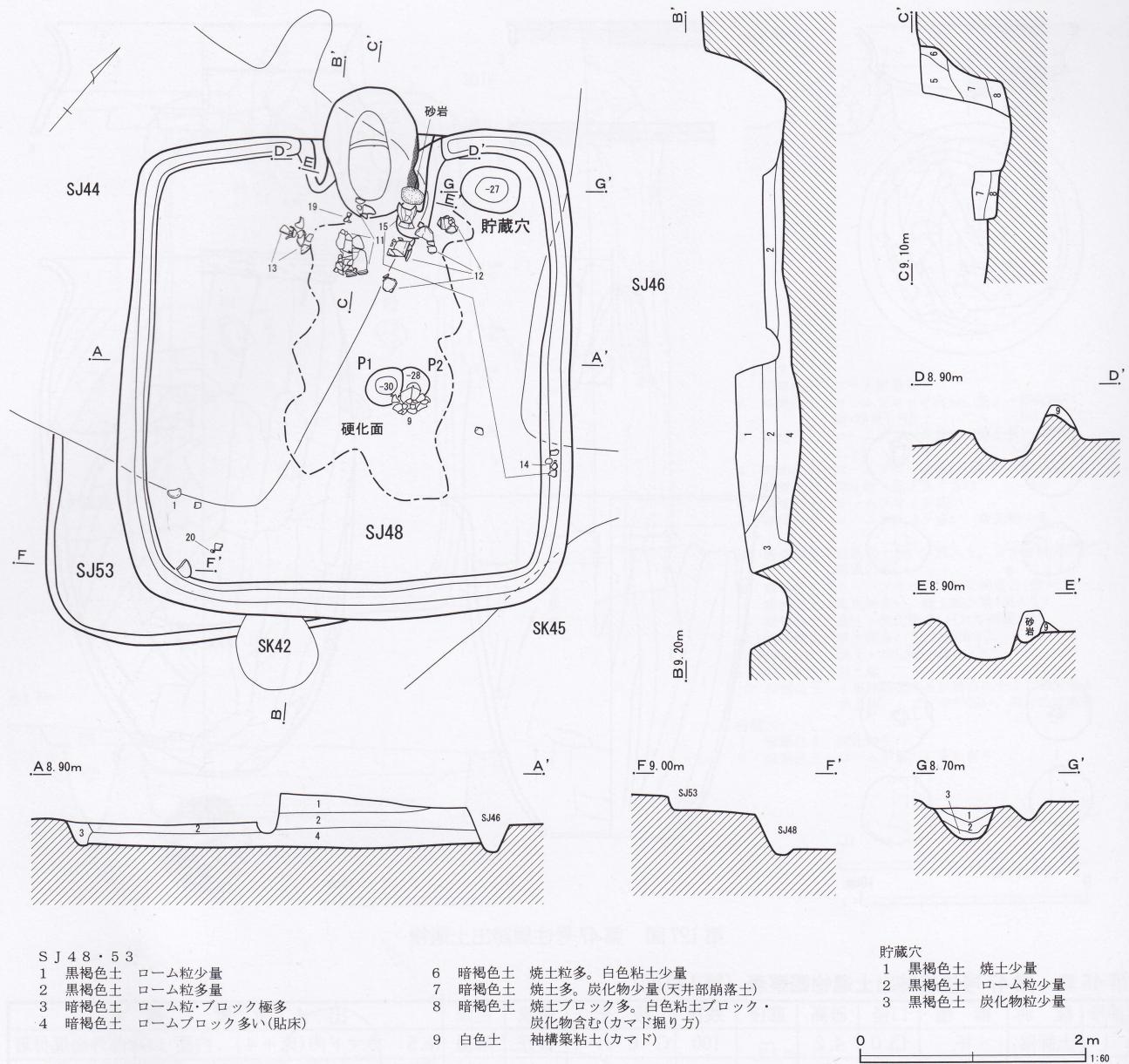
第48号住居跡はO・P-10・11グリッドに位置する。重複する第53号住居跡を切り、第44・45・46号住居跡に切られていた。

平面形は方形である。規模は長軸長4.24m、短軸長4.02m、深さ0.42mである。主軸方位はN-

39°-Wを指す。

第44号住居跡に切られていたが、床面は遺存する。全体に平坦で、カマド前面から住居跡中央部は硬く踏み固められていた。一方、壁際はかなり軟弱であった。

覆土はローム粒子混じりの黒褐色土をベースとし



第128図 第48・53号住居跡

ていた。自然堆積であろうか。

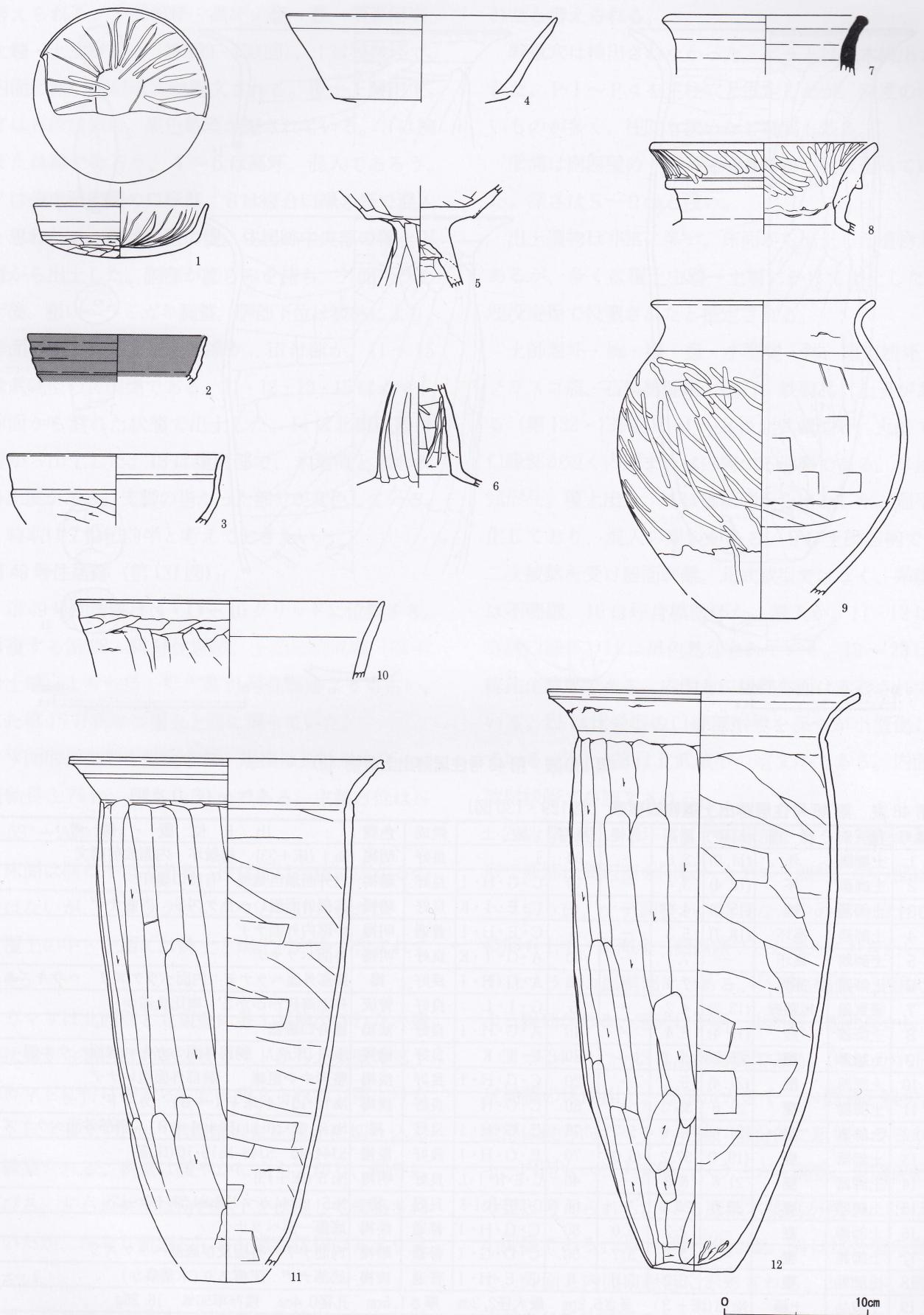
カマドは北壁に設置されていたが、第44号住居跡の貯蔵穴とほぼ重なるために、貯蔵穴調査時に底面まで掘削してしまった。また、当初重複する第44号住居跡の新段階のカマド（2号カマド）として認識したため、カマド右袖構築材の砂岩と土師器長甕（第130図15）は第44号住居跡に帰属するものとして取り上げてしまった。全長1.14m、燃焼部はほぼ壁内に収まる。奥壁は急角度で立ち上がり、壁外に延びる。両袖部は地山のローム層を掘り残し、右袖には砂岩を据えつけていた。砂岩の内壁面は強

く被熱していた。掘り残し袖と砂岩の上面に白色粘土を積んで構築したことが判明した。

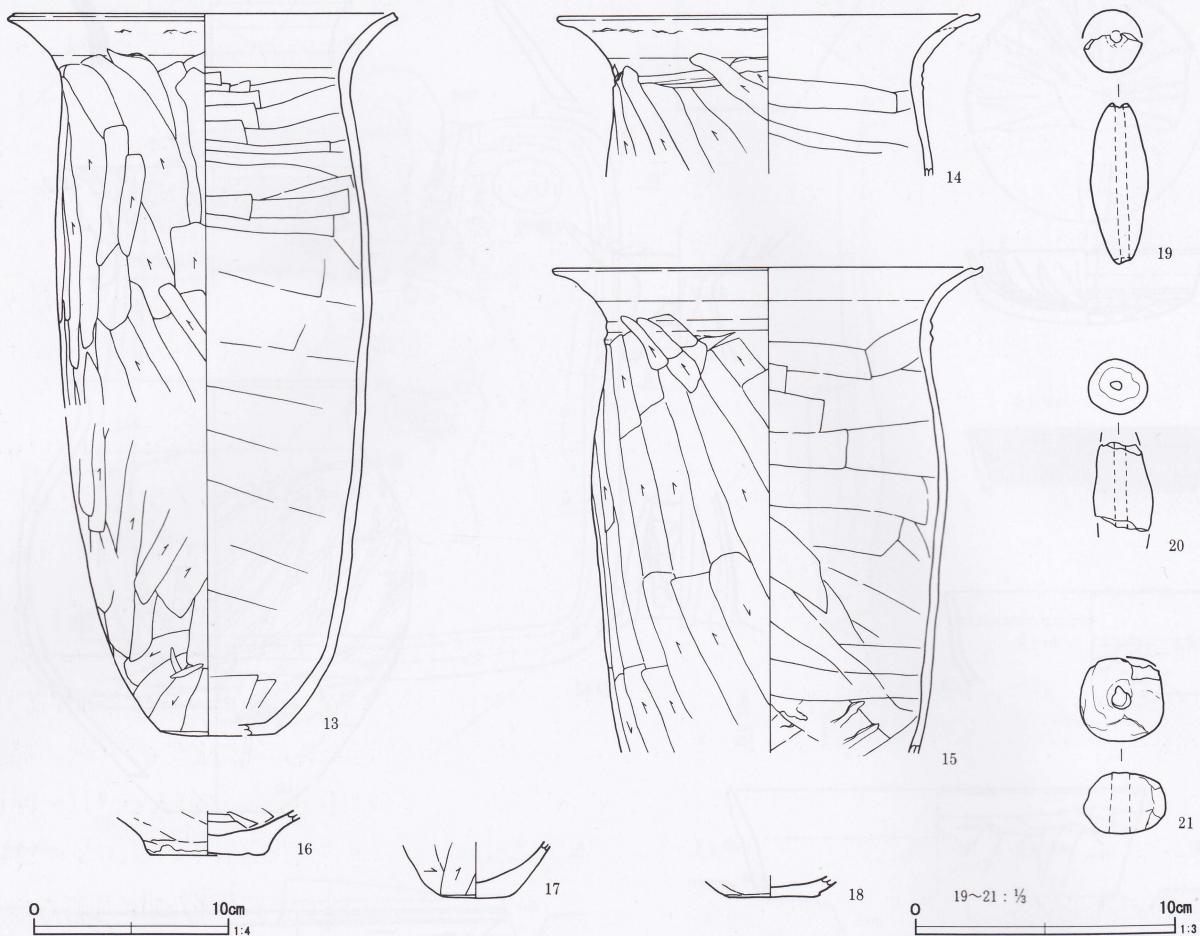
貯蔵穴はカマドに向かって右脇のコーナー部に位置する。楕円形で、規模は長径52cm、短径40cm、深さ27cmである。

ピットは2本検出されたが、柱穴にはならない。調査終了後、掘り方まで除去して確認に努めたが、主柱穴は確認できなかった。

出土遺物は、カマド前面から潰れた状態の土師器甕がまとまって出土した。本来カマドの補強用に使用されたものが、カマドの崩落によって流出したと



第129図 第48号住居跡出土遺物 (1)



第130図 第48号住居跡出土遺物 (2)

第46表 第48号住居跡出土遺物観察表 (第129・130図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎 土	焼成	色調	出土位置・備考
1	土師器	壺	(11.9)	3.8	—	60	I	良好	明褐	No.1(床+33) 模倣壺 内面放射暗文
2	土師器	壺	(12.4)	3.4	—	10	C・G・H・I	良好	暗褐	内外面黒色処理 有段口縁壺
3	土師器	椀	(15.0)	4.9	—	5	C・E・I・K	良好	暗褐	体部外面粗いヘラケズリ 内面ナデ
4	土師器	高壺	(18.7)	5.3	—	5	C・E・H・I	普通	明褐	壺部外面ナデ
5	土師器	高壺	—	7.1	—	40	A・G・I・K	良好	明褐	外面ヘラナデ
6	土師器	高壺	—	7.4	—	65	A・G・H・I	良好	褐	脚部外面ヘラナデ 内面ヘラケズリ ヘラキズあり
7	須恵器	短頸壺	(13.3)	4.2	—	5	G・I・L	良好	青灰	外面降灰がかかる 南北企産か
8	土師器	壺	(15.4)	6.4	—	45	A・G・H・I	良好	淡褐	複合口縁壺
9	土師器	甕	15.2	20.4	—	80	E・I・K	良好	橙褐	No.7(床直) 胴部外面ミガキ 内面ヘラナデ
10	土師器	甕	(21.4)	5.3	—	20	C・G・H・I	良好	淡褐	整形や粗雑 胴部外面粗いナデ
11	土師器	甕	21.6	35.3	—	80	C・G・H	良好	淡褐	No.12・13・14(床+1~6) カマド
12	土師器	甕	21.6	40.4	5.7	75	C・G・H・I	良好	褐	No.8・9・10・11(床+4~8) 胴部外面ヘラケズリ
13	土師器	甕	(19.4)	37.2	(6.0)	70	E・G・H・I	良好	淡褐	SJ44・46 SJ48・No.15・16(床直)
14	土師器	甕	21.6	8.3	—	40	C・E・H・I・L	良好	明褐	No.5(床+13)
15	土師器	甕	22.0	25.0	—	55	C・E・G・H・I・K	良好	褐	No.5 SJ44カマド No.84(床+0~13)
16	土師器	壺	—	2.3	6.0	80	C・G・H・I	普通	淡褐	底部一部ヘラナデ
17	土師器	甕	—	2.9	3.7	50	C・D・G・I	普通	暗褐	内面ナデ 外面及び底部ヘラケズリ
18	土師器	甕	—	2.2	5.0	5	C・E・H・I	普通	淡褐	底部ナデ 圧痕あり(木葉痕か)
19	土製品	土錘	No.18(床+3)	長さ6.2cm	最大径2.2cm	厚さ1.5cm	孔径0.4cm	残存率50%	16.25g	
20	土製品	土錘	No.17(床直)	長さ3.4cm	最大径2.3cm	厚さ2.1cm	孔径0.3cm	残存率30%	15.79g	器面平滑
21	土製品	土玉	最大径3.1×3.2cm	最大高2.4cm	残存率85%	孔径0.7~0.8cm	18.77g			

考えられる。土師器壺・高壺・甕・壺、須恵器壺、土錘・土玉がある（第129・130図）。1は模倣壺で、内面に粗い放射暗文が施文される。覆土上層出土。2は有段口縁壺。黒色処理が施されている。3は椀または鉢であろう。4～6は高壺。混入であろう。7は須恵器壺類の口縁部。8は複合口縁の壺で混入と思われる。9は小型の甕。住居跡中央部の覆土下層から出土した。胴部が膨らみを持ち、外面ヘラナデ後、粗いヘラミガキ調整。胴部下位は被熱により、器面の一部剥落。東関東系か。10は甕か。11～15は武藏型の長胴甕である。11・12・13・15はカマド前面から潰れた状態で出土した。14は北東壁際中層から出土した。18は甕底部で、木葉痕と思われる圧痕がある。支脚の当たった部分が変色している。

時期は7世紀前半と考えておきたい。

#### 第49号住居跡（第131図）

第49号住居跡はN・O-10グリッドに位置する。重複する第28・54号住居跡、土師器焼成壙（第47号土壙）よりも新しく、第51号住居跡よりも古い。また第15号溝跡は覆土上面に乗っていた。

平面形は方形と推定され、規模は長軸長4.05m、短軸長3.75m、深さ0.30mである。主軸方位はN-53°-Wを指す。

床面は概ね平坦である。硬化面は全体に広がるのではないが、ブロック状に点々と検出された。

覆土の中・上層には焼土と炭化材が多く含まれていた。

カマドは北西壁と北東壁に各1基検出された。遺存状態から北西壁の第2号カマドから北東壁の第1号カマドに付け替えられたと考えられる。第1号カマドは全長1.20m、燃焼部は壁を僅かに切り込んで構築される。奥壁は緩やかに立ち上がり、壁外に延びる。左右の袖部は白色粘土を使用して構築されていたが、かなり流出しており遺存状態はあまり良くない。

第2号カマドは壁外の煙道部のみ検出された。燃焼部と袖部は第1号カマドに付け替えた際に除去さ

れたと考えられる。

貯蔵穴は検出されなかった。ピットは9本検出された。P1～P4を主柱穴と推定したが、深度の浅いものが多く、柱間も狭いなど疑問も残る。

壁溝は南西壁の一部が途切れるが、他は巡っていた。深さは5～9cmと浅い。

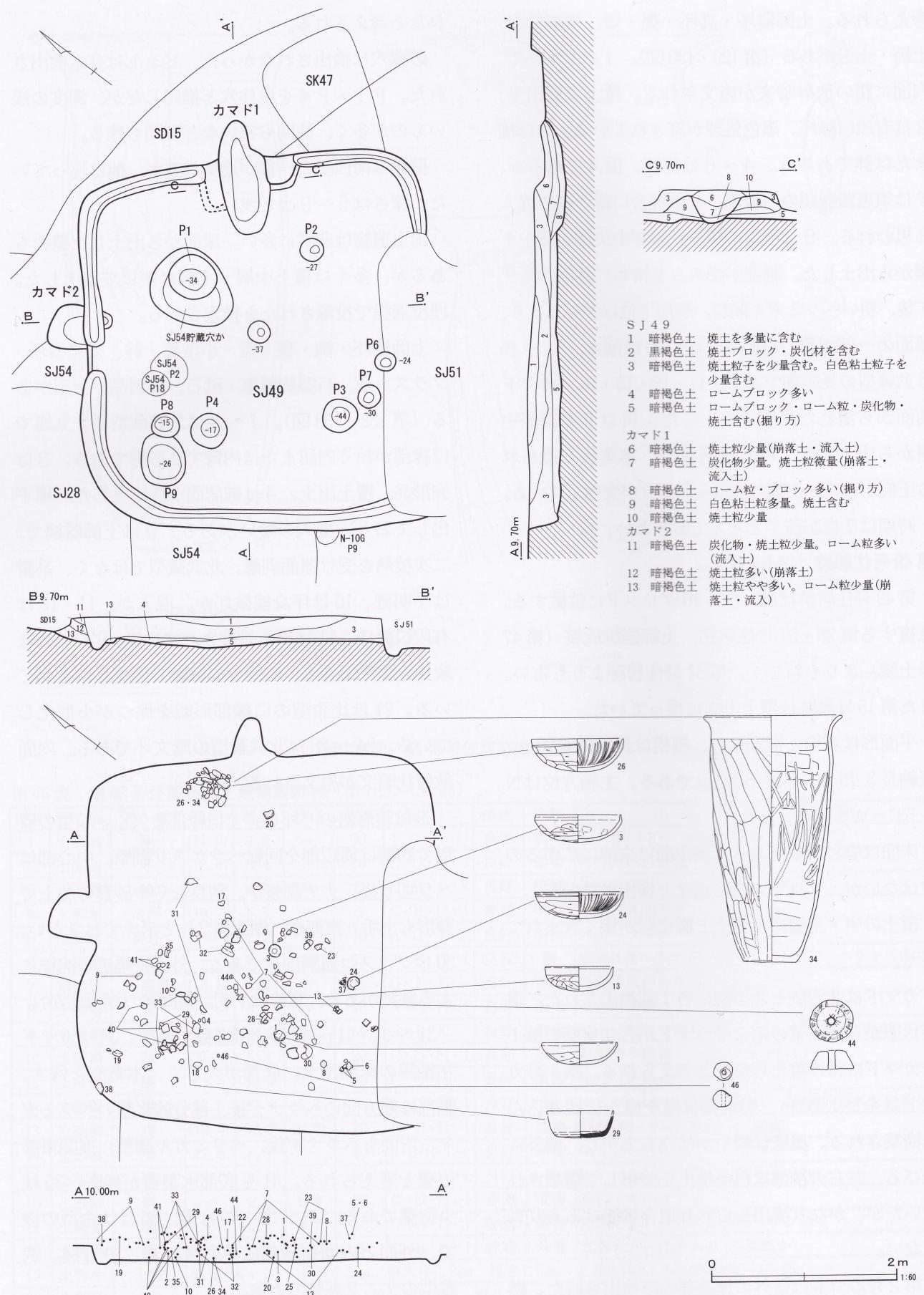
出土遺物は非常に多い。床面から出土した遺物もあるが、多くは覆土中層～上層にかけて出土した。埋没過程で投棄されたと推定される。

土師器壺・椀・甕・壺・小型甕・鉢、須恵器壺・フラスコ瓶、石製紡錘車・砥石、鉄製品、土玉がある（第132・133図）。1～8は北武藏型壺。丸底で口縁部が短く内屈または内彎する形態である。3は完形品。覆土出土。4は確認面から出土した。扁平化しており、混入の疑いがある。9は土師器椀で、二次被熱を受け器面剥離。北武藏型ではなく、系譜は不明確。10は壺身模倣壺か。混入か。11・12は有段口縁壺、11は黒色処理されている。13～23は続比企型壺である。内面と口縁部外面は赤彩されている。21は比企型の口縁部形態を保つが小型化している。24～28は北武藏型の暗文壺である。内面放射状暗文が施文される。

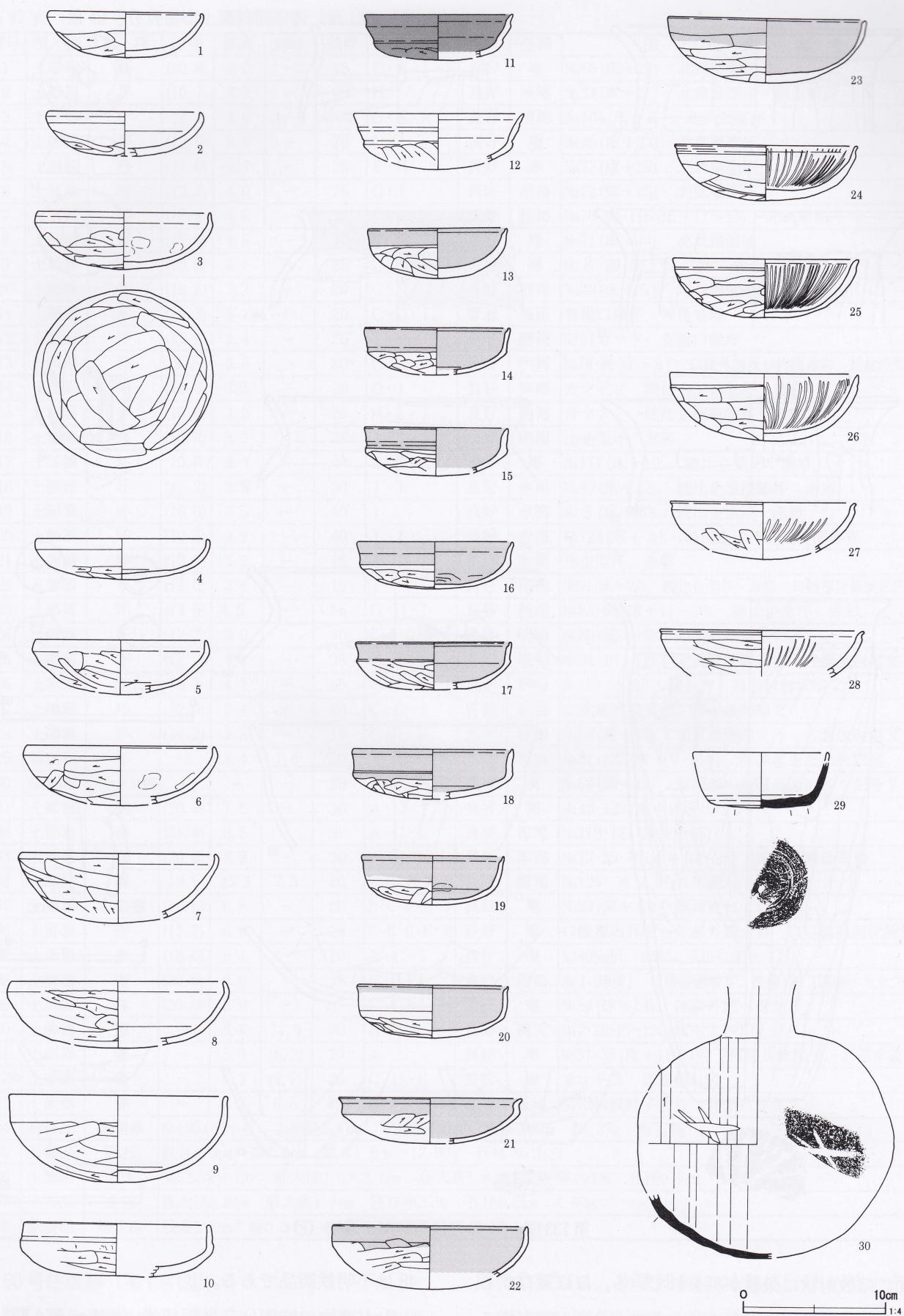
29は須恵器の「壺G」で口縁部を欠く。箱型の器形で底部は周辺部を回転ヘラケズリ調整。中心部はヘラ切り後、ナデ調整か。精良なやや砂質の胎土で整形も上手。東海産（湖西産？）と考えておきたい。30はフラスコ瓶胴部片である。外面に幅広の沈線による線刻がある。意味は不明。東海産（湖西産か）。

31～34・41～43は土師器甕である。34はカマド左袖脇の床面出土。底部が大きく、木葉痕を残す。胴部は縦方向のヘラナデ後、部分的に粗いヘラミガキ、内面もヘラナデ後、ヘラミガキ調整。東関東系の甕と考えられる。41も底部木葉痕が残る。35は小型甕である。36～38・40は壺。36は比企型の壺で、外面と内面口縁部に赤彩される。39は鉢。武藏型のケズリ調整である。

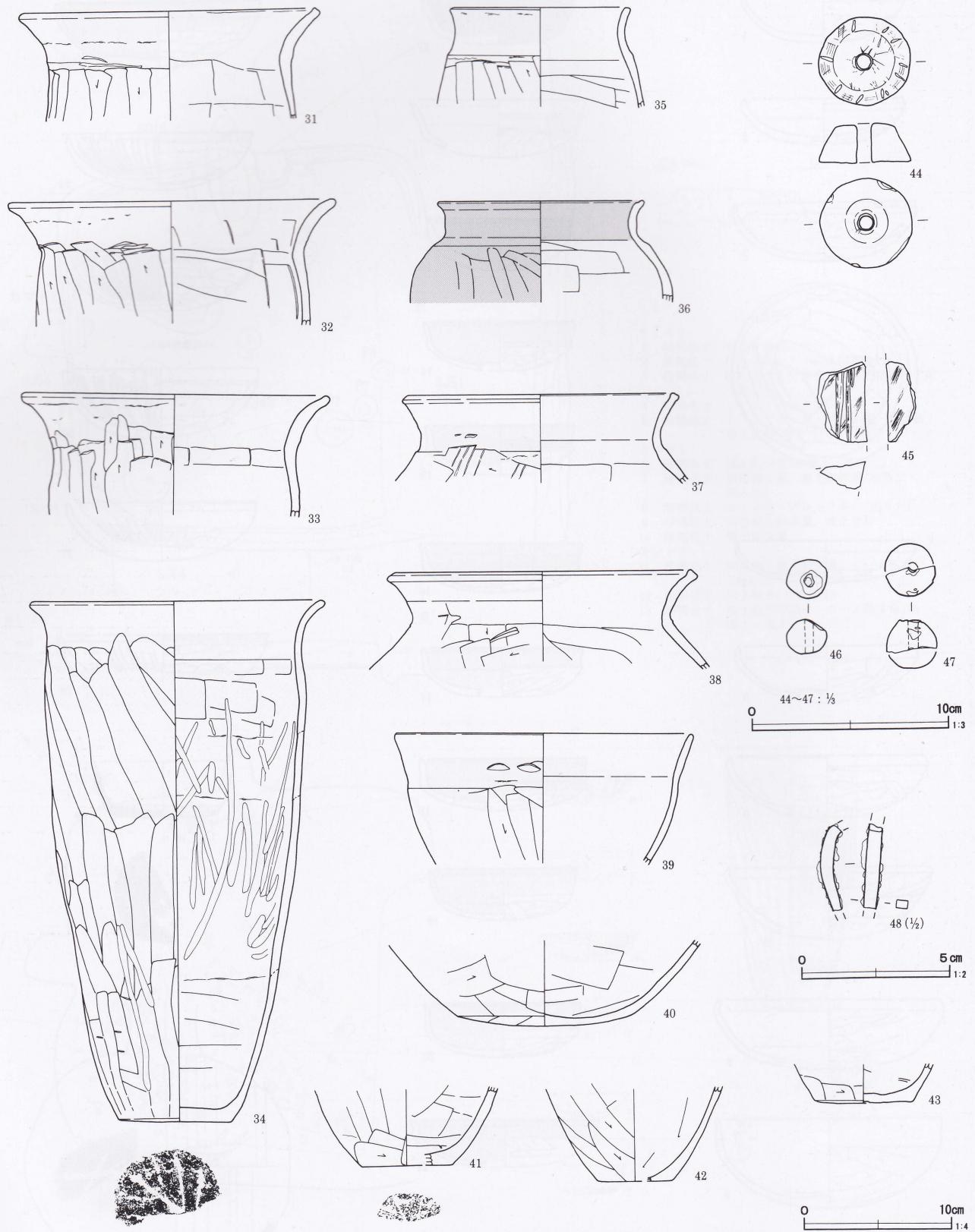
44は石製紡錘車。石材は滑石と思われる。4側



第131図 第49号住居跡・遺物出土状況



第132図 第49号住居跡出土遺物 (1)



第133図 第49号住居跡出土遺物 (2)

面には放射状に条線が刻まれている。ほぼ完存する。

覆土下層出土。45は砥石の一部で、2面が遺存する。

平滑に研がれており1面には刃傷状の擦痕が残る。

48は不明鉄製品である。

出土遺物の時期は7世紀後半(3/4~4/4期)と

考えられる。

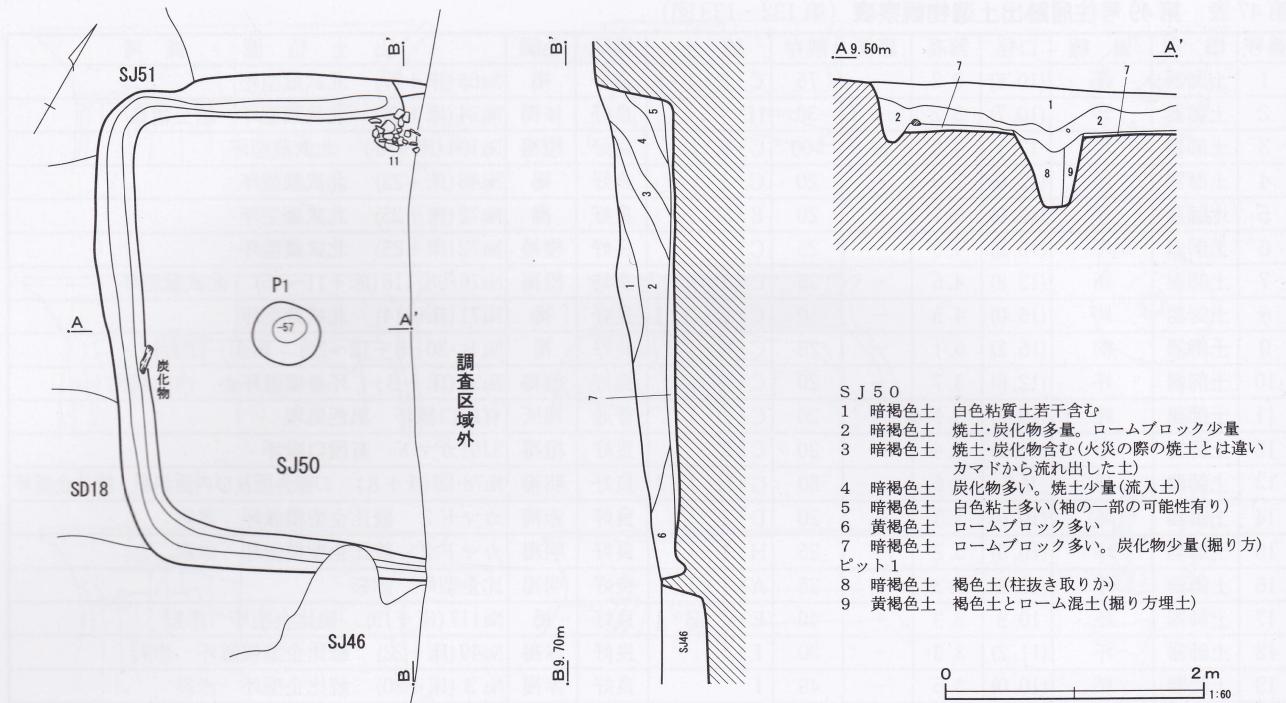
第47表 第49号住居跡出土遺物観察表（第132・133図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	出土位置・備考
1	土師器	壺	(10.8)	3.2	—	75	C・E・I・K	良好	褐	No.66(床+27) 北武藏型壺
2	土師器	壺	(10.7)	3.2	—	30	H	良好	淡褐	No.34(床+7) 北武藏型壺 胎土精良
3	土師器	壺	12.1	4.0	—	100	C・E・K	良好	橙褐	No.104(床+6) 北武藏型壺
4	土師器	壺	(12.0)	2.9	—	20	C・I	良好	褐	No.45(床+23) 北武藏型壺
5	土師器	壺	(12.0)	3.7	—	20	E・H	良好	褐	No.72(床+25) 北武藏型壺
6	土師器	壺	(13.2)	4.0	—	25	C・I	良好	橙褐	No.72(床+25) 北武藏型壺
7	土師器	壺	(13.8)	4.5	—	35	C・I・K	良好	橙褐	No.76・98・116(床+11~15) 北武藏型壺
8	土師器	壺	(15.0)	4.5	—	10	C・E・G・I	良好	褐	No.71(床+14) 北武藏型壺
9	土師器	椀	(15.2)	6.1	—	25	C・H・I	良好	褐	No.8・30(床+12~20) 器面一部剥離
10	土師器	壺	(12.8)	3.7	—	20	C・H	良好	橙褐	No.38(床+5) 壺身模倣壺か 内面風化
11	土師器	壺	(10.3)	3.1	—	20	C・D・I	普通	褐灰	有段口縁壺 黒色処理
12	土師器	壺	(11.9)	3.4	—	20	C・K	良好	橙褐	SJ51カマド 有段口縁壺
13	土師器	壺	9.7	3.5	—	80	G・H・I・J	良好	明褐	No.78・96(床+8) 口縁外面及び内面赤彩 繼比企型壺
14	土師器	壺	(10.0)	3.3	—	20	D・I	良好	赤褐	カマド2 繼比企型模倣壺 赤彩
15	土師器	壺	(10.0)	3.2	—	25	H・I・J	良好	明褐	カマド2 繼比企型模倣壺 赤彩
16	土師器	壺	(10.8)	3.3	—	25	A・I・J	良好	明褐	比企型壺 赤彩
17	土師器	壺	10.8	3.3	—	40	E・G・H・I	良好	褐	No.117(床+19) 繼比企型壺 赤彩
18	土師器	壺	(11.2)	3.5	—	30	I・J	良好	赤褐	No.49(床+22) 繼比企型模倣壺 赤彩
19	土師器	壺	(10.0)	3.5	—	40	I	良好	赤褐	No.3(床+20) 繼比企型壺 赤彩
20	土師器	壺	(10.5)	3.7	—	40	I・J	良好	赤褐	No.124(床+4) 繼比企型壺 内外面赤彩
21	土師器	壺	(12.7)	3.2	—	15	E・I	良好	赤褐	比企型壺 赤彩
22	土師器	壺	(12.0)	3.6	—	15	I	良好	橙褐	No.99(床+22) 繼比企型壺 赤彩 口唇部沈線状に凹む
23	土師器	壺	(13.9)	4.5	—	55	G・H・I	良好	橙褐	No.83・89(床+16~20) 繼比企型壺 赤彩
24	土師器	壺	12.7	3.9	—	90	C・E・G・H・I	良好	明褐	No.80(床+15) 内面放射暗文
25	土師器	壺	(12.9)	4.1	—	35	C・I・K	良好	橙褐	No.94(床+12) 北武藏型暗文壺 内面放射暗文
26	土師器	壺	13.1	4.7	—	65	C・G・H・I	良好	明褐	No.125(床直) 掘り方 内面放射状暗文
27	土師器	壺	(12.9)	3.4	—	20	C・D・I	普通	暗褐	北武藏型暗文壺 内面放射暗文
28	土師器	壺	(14.2)	3.2	—	15	C・I・K	良好	明褐	No.61(床+23) 北武藏型暗文壺 内面放射暗文
29	須恵器	壺	—	3.4	7.0	50	I	良好	灰白	No.21・127(床+9~18) 湖西産または秋間産
30	須恵器	フラスコ瓶	—	—	—	30	I・K	良好	灰	No.69(床+12) 湖西産 胴部外面にヘラ記号?
31	土師器	甕	(20.0)	7.5	—	30	A・C・I	良好	褐	No.43・123(床+13~16)
32	土師器	甕	(21.8)	8.5	—	30	A・C・E	良好	橙褐	No.119・121(床+4~5)
33	土師器	甕	(20.6)	8.2	—	30	A・E	良好	赤褐	No.13・39・46(床+10~25) 銀(白)雲母多量
34	土師器	甕	19.5	35.3	7.5	80	E・H・I・K・L	良好	橙褐	No.125 カマド①(床直)
35	土師器	小型甕	(11.6)	6.8	—	20	B・C・G・H・I	良好	褐	No.33(床+8) 器面荒れている
36	土師器	壺	(13.7)	6.9	—	20	C・E・G・H・L	良好	褐	口縁部内外面～体部外面赤彩 口唇部内面沈線状
37	土師器	壺	(18.0)	6.1	—	20	A・C・I	良好	褐	SJ49・No.81 SJ51 SJ54(床+7)
38	土師器	壺	(20.0)	6.9	—	15	H・I・L	良好	橙褐	No.1(床直) 口唇部面取り 沈線1条 胴部ヘラケズリ
39	土師器	鉢	(20.0)	8.9	—	10	C・G・I	良好	褐	No.84(床+14) 体部外面ヘラケズリ
40	土師器	壺	—	5.8	11.9	30	H・I	良好	褐灰	No.7・20・27・126(床+1~12)
41	土師器	甕	—	5.3	(6.2)	30	A	良好	褐	No.31・35(床+11~19) 雲母状微粒子 底部木葉痕
42	土師器	甕	—	6.3	(5.2)	20	C・D・K	良好	褐	カマド2 底部離れ砂
43	土師器	甕	—	2.7	6.6	70	A・C・E・L	普通	灰褐	雲母状微粒子含む 外面ヘラケズリ
44	石製品	紡錘車	No.103(床+4)	上面径3.1cm	下面径4.6cm	孔径0.8cm	58.37g	滑石製		
45	石製品	砥石	長さ4.0cm	幅2.4cm	厚さ1.5cm	12.90g	石材:安山岩			
46	土製品	土玉	No.52(床+13)	最大径2.0×2.1cm	最大高1.8cm	残存率100%	孔径0.5cm	6.30g		
47	土製品	土玉	最大径2.6cm	最大高1.7cm	残存率25%	孔径0.5cm	4.90g			
48	鉄製品	棒状品	残長2.8cm	幅0.3×0.4cm	用途不明					

## 第50号住居跡（第134図）

第50号住居跡はN・O-10・11グリッドに位置する。谷に向かう斜面に位置し、住居跡東半は調査

区外に延びる。南壁部が第46号住居跡、西コーナー部が第51号住居跡と重複し、本住居跡の方が古い。また、覆土上面を第18号溝跡に削平されていた。



第134図 第50号住居跡

第48表 第50号住居跡出土遺物観察表 (第135図)

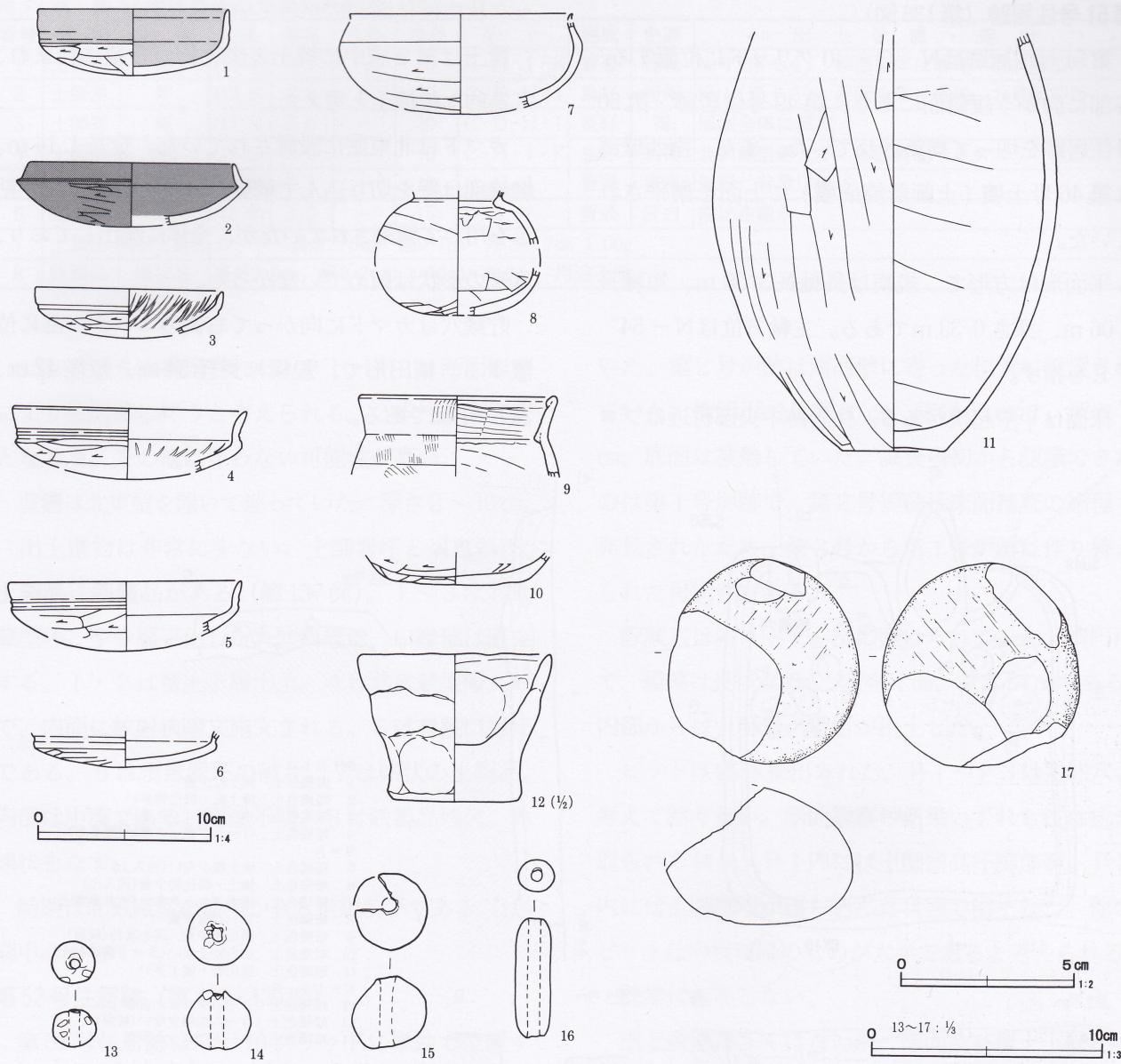
番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	
										位置	備考
1	土師器	壺	(10.9)	3.8	—	40	G・H・I・J	良好	褐	統比企型壺 内外面赤彩	
2	土師器	壺	(11.8)	3.6	—	30	C・H・I・K	良好	黒褐	内外面黒色処理 壺身模倣壺	
3	土師器	壺	(10.7)	2.5	—	20	C・G・H・I	良好	褐	放射暗文	
4	土師器	壺	13.4	3.6	—	30	C・H・I・K	良好	褐	体部内面放射暗文	
5	土師器	壺	(13.4)	3.2	—	15	C・E・H・I・K	良好	橙褐	模倣壺	
6	土師器	壺	—	2.3	—	15	H・I・K	良好	淡褐	有段口縁壺と思われる 無彩	
7	土師器	椀	—	5.1	—	15	E・H・I	良好	褐	無彩 混入か 体部外面ヘラケズリ	
8	土師器	小型壺	—	7.2	—	35	C・D・E・L	良好	淡褐	図上復元 混入品か	
9	土師器	小型壺	(11.0)	4.7	—	10	H・I・K	良好	明褐	頸部外面縦方向のハケ目後ヨコナデ	
10	土師器	椀	—	1.9	—	65	C・H・I・K	普通	淡褐	粗製 器形不明	
11	土師器	甕	—	24.2	5.8	40	C・G・H・I・K	普通	褐	No.1(床+5) 器面磨耗顕著 上げ底 ヘラケズリ	
12	土師器	手捏土器	(5.4)	4.2	3.8	30	A・G・H・I・K	良好	褐	口唇部やや波打つ 体部外面下端指頭痕	
13	土製品	土玉	最大径1.9×1.9cm	最大高1.6cm	—	残存率100%	孔径0.4cm	4.87g			
14	土製品	土玉	最大径2.6×2.8cm	最大高2.5cm	—	残存率100%	孔径0.6cm	16.23g			
15	土製品	土玉	最大径3.2×3.3cm	最大高3.2cm	—	残存率80%	孔径0.7cm	19.68g			
16	土製品	土錘	長さ5.3cm	最大径1.6cm	厚さ1.4cm	孔径0.6cm	残存率100%	12.54g			
17	石製品	磨石	長さ8.8cm	幅8.2cm	厚さ5.8cm	—	516.94g				

平面形は方形系で、残存規模は長軸長3.83m、短軸長2.40m、深さ0.37mである。主軸方位はN-28°-Wを指す。

床面は平坦である。調査区境界付近が比較的硬く締まっていたが、小ブロック状の硬化面が点々と散在する状況であった。覆土には焼土・炭化物が多量に含まれ、床面上にも炭化材が出土したことから、火災で焼失した可能性が高い。

カマドは北西壁の調査区界から白色粘土と焼土が検出され調査区に接する位置に作られたと考えられる。詳細は不明である。

貯蔵穴は検出されなかった。ピットは1本検出された。主柱穴と考えても良いものであるが、第2層が柱穴内に落ち込んだ状態が観察された。そうだとすると柱を抜き取った後で故意に焼いた可能性も考えられようか。床面上の遺物が少ないのでそのため



第135図 第50号住居跡出土遺物

かもしれない。柱穴はその位置から、4本柱穴ではなく、2本柱穴になるものと推定される。

壁溝はほぼ全周する。西コーナー部も第51号住居跡よりも掘り込みが深いために遺存していた。深さ3~18cm。

出土遺物は少ない。土師器甕は壁際の床面から出土したが、その他は覆土から検出された。土師器壺・椀・小型壺・小型甕・甕・手捏ね土器、土錐、土玉、磨石がある(第135図)。1は続比企型壺で、赤彩される。2は壺身模倣壺で、全面黒色処理される。3は小型の模倣壺か。口縁部と体部は沈線で区画される。内面は暗文が施文されるが、放射状というよ

りも松葉状につけられている。東関東系か。4は壺蓋模倣壺で、体部内面には間隔の開いた放射暗文が施文される。5・6は模倣壺である。7は深椀となるか。小片であり、系譜は不明。8は小型壺である。9は小型甕か。11は長胴甕。胴部は膨らみを持ち、弱いケズリ。12は手捏ね土器。全体に時期差のある遺物を含んでいる。11の土師器甕が床面出土であり、信頼できる遺物といえる。1・8・9は混入の可能性が高い。

第135図2・4・5の壺と11の甕から、6世紀後半~末葉頃の住居跡と考えておきたい。

### 第51号住居跡 (第136図)

第51号住居跡はN・O-10グリッドに位置する。谷部に向かう緩斜面にあり、第49号住居跡・第50号住居跡を切って構築されていた。また、南西壁部は第46号土壙(土師器焼成壙)に上面を削平されていた。

平面形は方形で、規模は長軸長3.30m、短軸長3.06m、深さ0.33mである。主軸方位はN-54°-Eを指す。

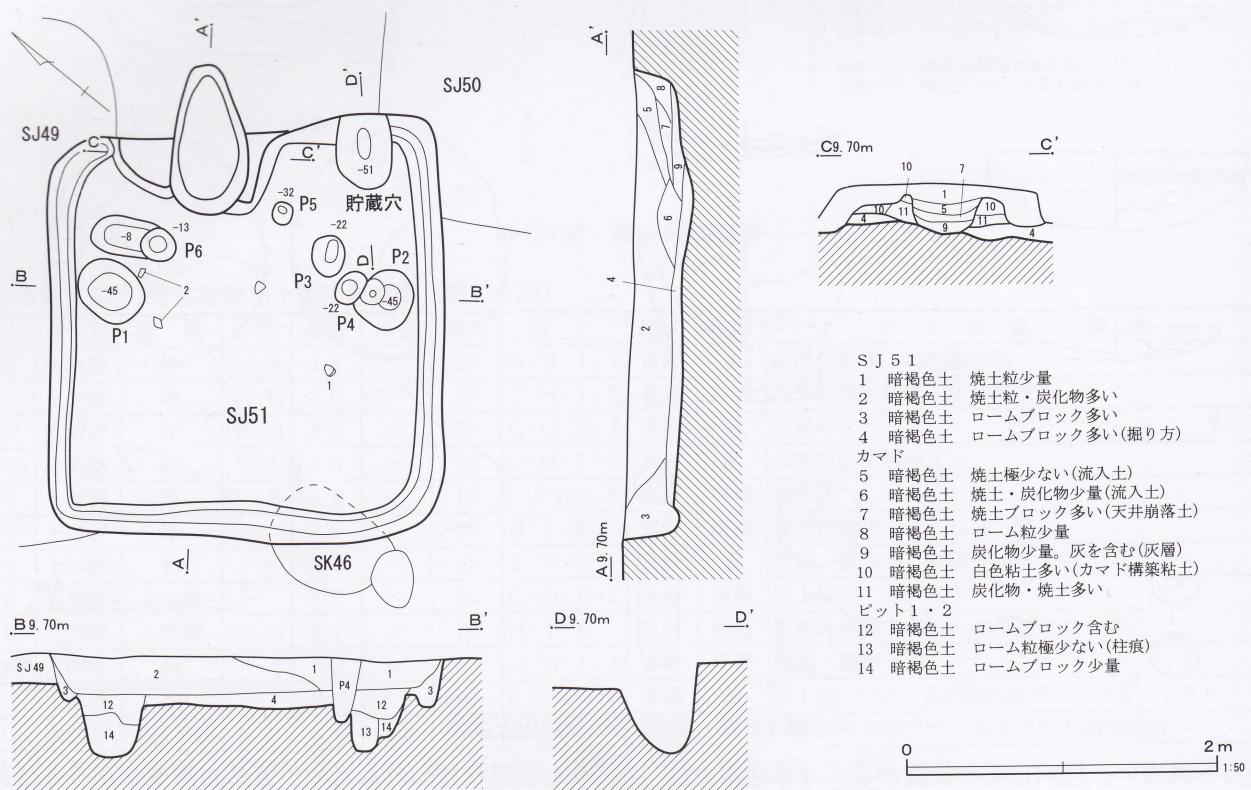
床面はやや起伏がある。住居跡中央部付近はプロ

ック状に硬化面が広がっていた。

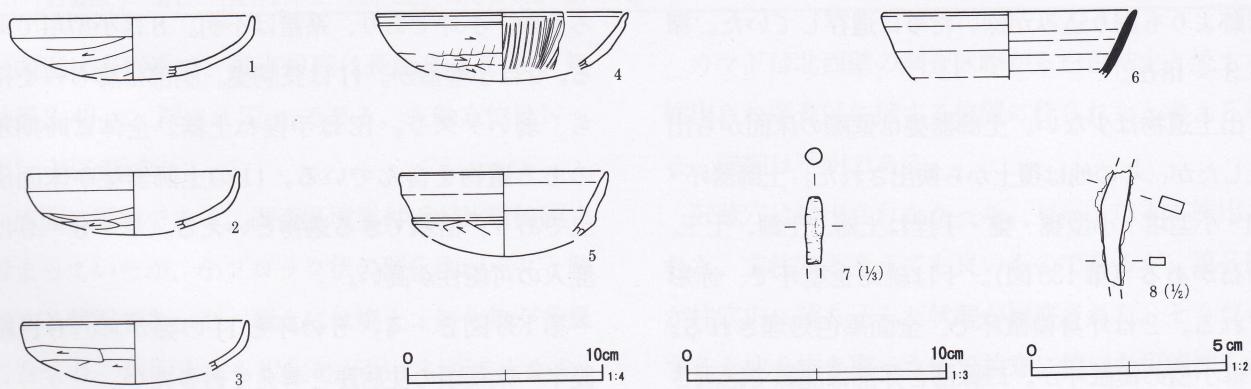
覆土は第2層中に焼土と炭化物が多量に含まれ、人為的な堆積土と考えた。

カマドは北東壁に設置されていた。全長1.14m、燃焼部は壁を切り込んで構築される。袖部は白色粘土を用いて構築されていたが、全体に流出しており、本来の形状は留めていなかった。

貯蔵穴はカマドに向かって右側のコーナー部に位置する。楕円形で、規模は長径54cm、短径42cm、深さ51cmである。



第136図 第51号住居跡



第137図 第51号住居跡出土遺物

第49表 第51号住居跡出土遺物観察表（第137図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	出土位置・備考
1	土師器	壺	(12.4)	3.1	—	15	C・H・I・K	普通	橙褐	No.4(床+4) 器面全体に磨耗 北武藏型壺
2	土師器	壺	(10.8)	2.9	—	20	C・G・H・I	良好	橙褐	No.1(床+6) 器面全体に磨耗 北武藏型壺
3	土師器	壺	(11.8)	2.6	—	30	C・D・H・I	良好	褐	器面全体に風化
4	土師器	壺	(12.9)	3.0	—	10	C・H・I・K	良好	明褐	北武藏型暗文壺 体部外面ヘラケズリ
5	土師器	壺	(10.6)	3.3	—	10	C・H・I	普通	淡褐	無彩 有段口縁壺
6	須恵器	壺	(13.0)	3.5	—	15	G・I	普通	灰白	南比企産か
7	土製品	棒状土製品	カマド	長さ2.6cm	幅0.7cm	厚さ0.7cm	1.00g			
8	鉄製品	棒状品	残長2.9cm	幅0.2~0.3×0.4~0.6cm	用途不明					

ピットは6本検出された。P1・P2は断面観察により住居跡に伴うと考えられる。2本柱の主柱穴となろう。その他は伴わない可能性が高い。

壁溝は北東壁を除いて巡っていた。深さ2~10cm。出土遺物は非常に少ない。土師器壺と須恵器壺、土製品、鉄製品がある（第137図）。1~3は北武藏型壺。やや扁平化した丸底形態で、口縁部は直立する。1・2は覆土下層出土。4は北武藏型暗文壺で、内面に放射状暗文施文される。5は有段口縁壺である。6は須恵器壺の破片。7は棒状の土製品。内部は中実である。用途不明。8は鉄製品残欠。角棒状をなす。

時期は北武藏型の様相から8世紀前半である（1/4期中心か）。

#### 第52号住居跡（第138・139図）

第52号住居跡はM-10グリッドに単独で位置するが、北東壁は調査区外に延びている。

平面形は方形と推定される。残存規模は、長軸長5.58m、短軸長5.10m、深さ0.16mである。主軸方位はN-30°-Wを指す。

床面は概ね平坦で、住居跡中央部周辺は部分的に硬化面が形成されていたが、全体に広がる様相は認められなかった。

覆土の層厚が薄く、堆積環境は不明確であるが、特に埋め戻したような様相は見られなかった。

炉跡は2基検出された。第1号炉跡は中央から北西壁に寄った位置に設けられていた。略円形で、規模は直径66~72cm、底面は皿状に窪む。覆土は焼土混じりの暗褐色土が堆積し、底面は強く被熱して

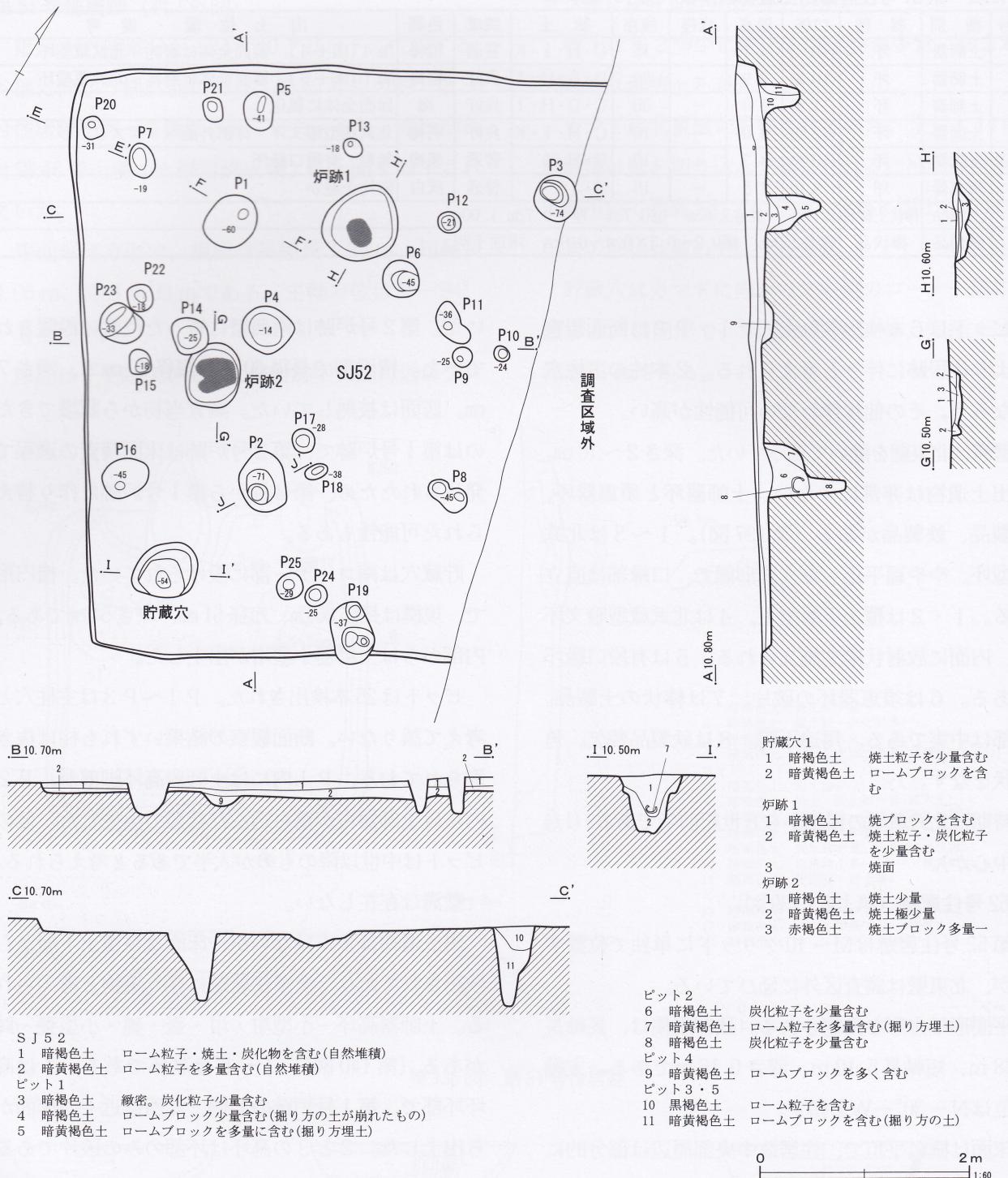
いた。第2号炉跡は南西壁に寄った位置に設置されていた。楕円形で長径60cm、短径50cmで、深さ7cm。底面は被熱していた。調査当初から認識できたのは第1号炉跡で、第2号炉跡は床面精査の過程で発見されたため、第2号から第1号炉跡に作り替えられた可能性もある。

貯蔵穴は南コーナー部に設けられていた。楕円形で、規模は長径66cm、短径51cm、深さ54cmである。内部からは土師器小型壺が出土した。

ピットは25本検出された。P1~P3は主柱穴と考えて誤りない。断面観察の結果いずれも柱は抜き取られており、P1内には土師器高壺脚部が、P2内には土師器壺が落ち込んだ状態で出土した。他のピットは中世以降のものが大半であると考えられる。

壁溝は存在しない。

出土遺物は多くはないが、床面及び覆土下層から検出されており、全て住居跡に伴う遺物と考えられる。土師器高壺・小型壺・壺・壺・甕・小型甕・鉢がある（第140図）。1~5は高壺である。1は高壺壺部で、第1号炉跡の北側、北西壁近くの床面から出土した。2と3の高壺は壺部のみの破片であるが、2の上に3が乗り、2枚重なった状態で出土した。床面に少し沈み込んだような状態で出土している。2はハケ目後ナデ調整と赤彩が施される。3は内面に煤状の有機物が付着する。4は脚部。南西壁際の覆土下層から出土。5は高壺脚部で、P1内に落ち込んだ状態で出土。6は小型甕。北西壁際の床面から出土した。二次被熱を受けている。7は貯蔵穴内から出土した小型壺。口縁部を欠いている。8



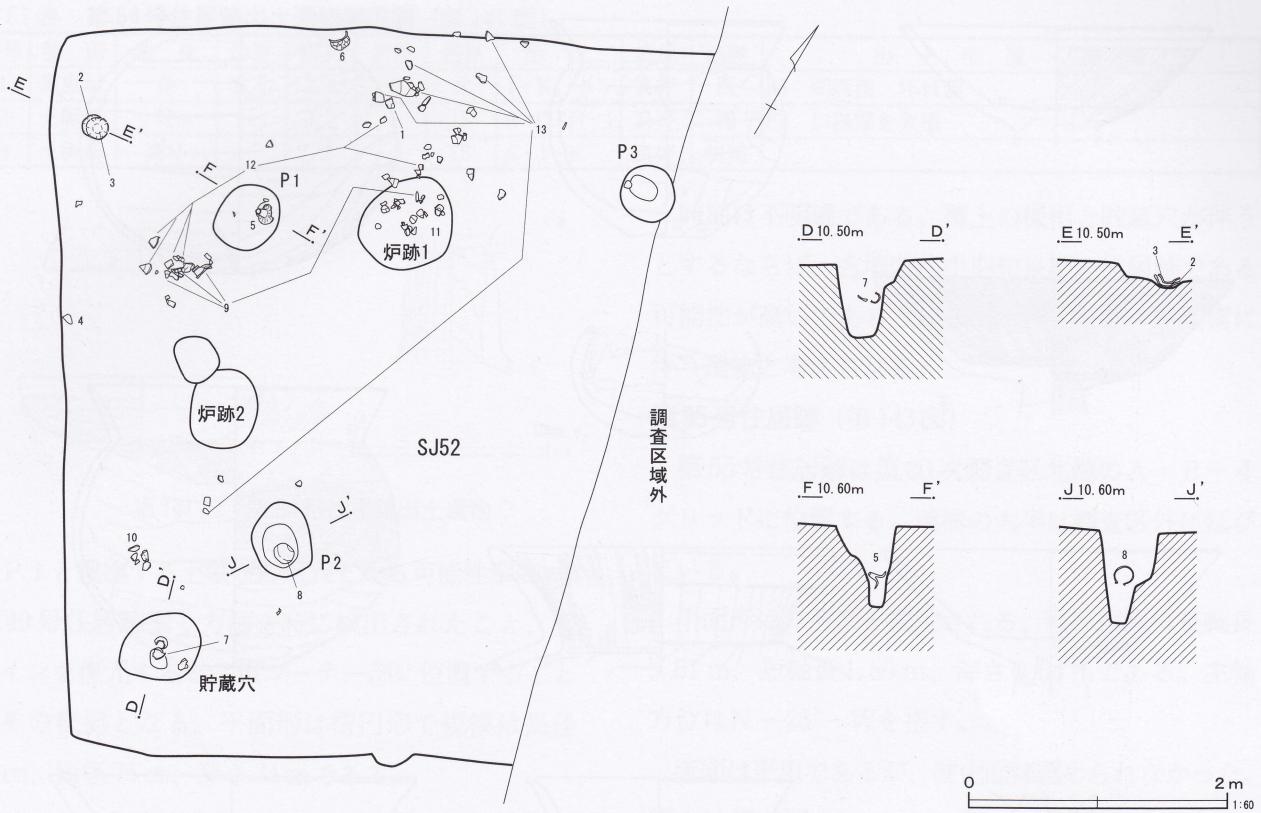
第138図 第52号住居跡

は(大型) 埠で、P 2に落ち込んだ状態で検出された。やはり口縁部を欠いている。9は複合口縁壺。ほぼ床面出土。10・11は小型甕。10は外面ヘラナデ。二次被熱を受け器面剥落。11は胴部外面粗いハケ目とナデ調整。外面煤付着し、二次被熱により一部器面剥落する。12は鉢。口縁部はハケ目後ヨコナデ。

胴部はハケ目後ナデ。ミガキ風に光沢を帯びる。13は甕。第1号炉跡の北側を中心に出土した。

#### 第53号住居跡(第128図)

第53号住居跡はO・P-10・11グリッドに位置する。第44号住居跡、第48号住居跡、第42号土



第139図 第52号住居跡遺物出土状況

第50表 第52号住居跡出土遺物観察表 (第140図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎 土	焼成	色調	出土位置・備考
1	土師器	高壺	(15.8)	5.4	—	45	D・G・H・I・K	良好	淡褐	No.7(床+3) 器面全体に磨耗 壁部外面粗いハケ目
2	土師器	高壺	18.2	6.5	—	85	A・H・I・K	良好	褐	No.72(床-3) 赤彩 壁部ハケ目後ナデ一部ミガキ
3	土師器	高壺	(17.0)	7.0	—	90	C・E・G・H	普通	明褐	No.71(床直) 口縁部外面2次被熱痕
4	土師器	高壺	—	8.3	—	90	C・E・I・J・K	良好	褐	No.56(ほぼ床直) 壁部欠損 裙部縦位のミガキ
5	土師器	高壺	—	9.7	15.2	95	A・E・H・I・K	良好	褐	No.76 P1(床-45) 壁部欠損 裙部放射状にヘラミガキ
6	土師器	小型甕	11.8	11.1	3.9	80	C・E・I・K・L	良好	褐	No.1(床直) 内面全体に風化
7	土師器	小型甕	—	5.6	3.1	75	C・E・H・I・L	良好	淡褐	貯穴 No.74(床-30)
8	土師器	甕	—	12.6	—	100	C・E・H・I・K	普通	淡褐	pit2 No.75(床-40) 口縁部欠損 胴部外面一部赤彩
9	土師器	壺	17.3	6.6	—	90	C・G・H・I	良好	淡褐	No.50・58・61(床直) 複合口縁部ミガキ 下端指オサエ
10	土師器	小型甕	(13.4)	8.7	—	20	E・G・I・K	普通	褐	No.68(ほぼ床直) 胴部外面ナデ 内面ヘラナデ
11	土師器	小型甕	(14.0)	14.1	—	40	C・E・H・I・K	良好	褐	No.6・23・27・28・31～35・37～39・44～46・48(床-4～+7)
12	土師器	鉢	15.3	14.9	4.5	70	H・K	良好	淡褐	No.8・26・53・54・59・60・63, pit1(床+0～3.5)
13	土師器	甕	(18.8)	24.3	—	30	C・G・H・I・L	良好	淡褐	No.4～6・10・13・15・66(床+0～10) 胴部外面に煤付着

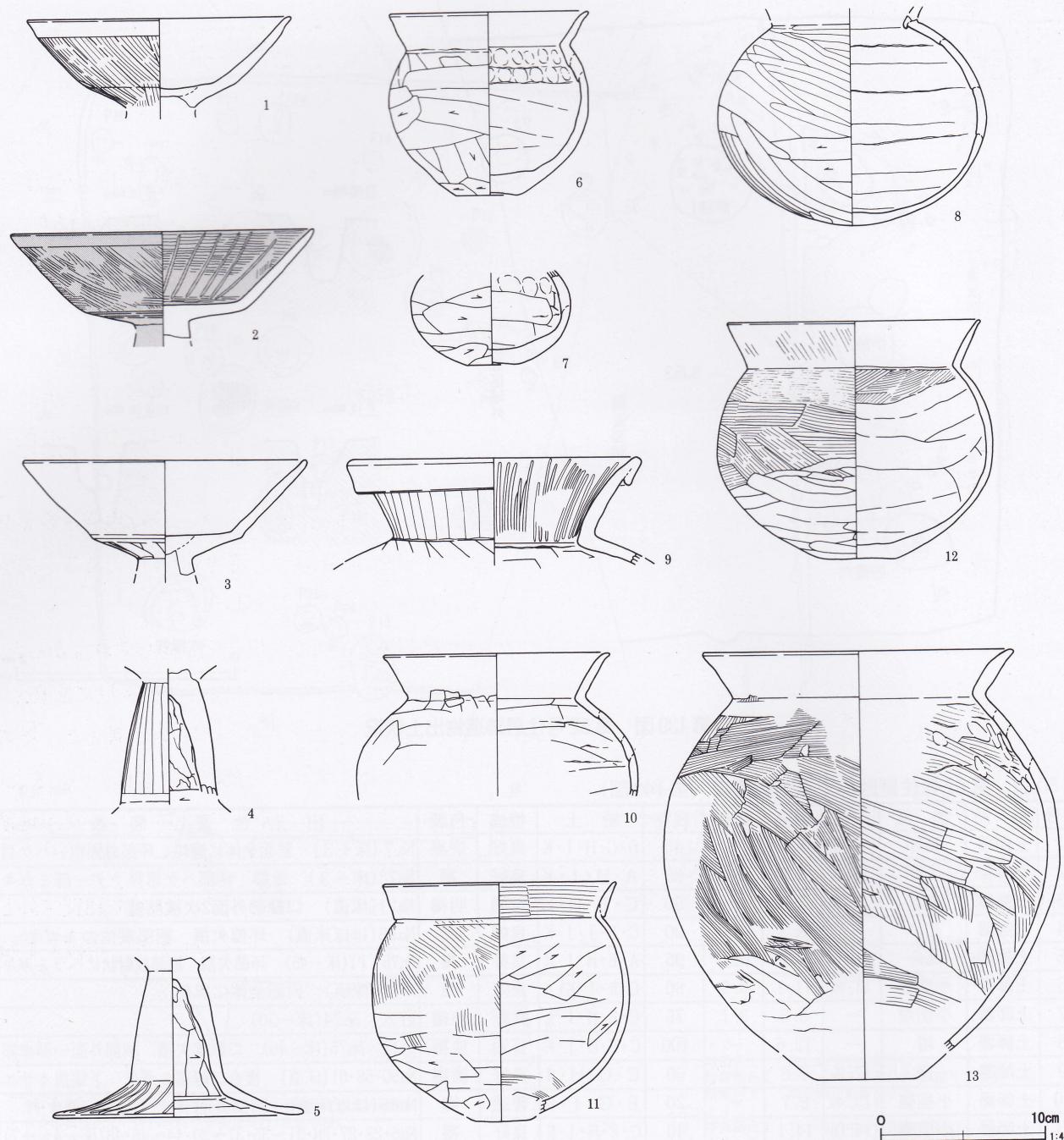
壙と重複し、いずれの遺構よりも古い。

平面形は方形と推定されるが、南側コーナー部が検出されたのみで、全体像は不明である。残存規模は長軸長 2.70 m、短軸長 1.92 m、深さ 0.15 mである。主軸方位は N-37°-W を指す。

床面の詳しい状況は不明確であるが、地形に沿つて若干東に傾斜していた。硬化面は観察されなかつた。

覆土はロームブロック混じりの褐色土を基調としており、第48号住居跡の埋土よりも明るい色調であった。人為的に埋め戻された可能性もある。

カマド・貯蔵穴などの付属施設は検出されなかつた。出土遺物も検出されず、時期は不明であるが、第48号住居跡との関係から7世紀前半以前に溯ることは確実である。



第140図 第52号住居跡出土遺物

第54号住居跡（第74図）

第54号住居跡はN-9・10、O-10グリッドに位置する。谷部に移行する地形変換点付近に立地している。重複する第28号住居跡・第49号住居跡、第16号土壙、第10・15号溝跡など全ての遺構に切られており、攪乱の影響も受け遺存状態は悪い。

平面形は方形と推定される。規模は長軸長6.12m、短軸長6.00m、深さ0.18mである。主軸方位はN

-37°-Wを指す。

床面は地形に沿って南東方向に傾斜していた。部分的に硬化面を形成しているが、全体的には軟質である。

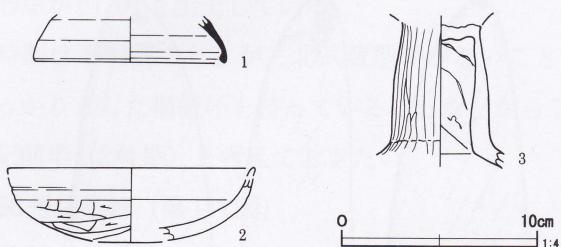
覆土はローム粒子混じりの明褐色土から褐色土を基調としていた。

カマドまたは炉跡は検出されなかった。

貯蔵穴は不明確であるが、重複する第49号住居

第51表 第54号住居跡出土遺物観察表 (第141図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	出土位置・備考
1	須恵器	蓋	(9.6)	2.4	—	5	I・K	良好	灰	P5 湖西産 坏H蓋
2	土師器	坏	—	3.3	—	15	A・G・H・I	良好	褐	P2 口縁部を欠損
3	土師器	高坏	—	7.2	—	75	A・I・K	良好	明褐	



第141図 第54号住居跡出土遺物

跡P1と重複する土壙が貯蔵穴となる可能性が高い。第49号住居跡掘り方調査時に検出されたこと、壁ラインを復元すると、東コーナー部に位置することがその根拠となる。平面形は橢円形で規模は長径96cm、短径75cm、深さ34cmである。

ピットは多数検出されたが、大半は中・近世の所産である。住居跡の主柱穴はP1～P4と、P23・P18・P8・P5の2組を抽出することが可能である。おそらく一度建て替えられたと考えられる。

出土遺物は非常に少なく、土師器坏・高坏、須恵器蓋の破片が出土した(第141図)。1は湖西産の須恵器坏H蓋である。2は土師器模倣坏と思われる。口唇部を欠く。3は土師器高坏脚部である。

時期は不明確である。覆土の様相と貯蔵穴が伴うとするならば、古墳時代中期和泉期の住居跡である可能性が高いであろう。第141図3の高坏が遺構に伴う遺物と考えられる。

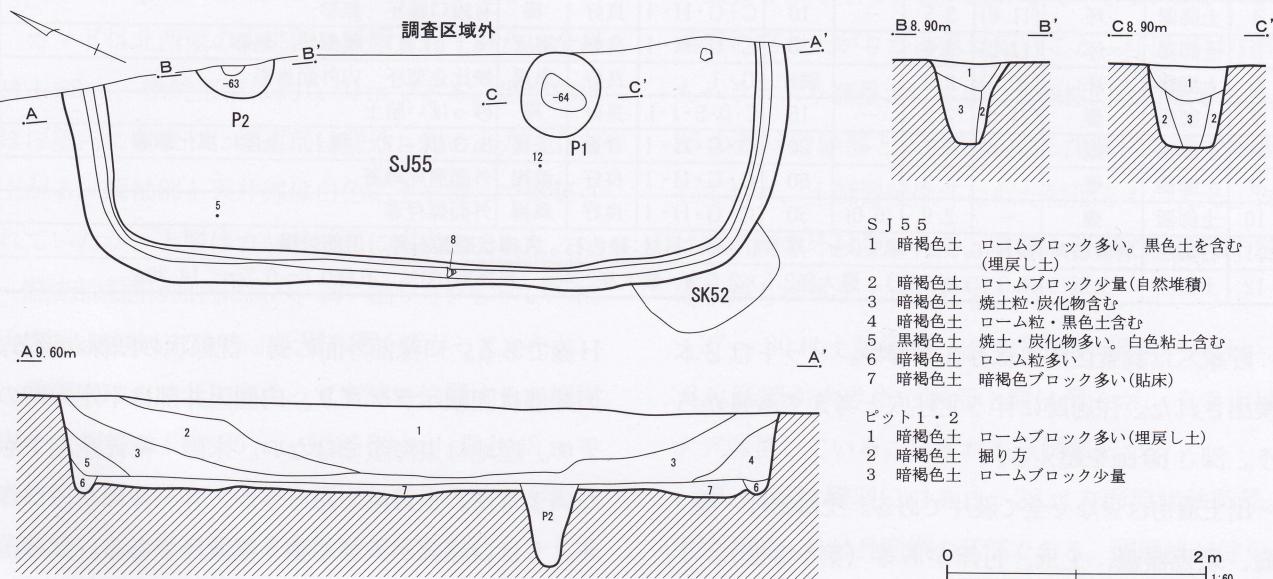
第55号住居跡 (第143図)

第55号住居跡は第20次調査区北端のA・B-4グリッドに位置する。遺構の大半は調査区外に延びている。

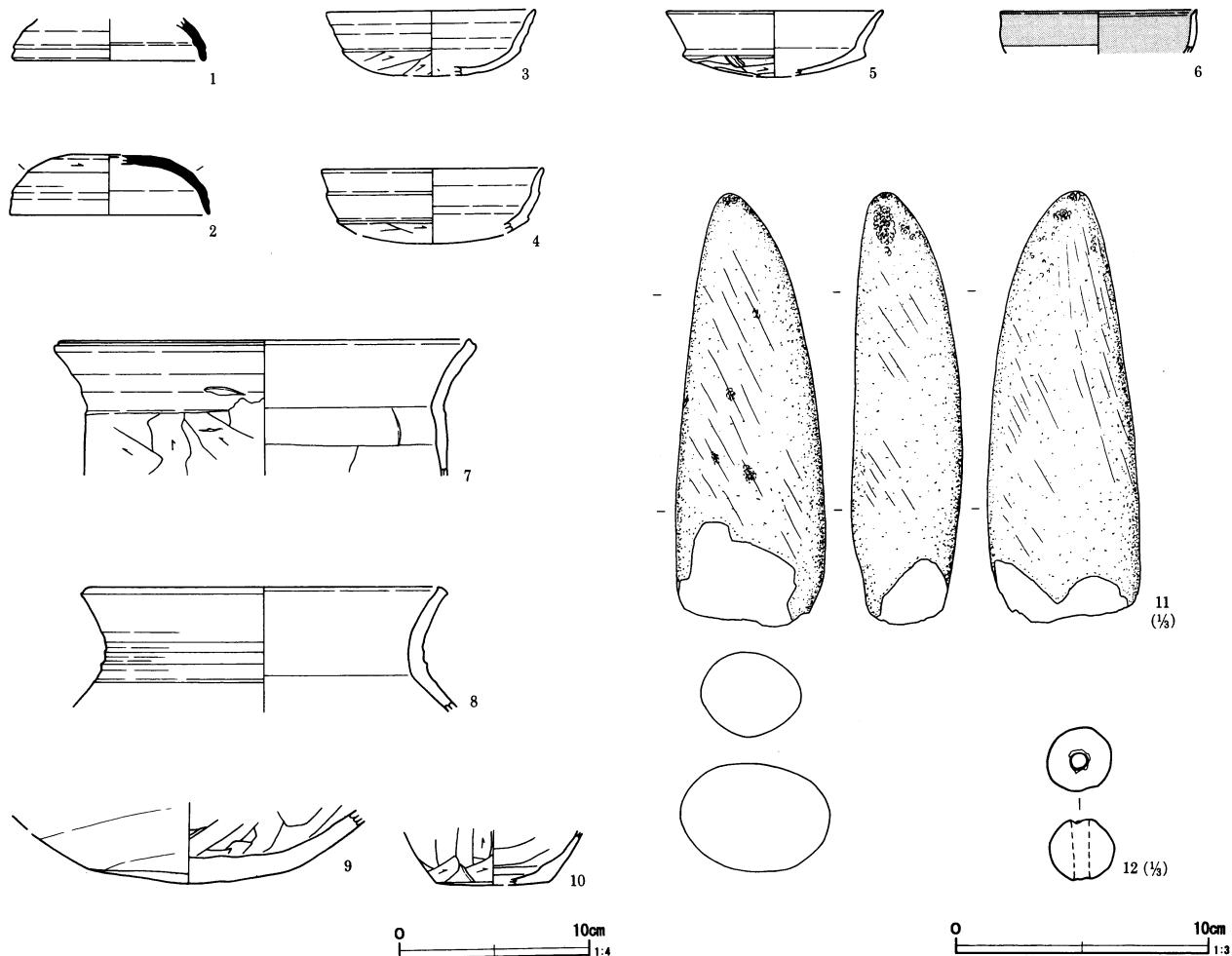
平面形は方形系と推定される。残存規模は長軸長5.61m、短軸長1.80m、深さ0.64mである。主軸方位はN-25°-Wを指す。

床面は平坦であるが、硬化面は認められなかった。覆土は第1層中にロームブロックが多量に混在し、人為的に埋め戻された可能性が高いと考えた。その下層は自然堆積と考えても良いかもしれない。また、西壁際の中央部付近に焼土と炭化物ブロックが堆積していた。投げ込まれたものか。

カマドは検出されなかったが、北壁の調査区外と接する位置に白色粘土が堆積しており、隣接する位置にカマドが存在した可能性がある。



第142図 第55号住居跡



第143図 第55号住居跡出土遺物

第52表 第55号住居跡出土遺物観察表 (第143図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	
										床直	床直
1	須恵器	蓋	(10.0)	2.2	—	15	I・K	良好	灰	坏H蓋	湖西産か
2	須恵器	蓋	(10.6)	3.2	—	25	G・I	良好	灰	坏H蓋	産地不明 (上野産?)
3	土師器	坏	(11.0)	3.4	—	20	G・I	良好	褐	有段口縁坏	無彩
4	土師器	坏	(11.6)	3.5	—	10	C・G・H・I	良好	褐	有段口縁坏	無彩
5	土師器	坏	(11.2)	3.6	—	30	C・G・H・I	良好	褐灰	No.1 (床直)	模倣坏 無彩
6	土師器	坏	(10.3)	2.3	—	破片	G・I	良好	黒褐	統比企型坏	内外面赤彩
7	土師器	壺	(21.6)	7.2	—	15	C・D・E・I・L	良好	褐	砂っぽい胎土	·
8	土師器	壺	(18.6)	6.7	—	20	C・G・H・I	普通	淡褐	No.2 (床+17)	覆土 全体に風化顯著
9	土師器	壺	—	4.3	—	60	C・G・H・I	良好	淡褐	外面磨耗顯著	
10	土師器	壺	—	2.9	(6.0)	30	C・G・H・I	良好	黒褐	外面煤付着	
11	石製品	磨製石斧	長さ16.9cm 幅5.9cm 厚さ4.3cm	石材:緑色石	乳棒状磨製石斧	刃部欠損					
12	土製品	土玉	No.3 (ほぼ床直)	最大径2.5×2.6cm	最大高2.4cm	残存率100%	孔径0.6~0.7cm	14.38g			

貯蔵穴は調査区内には存在しない。ピットは2本検出された。住居跡に伴う主柱穴と考えても良からう。深さ60cmを超える。

出土遺物は少なく全て破片である。土師器坏・壺・壺、須恵器蓋、土玉、石斧がある (第143図)。1は須恵器坏H蓋。湖西産と思われる。2は須恵器坏

H蓋である。口縁部外面に弱い沈線状の凹線が巡る。天井部は回転ヘラケズリ。内面天井部は不定方向のナデ。産地は東海産ではない。末野・南比企産でもないようだ。上野産であろうか。3・4は有段口縁坏。5は口縁部が大きく開く模倣坏である。武藏国に通有の器形ではない。東関東系か。床面出土。6

は続比企型坏で、赤彩される。7・10は甕、8・9は壺である。

11は乳棒状石斧。刃部を欠いている。縄文時代に帰属する。混入品。12は土玉。図化した以外に、楕形滓が61.64 g出土している。

時期は不明確であるが、北武藏型坏がないこと、しっかりとした模倣坏を持っていることなどから7世紀前半(2/4期)と考えておきたい。

#### 第56号住居跡(第144図)

第56号住居跡はB-3・4グリッドに位置する。第61号住居跡と重複し、本住居跡の方が新しい。

また、壁溝が二重に巡る箇所があることから、一度建て替え(拡張)したことが判明した。建て替え前の住居跡を第56b号住居跡、建て替え後のそれを第56a号住居跡と呼称する。

第56a号住居跡は第56b号住居跡の北西壁と南西壁を利用する形で拡張していた。平面形は方形で、規模は長軸長5.68 m、短軸長5.34 m、深さ0.50 mである。主軸方位はN-30°-Wを指す。

床面は概ね平坦であるが、地形に沿って僅かに北東方向に向かって下がる傾向は見られた。カマド前面から主柱穴の内側を通り、南東壁に向かう部分が非常に硬く踏み固められていた。

覆土は第1層中にロームブロックや焼土が多量に含まれ、人為的に埋め戻された可能性がある。

カマドは北西壁の中央部に設置されていた。全長は1.68 m、燃焼部幅は約0.50 mである。燃焼部はほぼ壁内に収まり、煙道部は壁外、斜め上方に立ち上がる。両袖部と天井部は白色粘土を積んで構築されていたが、上層はカマド前面に流出していた。

燃焼部底面は皿状に窪み、薄い掘り方をもっていた。火床面は被熱しており、灰層も薄く広がっていた。

貯蔵穴はカマドに向かって右脇に位置する。楕円形で、規模は長径85 cm、短径60 cm、深さ48 cmである。上層にはカマドから流出した白色粘土が流れ込んでいた。ピットは9本検出された。P1-P4が本住居跡に伴う主柱穴である。

壁溝は全周する。深さは4~16 cmである。

第56b号住居跡は方形で、規模は長軸長5.22 m、短軸長4.80 m、深さは不明であるが、第56a号住居跡とほぼ同じかやや浅い程度であったと思われる。

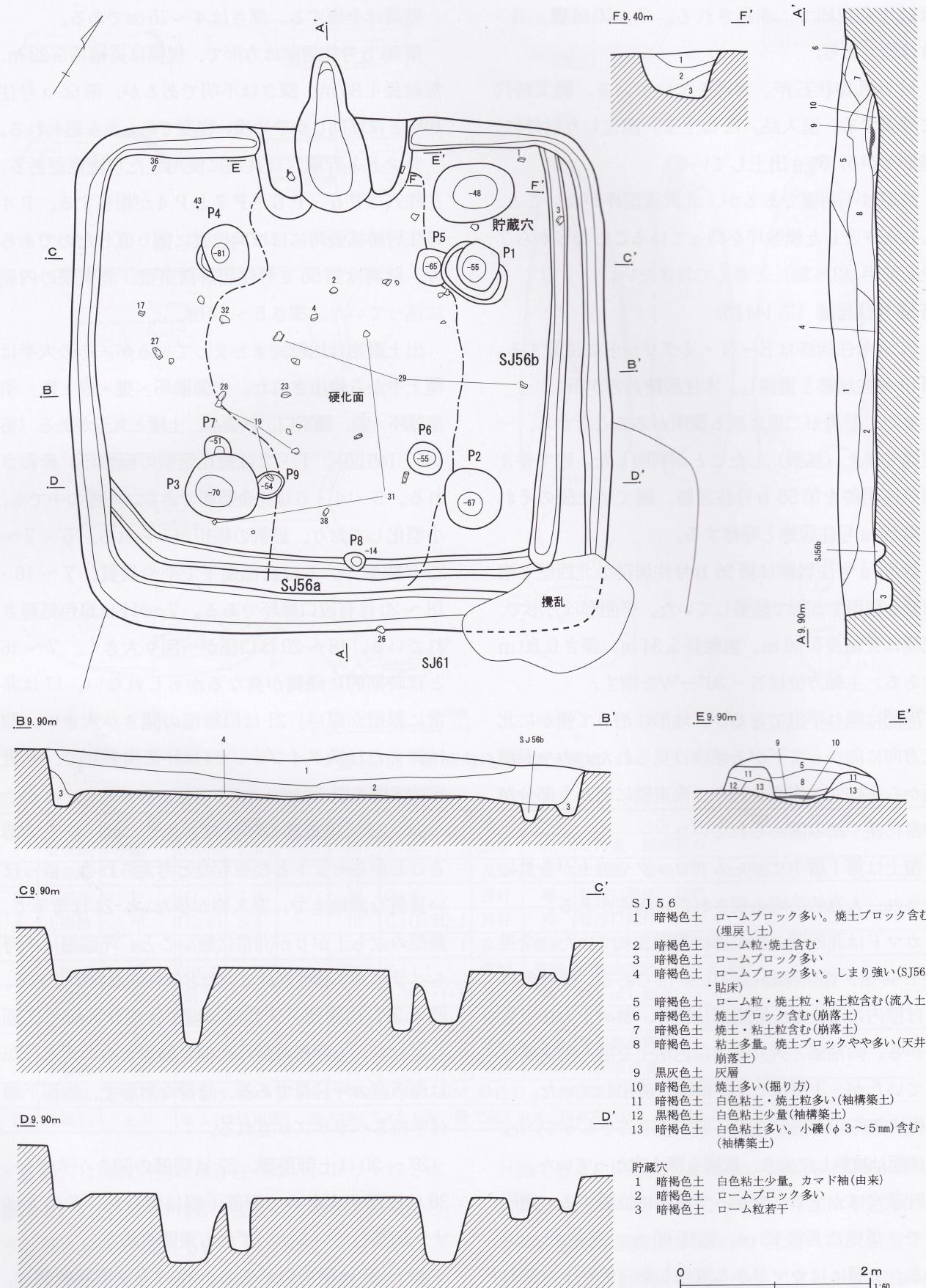
カマドと貯蔵穴は共通に使用した可能性がある。主柱穴はP5・P6・P7とP4が相当する。P4は住居跡拡張時にほぼ同位置に掘り直したのである。壁溝は第56a号住居跡南東壁、北東壁の内側に巡っていた。深さ5~17 cm。

出土遺物は比較的まとまっているが、その大半は覆土中から検出された。土師器坏・甕・壺・瓶、須恵器坏・蓋、轆羽口、鉄製品、土錐と丸玉がある(第145・146図)。1・2は続比企型の模倣坏。赤彩される。3・4・6は比企型坏である。同種の中でも、小型化しており、最新の様相がみられる。5・7~23は模倣坏。5は底部扁平でやや異質。7~16・18~20は有段口縁坏である。7~11は黒色処理されている。18~20は口径が一回り大きく、7~16とは時期的に帰属が異なるかもしれない。17は非常に器壁が厚い。21は口縁部の開きが大きい。22は鉢または楕タイプか。23は坏蓋模倣坏で、6世紀前半頃の混入品か。

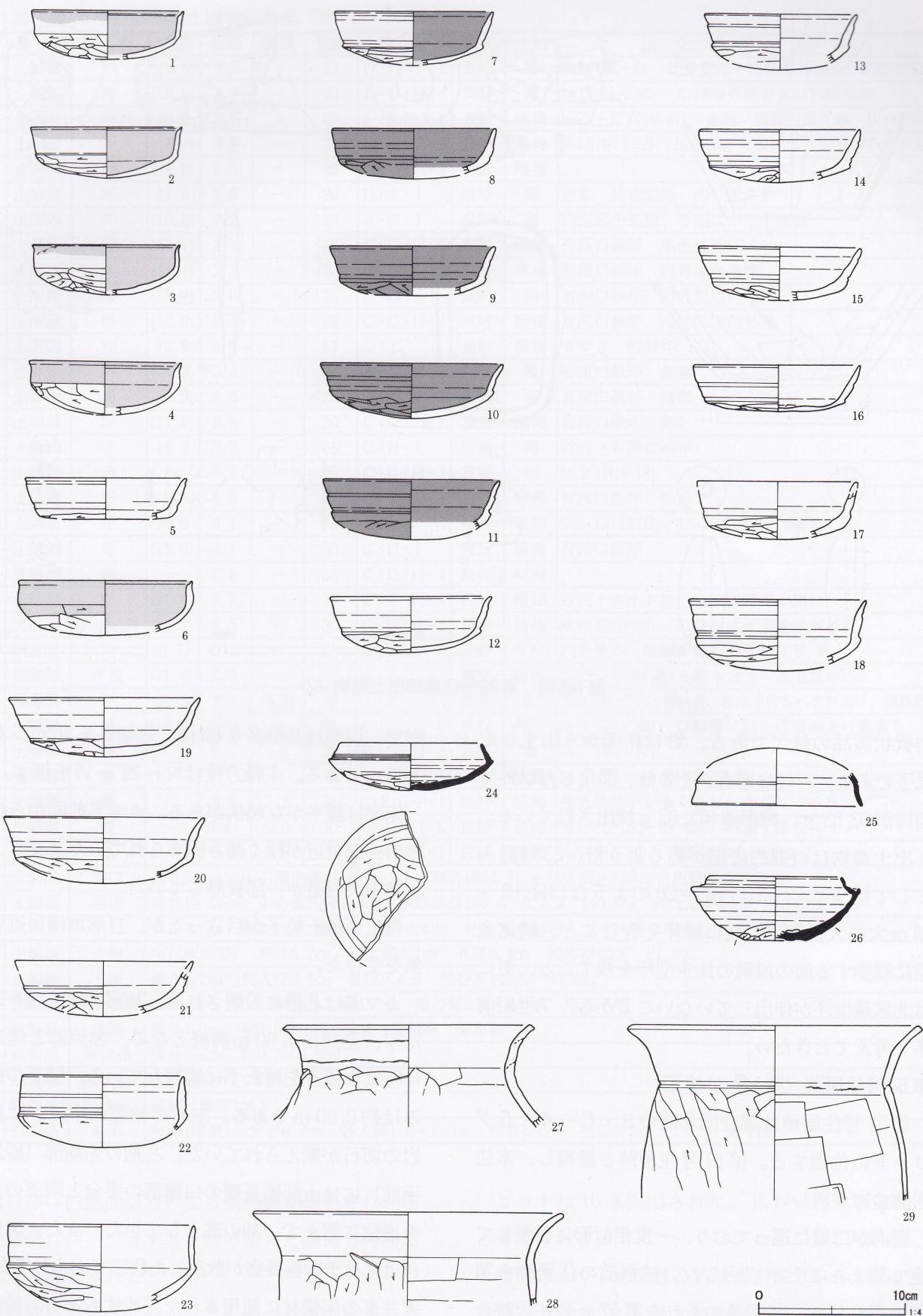
24・25は須恵器の坏H身と蓋で、同一胎土であることからセットとなるものと考えられる。砂っぽい良質な素地土で、混入物が少ない。24は薄手で、蓋受の立ち上がりが非常に短いこと、坏底部は手持ちヘラケズリ調整される点など個性的な特徴である。25の蓋は口縁部と天井部の境を沈線状の稜で区画しており、土師器模倣坏に似た器形ともいえる。26は湖西産の坏H身である。身深な器形で、体部下端は手持ちヘラケズリされる。

27~30は土師器甕。27は胴部の開きが大きい。30は底部が大きめで胴部下端は削るが、その上はナデ調整している。いずれも東関東系か。

33~35は轆羽口である。38は方形環状鉄製品。用途不明。39は長頸鎌の茎部である。関鎌被が付く。40は角棒状製品。41・42は同一個体と思われ、薄



第144図 第56号住居跡



第145図 第56号住居跡出土遺物 (1)